

# 大密儀

LOS MISTERIOS MAYORES

サマエル・アウン・ベオール

## 第 1 部

### 第 1 章

#### エデンの園

- 1 エデンの園とはエーテル界である。エデンの園とは性そのものである。
- 2 エーテル界は性力のありかである。エーテル界とはエデンの園である。我々は性の扉を通してエデンの園から出た。ただその扉を通してのみ入園できる。
- 3 エデンの園には、まちがった扉を通して入れない。出た扉を通して中に入らねばならない。
- 4 エデンの園の支配者は主エホバである。主エホバはエデンの園に住む。エーテル界はエデンの園なので、主エホバはエーテル界に住む。エーテル界は樂園である。
- 5 エーテルは自然の第五要素である。遠くの山々に見られる青色は、エデンの園のエーテルである。将来、エーテル界は空中に見え、触れられるであろう。
- 6 将来、火、風、水、地のエレメンタルの神々は空中に我々の目で見え、手で触れられるであろう。あらゆるものはエーテルから生じ、エーテルにもどる。エーテルはエデンの園の果樹園である。

#### 神殿の十字旗

- 7 <sup>グラン・オブラ マテリヤ・プリマ</sup>大作業の原料はクリストニックな精液である。
- 8 精液は生命の清水である。精液は、存在するものすべての水である。精液は『創世記』の水である。水がないと草木は枯れて死ぬ。草木の水は植物の精液である。
- 9 植物の精液は葉、花、実に変わる。
- 10 無数の物質の組み合わせは驚異的である。
- 11 海は惑星地球の精液である。あらゆるものは海から生じ、海にもどる。我々は性腺に

海を持っている。我々の精液の水には生命の神秘が隠されている。大陸は海から出現したが、海にもどるであろう。我々は最初の瞬間の精液から生じた。ありとあらゆる動物は精液の水に、その存在の秘密を宿す。人間にはただ、生命の清水の物質的外観を形成する物理的素材の粗雑な粒子が見えるだけである。

12 我々は生命の海の水をエデンの園で知っている。

13 エデンの園では『創世記』のその水が栄光に輝いているのが見られる。大作業のその原料から全被造物が生じた。無数の物質の組み合わせは驚異的である。神殿の聖域には生命の清水をたたえた聖器が必ずいる。それが神殿の十字旗である。その永遠の生命の水を飲む者は、いつまでも渴くことがないばかりか、その腹から清水が川となってわき出であろう。

14 それが「アムリタ」〔不老不死の甘露〕の水である。それが東洋人のムーラブラクリティである。偉大な夜になると、宇宙全体はその精液になるであろう。宇宙は水から生じたし、水にもどるであろう。

15 生命の清水は神殿の十字旗である。『創世記』の水は月の光線によって、また水のエレメンタルの神々によって支配されている。

## 楽園の白鳥

16 ハスの花の上にとまった白鳥カラ・ハムサ Kala-Hamsa は、生命の清水の上に浮かぶ。カラ・ハムサとは「私は彼である。」「私は彼である。」「私は彼である。」という意味である。言い換えると、「神の魂は水面をただよう。」と言える。

17 神は永遠の海の上で呼吸する。神は我々自身の中にいて、我々自身の中に神を見いだせる。私は彼である。私は彼である。私は彼である。

18 神は愛である。愛は広大な大洋の一滴一滴の内にあり、それらを超えて存在している。神はただ性と愛に見いだされるにすぎない。白鳥は愛を表す。ただ愛は愛で燃えるだけである。白鳥は愛するために生まれた。

19 つがいの一羽が死ぬとき、もう一羽は死ぬほど悲しむ。

20 エデンの園で白鳥は天使の食卓の給仕をする。白鳥は、神々がダイヤの杯で飲む、言語に絶する御馳走を、汚れ一つない純白のそのうの中でこしらえる。無限の物質の組み合わせは驚異的である。我々が性腺に宿す精液は、広大な大洋の無限の物質である。この無限の物質のいろいろな組み合わせが、草木、花、実にもちあふれた大陸に変わる。

21 この無限の物質のいろいろな組み合わせが、全被造物、鳥、怪物、人間、獣のもととなる。あらゆるものは『創世記』の精液の水から生じる。それらの水に愛は息づく。パルツィパルはモンサルバット城の近くで白鳥を殺してしまった後、自責の念に駆られて弓を壊した。

22 レダと交わった白鳥は、愛の魅力を我々に思い出させてくれる。愛の白鳥は生命の水を受胎させる。愛の火は広大な大洋の中から生命を発生させる。水は火の住処である。性の火は生命の清水の中に眠る。愛の恍惚のうちに結合した火と水は全宇宙を生み出した。精液の水の中に愛の火が息づく。愛の火は生命の水を受胎させる。生命の白鳥。白鳥は愛を象徴する。白鳥はただ愛のみを糧とする。つがいの一羽が死ぬとき、もう一羽は悲しみに打ちひしがれる。

### エデンの園の性行為

23 エデンの園では純潔のみが広く行き渡る。エデンの園では性はエロヒムの光と同じように純粹である。しかしエデンの園では性行為も存在する。草木と花、樹木と神々、鳥とハ虫類、動物と人間、あらゆるものが性から生じる。性なくして、どんな創造も不可能である。

24 植物には人間のように肉体、霊、魂がある。

25 植物の霊は自然のエレメンタルである。あらゆる草木、あらゆる樹木、あらゆるハーブにはそれ自身の固有の個性がある。

26 草木の一本一本は肉体、霊、魂をもつ個体である。

27 これらの草木はエデンの園の無邪気な天使である。エデンの園のエレメンタルである。これらのエレメンタルは、植物学者がラテン語名で分類する植物の科で組織される。

28 植物の魔術は草木のエレメンタルの操り方を我々に教えてくれる。エデンの園には、これらの植物の科に対応する神殿と神々が存在する。エデンの園の神々は自然のエレメンタルの王である。どの植物も愛と性なくして実を結ぶことができない。植物エレメンタルも愛し方を知っている。エデンの園のこれら言語に絶する生き物のウェディングベッドは、草木の根でできている。植物エレメンタルは性的に結びつくが、精液の射出を避けるため、折よく離れるすべをわきまえている。性的に関係を持てば、精液を射出しなくても種子は子宮にいつも進む。

29 そのように雌株は受精し、豊かになった内なる生命力が実をもたらすのである。無限の物質の組み合わせは驚異的である。生命エーテルはそのとき植物の生殖の道具として役立つ。

30 化学エーテルは植物の変化を可能にする。化学元素は変換、結合、解離して、植物はおいしい実がたわわになる。そのように生命が生じる。発光エーテルは花、実、すべてのものを言いようのない色に染める。あらゆるものが日光のもとで輝く。反射エーテルはその場合、自然が自己再生する言語に絶する鏡である。そのように生命はエデンの園の奥から生じる。エデンの園の山々は空のように青く、水晶のように透明である。人間が植物のように生殖していたころ、エデンの園に住んでいた。そのとき生命の清水の川からミルクと蜜がわき出していた。

31 人間は生命の偉大な普遍的言葉を話し、火、風、水、地は人間に従っていた。自然全体が人間にひざまずき仕えていた。人間は精液を射出していなかったからである。男性は妻と性的に結びつき、射精を避けるためオルガスムスの前に離れていた。

32 性行為の間、月のヒエラルキー（天使団）は種の生殖のため精子を一個だけ利用していた。精液をこぼさなくても、精子一個は容易に性腺から抜け出す。そのように女性は受精し、生命が生じる。これが無原罪の御宿りである。

\*無原罪の御宿り…聖母マリアがその母聖アンナの胎内に宿った瞬間から原罪を免れていたこと。

33 エデンの園には、乙女座と関係する言語に絶する乙女がひとり住む。この天使は月の光線と働く。彼女は無原罪の御宿りである。楽園の原始時代からのエロヒムである。

34 エデンの園にもどる者は彼女を知っている。なぜなら大変清らかなこのエロヒムは無原罪の御宿りを支配するからである。

35 愛に祝福あれ。神は完全なるカップルの頭上に輝く。

## 第 2 章

### ルシファー

1 ランプを油で満たすなら、神殿はいつまでも光にみちているであろう。ランプの油をこぼすなら、火は消え、涙と歯ぎしりのみが聞こえる外の深い闇の中に沈むであろう。精液は火のありかである。精液をこぼすと火を失い、深い闇に沈むであろう。精液はランプの油である。精液をこぼすとランプは消え、ルシファーの闇の中に沈むであろう。別の表現で言うと、主エホバは仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」〔『創世記』2：16-17〕。エデンの園ではエレメンタルは精液をこぼさない。我々が精液をこぼすときランプは燃料切れとなり、そのとき炎は消え、ルシファーの闇の中に入る。精液はランプの燃料である。

2 どんなランプも燃料なしでは燃えることはできない。

3 火のないところに光はなく、その場合には闇が統治する。

4 哀れである、精液をあえてこぼすエデンの園の住人は。

5 燃料切れのためランプは消え、ルシファーの闇の中に沈むであろう。善悪の知識の木とは性のことである。人間が禁断の木の実を食べたとき、エデンの園から追放された。アダムとはエデンの園の男性全員であった。イブとはエデンの園の女性全員であった。

6 言い換えると、アダムとイブがランプの油をこぼしたとき、油切れのためランプは消え、そうして彼らは深い闇の中に取り残された。それが楽園追放であった。

7 聖霊の火は魔力をもつ蛇である。

8 聖霊の火はあらゆる命の泉クンダリーニーである。

9 その火は精液の中に封じられている。

10 精液をこぼすなら火は消え、我々は闇の王国に入るであろう。人間が精液をこぼしたときルシファーの王国に入った。ルシファーはおそろしく邪悪な悪魔である。ルシファー崇拝者たちは、ルシファーに従い、後についていく<sup>レキヤン</sup>群衆である。

11 性的情欲はルシファーにもとづく。人間がルシファーに誘惑されるがままになったとき、ランプの油をこぼし、闇に取り残された。そのとき性の扉を通してエデンの園から出て、性の扉を通してルシファーの王国に入った。

12 エデンの園にもどりたいたなら、ランプを油で満たし、灯すだけでいい。そのときルシファーの王国から出て、エデンの園に入る。闇から出て、光に入る。

## エホバ、ルシファー、クリスト

13 ルシファー崇拜者 Luciferic man とエデンの園の人間 Edenic man が存在する。ルシファー崇拜者は精液をこぼす。エデンの園の人間は精液を決してこぼさない。人類はルシファー崇拜者である。ポーラー、ハイパーポーリアン、レムリア人種の太古の人類はエデンの園に住む人間であった。エデンの園の状態とはひとつの意識状態である。

14 ルシファーの状態とは、もうひとつの意識状態である。エデンの園の人間は平凡な人間のような生身の体を持てる。

15 ルシファー崇拜者は平凡な人間のような生身の体を持っている。エデンの園の状態とルシファー状態は意識状態である。エデンの園はエーテル界層である。人間がエデンの園を出たとき、その意識はある原子層、ルシファーの領域に沈んだ。人間的霊はそれ自身の原子地獄に沈んで、そのパワーを失った。それが楽園追放であった。

16 そのようにしてエデンの園の人間は死に、ルシファー崇拜者が生まれた。

17 それで主エホバはこう仰せられたのである。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」。

18 古代レムリアの神殿の巨大な中庭で、男性と女性は創造のため性的に結合していた。性行為はエロヒム達に導かれた。精液の射出を避けるため、男性と女性はオルガスムス〔痙攣〕の前に離れていた。

19 エロヒム達は創造のため一個の精子と一個の卵子だけを利用していった。一個の精子は微視的できわめて小さいため、精液をこぼさなくても性腺から容易に抜け出せる。そのようにエデンの園の人間は生殖する。

20 そのように無原罪懐胎の子供が生まれる。これが無原罪懐胎である。ルシファーに誘惑されて、人間は誘惑に負けた。ルシファーは赤血色のチュニックを着た黒魔術師である。

21 ルシファーはチベットのボン教徒とドゥーパ dugpas [ラマ教紅帽派のことか?] のように頭を紅帽でおおう。ルシファーの淫らな力が人間に獣欲を目覚めさせた。そのとき男性と女性は精液を射出しだしたのである。レムリアの諸部族は、こういうわけで神殿から追い出された。

22 かつては意気揚々と脊髄管を上っていたクンダリニーは、そのとき尾骨に下降し、ムーラダーラチャクラに閉じ込められた。神殿のランプは消え、人間は深い闇に陥った。そのようにエデンの園の人間は死に、ルシファー崇拜者が生まれた。人間が禁断の木の実を食べたとき、主エホバは仰せられた。「見よ。人は『われわれ』のひとりようになり、善悪を知るようになった」〔『創世記』3：22〕。もし人間が知識の木の実を食べなかったら、完全に無邪気になるが、天使の状態まで上昇していたのに。エデンの園での我々と主エホバとの関係は、手の指と脳との関係に等しい。ルシファーは我々に自主性と独立性を与えた。

23 禁断の木の実には善悪の知識を我々に気づかせた。この知識はきわめて深遠である。悪の中の善があり、善の中の悪がある。どんな善にも悪がいくらかあり、どんな悪にも善がいくらかある。祈りの香煙の中にも罪がひそんでいる。祈りの香りの中にも罪が隠されている。

24 悪人に美德がたくさんあり、高德者に悪がたくさんある。悪の中の善と善の中の悪とを認識する者は、宇宙的正義の恐ろしい剣を受け取る。天使は善悪の知識を知っている。天使は完全なる人間である。天使もエデンの園から出て、エデンの園にもどった。それゆえ天使なのである。天使は我々のような人間であった。我々はエデンの園から出たが、善悪を知った。

25 我々はエデンの園から出たが、自主独立を獲得した。

26 エデンの園の統治者エホバは仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」。ルシファーは女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです」〔『創世記』3：4-5〕。そして人間が禁断の木の実を食べたとき、エホバは仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るようになった」。そのように我々は智慧を獲得し、そのように自主独立を勝ち取った。そのように善悪の知識に気づいた。

27 善悪の知識を知って、神々ようになるため、今こそエデンの園にもどるべきである。神々になるため今こそエデンの園にもどるべきである。出たとき通ったのと同じ扉を通してエデンの園に入らねばならない。我々は性の扉を通してエデンの園から出たが、その扉を通して、はじめてエデンの園にもどれるであろう。

28 エデンの園とは性そのものである。エデンの園に入りたいたなら、エデンの園の古くからの性の方法にもどらねばならない。性の扉を通して入らねばならない、その扉を通して出たのだから。エデンの園に入る扉は他にないし、エデンの園から出る扉も他にない。出た所から入らねばならない。それが法である。エデンの園から出たとき人間は自然の原子

地獄に沈んだ。クリストがいなかったら、我々が奈落から出るのはきわめて困難だったであろう。幸いなことに我々には救世主がひとり送られた。その救世主がクリストであった。

29 聖なる父のところに戻るため、今、我々は自分自身にクリストを具現せねばならない。子を通して以外、誰も聖なる父のところに到達しない。

30 あがないの血によってのみ、衣服を洗い、白衣を着て、出たのとまったく同じ扉を  
通ってエデンの園に入ることができる。アダムの絶対的不服従は、クリストの絶対服従と  
対照的である。

31 エホバは我々に戒律を与えた。ルシファーは我々に個人的な自主性と独立心を与え、  
クリストは我々を罪から救う。そのように神々は地上の泥から立ち上がる。

## 第 3 章 生命の木

1 そのように主エホバの裁決が果たされた。「こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣<sup>つるぎ</sup>を置かれた。〔『創世記』 3 : 24〕。

2 エデンの園の二本の木とは、善悪の知識の木と生命の木である。園のこれら二本の木はなんと根を共有する。

3 生命の木は肉体の中では脊柱で表される。知識の木は性器で表される。エデンの園の木は二本とも、まさしく同根である。神は生命の木への道を守るため、ケルビムと炎の剣を置かれた。もし人間が生命の木のおいしい実を食べることができたら、今ごろは姦淫する神々がいたであろう。それは呪いの中の呪いだっただろう。最もひどい冒瀆。とんでもないことである。

4 宇宙的正義の炎の剣は、炎々と脊すように恐ろしく回転し、生命の木への道を守る。

5 生命の木とは「本質的存在」のことである。

6 さてインティモが魂、本質的存在、生命の木だと知るべきである。インティモは「内なるキリスト」の最愛の子である。内なるキリストはインティモ自身が生じた光線である。内なるキリストは聖なる父と一体である。

\*インティモ Intimo…英語版では「内なる自己」Inner-Self と英訳されています。

7 父、子、聖霊は完全なる三<sup>トリアド</sup>つ組である。

8 この三つ組からインティモが生まれた。インティモは六つの下位の乗り物に包まれていて、それらは混じり合わずに相互に浸透・貫入し、人間を形成する。インティモの機能と能力はすべて生命の木の実である。人間がエデンの園にもどるとき、生命の木の実を食べることができるであろう。そのときは死ぬことなく、面と向かって神を見ることができるであろう。稲妻はその人間にとって権杖として役立ち、嵐は足もとのじゅうたんとして機能するであろう。混じり合わずに相互に浸透・貫入する十種類の生命波動が存在する。それらの十の永遠なる流出物はカバラの十のセフィロト、生命の木の十本の枝である。神が人間の両手に十本の指を置いたわけが今わかるであろう。人間の十二の感覚は脊柱と関係している。脊柱は生命の木の肉体的象徴である。十二の感覚は十二個の生命の木の实である。

## イニシエーション

9 エデンの園を出たとき人間は奈落に落ちた。救世主の助けがなかったら、その奈落から出られなかったであろう。エデンの園と奈落の間には光と闇の門番がいる。

10 エデンの園の門番は生命の木への道を守る。

11 奈落の門番は誘惑するルシファーである。

12 エデンの園を出たとき、我々は自然の闇の奈落に入った。それらの奈落からはコスミック・イニシエーションによってのみ出られるにすぎない。あらゆるイニシエーションは精神的誕生である。

13 誕生したい者は妊娠のため女性の胎内に入らねばならない。そのようにして、誕生したい者は誕生する権利を獲得する。

14 イニシエーションはまったく性的である。誕生したいなら、妻と性魔術を実践する必要がある。性魔術の鍵は以下のとおり。「男根を女性の膣に挿入し、精液をこぼすことなく離れる」。

15 これがエデンの園の生き物が用いる性行為である。我々が母の胎内にいるとき、器官、感覚、臓器、腺などが発達する。性魔術を実践しているときは性的、精神的誕生の過程にあり、霊の花が発達する。そのようにして聖霊の火を目覚めさせ、我々はマスターに変わる。

16 そのように偉大なる母の胎内で我々は神々としてはられる。そのようにしてクンダリーニーを覚醒させ、神々に変わる。

17 精液を射出したとき、人間は苦悩に打ちのめされ、神秘力を失った。精液を射出したとき、人間の意識は自然の原子地獄の中に沈んだ。自然の原子地獄とはルシファーの領域である。全人類は奈落に住む。

18 奈落からまさに出ようとしているとき、そこではじめて自分が奈落に住んでいることに気づく。奈落からはただイニシエーションによってのみ出られる。十八のイニシエーション、十八の宇宙的な誕生が存在する。

19 小密儀のイニシエーションが九つ、大密儀のイニシエーションが九つ存在する。

20 イニシエーションはあなた自身の命である。イニシエーションは意識と性に関係する。我々の意識は偉大なる宇宙意識から放たれた火花である。我々は鉱物、植物、動物の意識

を持っていた。今では人間の意識を持っている。後には天使、大天使、熾天使などの意識を持つであろう。これは良い、これは悪いと言うのは簡単なことである。善悪を意識するのは大変困難である。2と2で4だと言うのはきわめて簡単である。

21 2と2で4だと意識するのは神々の問題である。アルコール飲料を飲むのは悪いことだと大酒飲みにはわかっているが、そのことを意識していない。もしそのことを意識し自覚していたら、アルコール飲料の悪癖を続けるくらいなら、大きい石臼を首にかけて、海底に身投げするほうを選んだであろう。

22 我々の意識は、本質的存在と生命のもっと高い状態に目覚めていく。意識しない知識は役立たない。無数の精神主義学徒がノーシスの本を研究する。書かれた真理に関する知的な知識は役立たない。重要なのはこれらの真理を意識することである。

23 無数の精神主義学徒は、自分が読んだ真理を意識していると信じている。あわれな人々...。彼らは間違っている...。

24 大密儀の偉大なマスターのみがそれらの真理を意識している。

25 精神主義スクールの学徒は、読んだことを繰り返すオオムであり、それだけのことである。それゆえ大切なのは意識を目覚めさせることである。インテレクトは動物的霊の一機能である。

26 意識は神の一機能である。山がひとつあり、その底が奈落である。奈落から脱出した者は山に登らなければならない。頂上に出るには道が二つある。ひとつめの道は山をラセン状に取り巻いていき、そのように頂上にいたる。ふたつめは狭く細い困難な道で、まっしぐらに頂上にいたる。

27 狭い道はイニシエイトのみが登る。ラセンの道はとても長い。細い困難な道はもっと短い。こちらがイニシエーションの道である。かつて偉大な密儀スクールが存在した。エジプト、エレウシス、トロイ、ローマ、カルタゴ、バビロニアの密儀、アステカ族、インカ族、ドルイド教徒などの密儀が存在した。当時は特権階級の祭司のみがイニシエーションに参入できた。

28 我らの主「キリスト」は全人類のためイニシエーションの道をおおびらに開示した。

29 主の受難ドラマのすべてが密儀神殿の中で演じられていた。キリストの偉大さは、エルサレムの古い石畳道の上でこのドラマを公然と演じたところにあった。そのようにして全人類のために神殿の扉を開いたのである。「求めなさい。そうすれば与えられます。たたきなさい。そうすれば開かれます〔『マタイ』7：7、『ルカ』11：9〕。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです〔『マタイ』7：14〕。私を

捜す千人のうち、ひとりが私を見つける。私を見つける千人のうち、ひとりが私に従う。私に従う千人のうち、ひとりが私のようになる」。

30 暗黒時代が到来したとき、物質界の密儀スクールは閉鎖した。今やそれらのスクールを内側に、我々自身の心の奥底に捜さないといけない。九つの小密儀を昇段した者だけが、大密儀に参入できる。

31 人々は神の子を覚えている、人の子を覚えていない。聖なるマスターは神であり、人間でもある。聖なるマスターはイニシエーションの道を全人類に切り開いた。我々全人類に道を切り開くため、道を踏破しないといけなかったのである。彼は完全なる人間であった。神であった。

32 完全無欠の道は愛と法の畏怖である。

### 意識年齒

33 内的世界には年代順の時間は存在しない。内的世界では人生は永遠の瞬間である。時間を語るときは「意識状態」を述べたい。

34 カバラではカバラ数を得るため数同士を加える。たとえば1956年のカバラ数が何かを知りたいなら、この数を1, 9, 5, 6に分解し、合計すると21になる。さらに2と1を加えて3、つまり数字3がこの年のカバラ数である。マスターが3百歳だと言うなら、3, 0, 0というようにこの数を分解し、その合計は3になる。

35 言い換えると、そのマスターは大密儀の第三イニシエーションを受けている。マスターが340歳だと言うなら、マスターは大密儀の第三イニシエーションを受けていて、そのうえ40歳つまりその程度、大密儀の第四イニシエーションに進んでいることを言いたいのである。弟子が80歳だと言うなら、その数を次のように分解しよう。 $8 + 0 = 8$  つまり弟子は小密儀の第八イニシエーションを受けている。小密儀は10歳から90歳まで、大密儀は百歳から9百歳までである。神々の年齢は千歳以降である。「絶対」の言語に絶する至福にひたるには、神聖な30万歳になる必要がある。

36 たとえもし5百歳のマスターが6百歳になりたいなら、そのときは生まれる権利を獲得するため女性の胎内に再び入らねばならない。そのようにして6百歳になって生まれる。つまり6百歳のマスターとして成長すべく、性魔術を実践せねばならないということである。

37 性力は器官、腺、臓器、神経などを形成する力を持っている。透視、透聴、テレパシーなどの能力を開く力を持っている。霊の蓮華をみな開発する力を持っている。母の胎内に入って、はじめて、生まれる権利を獲得する。

38 性魔術によってのみ生まれる権利を獲得すると我々エデンの園の住人は断言する。この道に沿わないものはすべて、残念ながら時間の無駄である。

39 我々は性の扉を通してエデンの園から出たが、ただその扉を通してのみ入園できる。エデンの園とは性そのものである。

40 意識年齢は性にもとづく。

\*〔訳注〕

九段階の小密儀のイニシエーション…各10歳

九段階の大密儀のイニシエーション…各百歳

八段階の金星のイニシエーション……各千歳

第一ロゴス、ケテルに帰還……………10万歳

第三の山を完成しアインソフに帰還…30万歳。イエス・クリストは30万歳である。

## 第 4 章 アストラル・トリップ

- 1 人間は肉体、霊、魂の三つ組である。霊は魂と肉体の仲介者である。人間には霊があり、魂がある。インティモは我々の中の至高なる神である。インティモは魂である。智恵の契約〔未詳 the testament of the wisdom「智恵の聖書」?〕は語る。「いつわりのオーロラが地上に現れる前、ハリケーンと嵐から生き延びた者たちはインティモをほめたたえていて、彼らにオーロラの前ぶれが現れた」。この世の人間とインティモの間には霊がある。霊には空間をトリップする有形の超感覚的体がある。霊体とはアストラル体のことである。それゆえアストラル体には人間的な面と神聖な面とが多少ある。
- 2 アストラル体には、交感神経系および内分泌腺と密接に関係する超生理学と超病理学がある。アストラル体は、生と死の大神秘を調査できる不思議な感覚を備えている。
- 3 アストラル体の中にはマインド、意志、意識がある。
- 4 我々の弟子は幽体離脱の方法を習得すべきである。
- 5 本章で教えているのは、とてつもない真実である。不幸にも、すべての精神主義スクールの兄弟は、アストラル体の使用・操縦をまったく知らない。
- 6 アストラル体の使用・操縦をあまりにも知らなさすぎる、さまざまな組織の兄弟を見るのは痛ましい。
- 7 さまざまな精神主義スクールの兄弟は、意識の眠ったままアストラル界で生きている。兄弟が道に入るとき、たいてい月の道の闇の住人たちに睡眠中、攻撃される。闇の兄弟たちはグルの姿をして、弟子を惑わせ、道を踏みはずさせる。弟子にアストラル体の実際の使用・操縦を教えないのは罪だと今理解すべきである。闇の攻撃から身を守れるよう、睡眠中、意識を目覚めさせる必要がある。
- 8 睡眠過程を意識するのは危険ではない。人間につきものの普通の機能をすべて意識すべきである。

### チャプルテベックの丘

- 9 本章でチャプルテベックの丘に関するメキシコ・インディオの写本の断片を見てみよう。丘の上には<sup>チャプレン</sup>バツカコオロギが一匹見える。諸皇帝の古代ローマでは、コオロギは金色のかごに入れて高く売られていた。
- 10 チャプルテベックの丘には「ヒーナス」状態のアステック神殿が存在する。アステカ

族がこの丘を神聖視したわけを今理解すべきである。メキシコのインディオはチャプルテベックに長距離の神秘的巡礼を行っていた。チャプルテベックに関するメキシコの写本の断片を注意深く観察すると、二人の人間が丘のあたりに浮いているのが見える。二人はアストラル体で行く。誰かがひとつの音を発音していて、それが昏から二つの光波として出てくる。その音はコオロギの甲高い歯擦音である。その音はロゴスの主音である。ロゴスは鳴り響く。

11 自然全体が言葉の具現したものだ、言葉とはコオロギの主音である。その音はコーラスであり、口では言えないそのコーラスの中に我々の主音がある。もし音楽家が楽器を演奏して我々の主音を出したら、我々は即死するであろう。主音を持たないものは自然界にはない。

12 意のままに幽体離脱したい者は、心の中で音節「ラ」La を発音しながら、うとうとするといい。この音節を心の中で音節「ラ」Ra と交互にくり返し発音する。

13 交互に別々にこの二つの音節を心の中で発音する。学徒はコオロギの甲高い音を聴こうとしなさい。この音は脳細胞の中から生じる。マインドを落ちつかせ、十分にまどろみ、そして自分のしていることによく注意する必要がある。エクササイズがうまくいくと、覚醒と眠りの間の移行状態に入るとすぐ、脳内でコオロギの甲高い音を耳にするであろう。それからもう少しまどろみ、意志によってその音をますます響かせる。それから寝床から起き上がり、部屋を出て、チャプルテベック神殿かノーシス教会か、あるいは好きな所へ向かうとよい。寝床から起き上がるという言葉、これを行為として解釈すべきである。寝床から起き上がらねばならない。これは頭の中で行なうものではない。事実、頭の中で起き上がる問題ではなく、実際の行為として起き上がらねばならない。

14 アストラル体が自由になって肉体が寝床に残るよう、肉体とアストラル体の分離は自然が引き受けてくれるであろう。ただ起き上がりさえすればよく、それだけのことである。この鍵で我々のノーシスの弟子は、アストラル体で白ロッジの密儀神殿にトリップできるであろう。

15 弟子がこの小動物を自室で飼えば、きわめて面白いであろう。そのようにしてもっとよく集中するであろう。その音に集中すれば、すぐに脳に響く。

16 この小動物は小さいかごで飼うことができる。この鍵で白ロッジの大神殿に行ける。

17 神秘学を知りたい者は幽体離脱せねばならない。神秘学は内的世界で学ぶものである。

18 マスターと個人的に話して、はじめて神秘学を学べる。物質界の知的理論はマインドと脳を損なうだけである。

- 19 チャブルテベック神殿の指導者はマスター・ラスムッセン Rasmussen である。
- 20 炎の剣をたずさえた門番が二人、神殿の入り口を守る。この神殿で古代の智慧を学ぶ。
- 21 この神殿には白ロッジの偉大なマスターたちが集まる。

### 睡眠中の意識覚醒の鍵

- 22' みな睡眠中はアストラル体で離脱するので、幽体離脱は危険ではない。睡眠中、意識を目覚めさせたい者は、識別の鍵を知るべきである。
- 23 眠りの間、人はみな意識の眠ったまま内的世界をさまよう。アストラル体に包まれた霊は、眠りの間、肉体を捨てる。そのようにしてエーテル体は濃密な肉体を修復できる。
- 24 霊が肉体の中に入るとき自然の眠りから目覚める。内的世界では霊はいつもと同じ仕事に従事する。そのとき物質界のように売買する。生者と死者の霊は眠りの間、一緒に生活する。内的世界ではすべてが物質界と同じように見える。同じ太陽、同じ雲、同じ都市の家、何もかも似ている。
- 25 自分が死んでいることを死者が認めないわけを、今ノーシスの弟子は理解するであろう。眠りの間、生者の霊が売買し、働いたりするわけを今理解するであろう。幽体離脱によって生と死の神秘がわかる。人は誰でも眠りの間、幽体離脱する。通常の眠りの間、意識を目覚めさせることによって、生と死の大神秘を知ることができる。眠りの間、意識を目覚めさせる鍵がひとつ存在する。識別の鍵である。
- 26 見てみよう。通りを進んでいて、友人と会ったり注意を引く物を見たら、浮くつもりで軽くジャンプしてほしい。もちろん浮いたら、それは肉体の外にいるからである。しかし浮かなかったら、それは肉体でいるからである。
- 27 たまたま内的世界では生身の体のときと同じように、眠りの間ふるまう。そこではすべてが、ここ物質界と同じように見えることをそれに付け加えるなら、そのときお分かりのように、意識を目覚めさせてアストラル体でいることに気づくには、うまく空中に舞うしかない。
- 28 起きている間、珍しい物事を目にしたら、このエクササイズをいつでも行なう。起きている間にすることは、眠っている間もくり返す。眠りの間このエクササイズを行なうなら、その結果、ジャンプするとアストラル体で浮いたままだろう。そのとき意識が目覚め、うれしそうに「私はアストラル体でいる。」と言うだろう。
- 29 そのようにして天使、大天使、熾天使、預言者、マスターなどと個人的に会話するた

め、聖ノーシス教会に向かうことができるであろう。そのようにして白ロジの偉大なマスターから教わることができるであろう。そのようにしてアストラル体で無限の空間をトリップできるであろう。

30 あまりにも多くの書物や理論でマインドを破壊しなくてもいい。内的世界でマスターから教えを受けられる。自然の眠りから覚めたとき、弟子は眠りの間、見聞きしたことすべてを思い出そうとせねばならない。

31 弟子は内的体験の解釈の仕方を覚える必要がある。

32 聖書の『ダニエル書』を研究することにより、内的体験を解釈できるようになるであろう。

33 「夢（眠り）と記憶」は、生と死の大神秘を知ることが可能にする能力である。

34 夢は「アストラル体験」である。

35 夢は真実である。



THE HILL OF CHAPULTEPEC

## 第5章 交渉

1 臨終のとき我々は肉体を捨て、内的世界に入る。霊は死後、自分が生身の体であると相変わらず信じている。もはや肉の世界に属さないという考えを受け入れさえしない。少しずつ死者の霊の意識は目覚めていくにすぎない。やがて霊は肉の世界に再び生まれる権利を獲得するため、新たな母胎に入る。これが回帰の法則である。我々は全員、過去生の悪行をつぐないに来る。善を行えば善を受け取り、悪を行えば悪を受け取る。

2 「あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られる」〔「マタイ」7：2〕。「彼らは風を蒔いて、つむじ風を刈り取る」〔「ホセア書」8：7〕。借金を支払うため善行を積みなさい。

3 善行によって過去生の古い借金を清算できる。高位法則が下位法則を超越するとき、それを消し去る。

4 法のライオンとは天秤で戦う。支払うものを持っている者は支払い、交渉がうまくいく。

5 内的世界で42人のカルマ裁判官と話ができる。これら42人の裁判官の裁判長がアヌービスである。カルマの主は我々にほうびを与えたり罰したりする。カルマの裁判官からクレジット（信用貸し）を頼むこともできる。どんなクレジットも善行か苦しみで支払わねばならない。「イニシエイト」は交渉を成立させるため、アヌービスの宮殿を訪れないといけない。内的世界では善行はエキゾチックなコインで象徴される。ある奉仕を神聖な天使団に依頼するときは、それらのコインでその代金を支払わねばならない。それらの遣ったコインを補充したいなら、善行を積みねばならない。

6 内的世界に資本を持っている者は、驚くべきことを実現できる。何も我々には贈られず、どんなことにも代金がある。真の資本とは善行である。資本がないと、とても言葉では言えないようなひどい目にあう。

7 コインの秘教的な額面価値を知る必要がある。あるとき我々は風の神エヘカトルに奉仕をひとつ求め、その奉仕に秘教的な25センターポ支払わねばならなかった。2と5を足すと7になる。7は罪滅ぼしのアルカナ（神秘）である。我々は辛抱して、大いに苦しんだ。我々はそのコインを持っていて、それで支払ったところ、我々を苦しめていた人物がひとり我々から遠ざかった。そのように、その奇蹟が起こった。コインを持っていなかったら、エヘカトルは我々のために働いてくれなかったであろう。何も我々にはプレゼントされず、すべてに代償がある。

8 人類の利益のために働くことにより、古くからの借金を清算できる。罪を許すことが

できるのは「クリスト」だけである。

9 すさまじい良心の呵責、至高の後悔、厳かな誓いによってのみ許されうる。その交渉はただクリストと内的世界で協議できるにすぎない。

10 イニシエイトは交渉成立のためタロットの22の大アルカナを知るべきである。エヘカトルの例ですでに説明したように、数同士を合計する。

11 メンタル体が病んでいたある菩薩がこう言われた。「500年後には健康になるであろう」。5 + 0 + 0 = 5 その菩薩は大密儀の第一イニシエーションを要約しつつあった。大密儀の第五イニシエーションを受けるとき健康になる、という意味で言われたのである。第五イニシエーションに達したとき、「君はすでに300年大いに苦しんできたが、今やもっと立派な衣装をするであろう。」とその菩薩は言われた。3は三位一体の魂である。

12 その菩薩は墮落していたので靈的に大いに苦しんだ。立ち上がる際、紫色のチュニックを取りもどし、靈的にもっとよい衣装をした。

## 22の大アルカナ

- 13 アルカナ1 魔術師。(意志。力。)
- アルカナ2 女神官。(神秘学。有利。)
- アルカナ3 皇妃。(物質的、精神的生産。)
- アルカナ4 皇帝。(進歩。成功。)
- アルカナ5 高僧。(カルマ。)
- アルカナ6 優柔不断。(勝利。幸運。)
- アルカナ7 勝利。(罪滅ぼし。苦悩。悲痛。)
- アルカナ8 正義。(苦しみ。試練。苦悩。)
- アルカナ9 隠者。(孤独。苦しみ。)
- アルカナ10 報い。(変化。)
- アルカナ11 説得。(恐れてはいけない。)
- アルカナ12 使徒の職。(試練と苦悩。)
- アルカナ13 不死性。(全体的変化。)
- アルカナ14 節制。(安定と釣り合い。無変化。)
- アルカナ15 情欲。(危険を知らせる。)
- アルカナ16 もろさ。(罰。恐るべき転落。)
- アルカナ17 希望。(待機。)
- アルカナ18 たそがれ。(病氣。)
- アルカナ19 インスピレーション。(成功。幸運。)
- アルカナ20 復活。(好ましい変化。)
- アルカナ21 変換。(命の冠。)

アルカナ22 帰還。(勝利。万事うまく運ぶ。)

14 計算、合計はみな、これら22の大アルカナで解釈する。聖なるマスター・イエスは「あと32年ワークで働きながら肉体にとどまらねばならない。」と我々のひとりの女弟子に言った。数同士を足すと、タロットのアルカナ5「法」になる。言い換えると、この姉妹は法にしたがって自らの運命を成就するまで、肉体にとどまらねばならないであろう。

15 ルシファーにくみするこの邪悪な人類の子供はアルカナ15で受胎し、アルカナ13で死ぬ。

### 幽体離脱

16 幽体離脱とカバラは、ひとつの完全な総合体である。覚醒と睡眠の間には移行状態が存在する。人は皆その瞬間、知らず知らず肉体から離脱する。注意することにより、覚醒と睡眠の間の移行状態のその瞬間、自由意志で意識的に離脱できる。重要なのは眠りを見張ることである。そのとき寝床から起き上がり、自宅を出て、ノーシス教会に向かえる。ノーシス教会では、われらの主 Kristus が司式する。弟子はただ眠りを見張り、うつらうつらしている瞬間に寝床から起き上がるだけでいい。この説明は行為として解釈すべきである。数多くの書物を読んだ者はマインドの問題だと思い違いし、頭の中で起き上がらねばならないと考える。くり返すが、朝起き上がるように、ごく自然に起き上がらねばならない。

17 マスターのおひざもとで学ぶため、そのように白ロッドにアストラル体で移動できる。人はみな幽体離脱するので、これは危険ではない。書物と理論を頭に詰めこむよりいい。多くの文字は人を混乱させる。

18 理論はマインドをゆがめ、脳をそこなう。神秘学は内的世界で研究する。意のままに幽体離脱できない者は神秘学を知らない。

19 アストラル界層でのイニシエイトの秘教言語を理解するため、22の大アルカナを研究し、暗記する必要がある。

### ヒーナスの状態

20 人間は化学層から肉体を連れ出せる。

21 人間は肉体を内的世界の中に入れることができる。化学層では重力の法則が支配する。

22 内的世界では宇宙浮揚の法則が支配する。

23 内的世界では肉体で浮揚できる。

24 肉体ごと内的世界に入る鍵は、自発的な夢遊病である。弟子は寝床の中でうとうとし、夢遊病者と同じように起き上がりなさい。

25 夢遊病者は眠り続けながら、寝床から起き上がる。

26 夢遊病者は眠りながら働き、歩く。

27 肉体ごと内的世界に入りたい弟子は、夢遊病者のまねをせねばならない。寝床から起き上がったら、浮くつもりで軽くジャンプしてみよう。もし浮いて、自分が太りすぎのようだったら、うまくいった証拠である。

28 そのとき弟子はクリストとおなじように海の上を歩くことができる。

29 クリストが海の上を歩いたとき、ヒーナス Jinas の状態の肉体でいた。

30 まさしくこれが「ヒーナスの状態」と呼ばれるものである。もしペテロが疑わなかったら、彼もまた「ヒーナスの状態」で海の上を歩けたのだが。信じる心とまどろみが必要であり、それだけのことである。強い信仰心とまどろみで、肉体を「ヒーナスの状態」に置く。ペテロは一位（ひとり）の天使とまどろみの助けを借りて、ヒーナスの状態のエキスパートになった。ペテロは獄の鎖から自由になり、安全な場所に身を置いた。〔『使徒行伝』12：6-11〕

31 ハルポクラテス神 Harpocrates を召喚すれば、我々の呼びかけに駆けつけてくれるであろう。マントラ「ハル ポ クラ ティスト (har po crat ist)」でこの天使を召喚できる。この天使の助けを借りて、肉体をヒーナスの状態に置く。この天使の助けを借りて、世界中どこにでも瞬間移動できる。

32 肉体をヒーナスの状態に置く特別な力が卵に宿る。卵を水中で温める、つまりさっと軽くゆでる。それから最もとがった円錐形の先端あたりに穴をひとつあける。それから鋭い器具を用いて、黄身と白身を取り出す。卵の殻にはハルポクラテス神のパワーが宿る。ハルポクラテスの力は、クリスティックな力の変ったものである。この殻を枕元に置く。自分がその殻の中に入るのを想像する。ハル・ポ・クラ・ティストを召喚し、行きたい所に肉体でテレポートさせてくれるよう頼みなさい。夢遊病者のように眠り続けながら、起き上がる。卵の殻を握り、「ハルポクラテス、私を助けたまえ。私は肉体で行きますから。」と言って、部屋から出る。

33 そのように我々のノーシス運動の弟子は、肉体で内的世界に入れるであろう。そのように生身の体で聖ノーシス教会に行けるであろう。そのようにパンとワインの聖体を拝領

し、「プラエトル（古代ローマの執政官）」に随行できるであろう。

34 精神主義スクールの理論やむなししい議論でマインドを損なわなくても、そのように偉大な神秘を知ることができるであろう。

35 魔法の湖、ヒーナスの湖が存在する。ヒーナスの状態の山、神殿、国民、都市が存在する。コロンビア東部の平原には、「マノア」と呼ばれる都市がヒーナスの状態で存在する。世界のすべての山には白ロッジの神殿がヒーナスの状態で存在する。

36 コロンビア、サンタマルタ市シェラネバダの我々ノスティックのスムン・スプレムン・サントゥアリウム Sumum Supremum Santuarium〔最高神殿〕はヒーナスの状態に入りつつある。神殿や山、あるいは何か（ヒーナスの状態の）魔法のものがあるところならどこでも、そこにはハル・ポ・クラ・ティストの力が激しく活動している。

37 ノーシス学徒は決して飽きてはならない。すぐに成功する者もいれば、ヒーナスの状態にうまく入るのに数カ月、それどころか数年かかる者もいる。粘り強さと忍耐があらゆる進歩の基礎である。ハル・ポ・クラ・ティストのこれらのプラクティスによって、弟子はハル・ポ・クラ・ティストのその驚くべき力を乗物の中に蓄積していく。後にこれらの不思議なエネルギーを利用して、肉体をヒーナスの状態に置けるであろう。これらの力を用いて、驚くべきことをやってのける。

### 遠くから肉体を呼び寄せる鍵

38 幽体離脱できる者は肉体を遠くから呼び寄せられる。これはインティモの助けを借りて行なう。このように祈りなさい、「われ自身である汝、わが真の本質的存在である汝、われ汝に請い願う。わが肉体をわがもとに運びたまえ」。するとインティモはヒーナスの状態の肉体を弟子のもとに運んでくれるであろう。弟子のアストラル体がどれだけ遠くにあっても、そこに肉体がやって来るであろう。我々の前に謙虚に、下着や寝巻を着て、やって来るであろう。寝床に残してきたのと同じ服装で。肉体と出会って向かい合う瞬間は感動的である。このとき我々はアストラル体にいるが、それからこう肉体に命令しないといけない。「わが肉体よ、わが頭上に飛び上がり、松果腺を通してわれの中に入りたまえ」。すると肉体は言うことを聞き、松果腺を通して中に入るであろう。この腺は脳の一部に位置する。そのように肉体は呼びかけに駆けつけるであろう。

39 それから遠隔地で肉体で機能できるであろう。マスターのおひざもとで教義を学ぶため、ヒーナスの状態で密儀神殿を訪れることができるであろう。特別な助けを望むなら、肉体の外にいるとき、私をこのように呼びなさい。「われは神を信じる。われはクリストを信じる。われはサマエルを信じる。サマエル、わが肉体をわがもとに運びたまえ。サマエル、わが肉体をわがもとに運びたまえ。サマエル、わが肉体をわがもとに運びたまえ」。何度か何度もこの祈りをくり返しなさい。そうすれば、あなたがたの謙虚なしもべである

私サマエルが呼びかけに駆けつけて、肉体をヒーナスの状態にしてあげよう。親愛なる弟子よ、正しい態度なら、そのように私はあなたがたに仕えよう。我々マスターは、人類が内的世界に再び入るのを助ける準備ができています。

40 「求めなさい。そうすれば与えられます。たたきなさい。そうすれば開かれます」。  
〔『マタイ』7：7、『ルカ』11：9〕

41 この謙虚なしもべ、本書の著者サマエルを呼ぶなら、意のままに幽体離脱できるようになりたい弟子は我々の助けを得るであろう。プラクティスを行なうときに、こう祈りなさい。「われは神を信じる。われはキリストを信じる。われはサマエルを信じる。サマエル、肉体からわれを連れ出したまえ。うとうとしているときに何度もこの祈りをしなさい。ある疲労つまり眠気と脱力感を直ちに覚えるなら、それは私サマエルが援助しているからである。

42 そのとき進んで最大限の努力をして、寝床から起き上がりなさい。私サマエル・アウン・ベオールはあなたがたをノーシス教会に連れていこう。

43 「求めなさい。そうすれば与えられます。たたきなさい。そうすれば開かれます」。現在、進化は偉大なる光に帰還しつつあり、我々、哀れな人類の謙虚なしもべは、全人類が内的世界に再び入っていくのを助ける決心をしている。

## 瞑想

44 幽体離脱の鍵を知ったのに、意のままにうまく離脱できなかった弟子が大勢存在する。それらの学徒の失敗は、アストラル体の諸能力をすでに失ってしまったことに原因がある。これらの学徒が失った能力を取りもどすには、瞑想の修練を受け入れるしか方法がない。瞑想は情報を受け取るひとつのテクニックである。賢人が内的瞑想にひたるとき、求めるものは情報である。チャクラは瞑想で活動する。

45 瞑想は三つの段階からなる。①集中。②瞑想。③サマディ。

46 集中のプラクティス始める前に、くつろいで座らないといけない。このプラクティスは寝床の中でも行なえる。ありとあらゆる雑念をマインドから払わないといけない。これらの考えは神殿の扉のところで息絶えねばならない。集中する前にマインドをからっぽにして、何も考えてはならない。これらの必要条件を満たしてから、内的集中のプラクティスを始める。物質界の物事からマインドを遠ざけ、マインドを心の奥底、インティモに向ける。「あなたがたの体は生ける神の神殿であり、至高なる神があなたがたに宿っておられることを思い出さなさい」〔『コリント人への第一の手紙』3：16〕。我々の中の至高なる神とはインティモである。インティモを愛さねばならない。インティモを礼拝せねばならない。インティモを崇拜せねばならない。インティモについて深く瞑想せねばな

らない。

47 深い瞑想に沈んで眠気を催すべきである。この深い眠りが我々をサマディの境地に導いてくれるであろう。それから、いつ、どうやってかはわからないうちに肉体から出ているであろう。そのようにして内的世界に入る。

48 夢（眠り）とは正真正銘の内的体験である。植物を研究したい場合、それに集中し、それについて瞑想する。眠気を催して、うとうとする。すると、その植物が一人の美しい幼児や生き物に変わるのが夢のビジョンに見える。その生き物が植物エレメンタルである。我々はその植物エレメンタルと会話できる。その植物の特質や魔力などについて知ることができる。

49 植物エレメンタルはこれらの質問に答えて、そのように情報を受け取るであろう。瞑想によって神秘的能力が目覚めるであろう。瞑想によってアストラル体が根本的に変わる。そのとき通常の眠りの間、意識している瞬間があり、その後「私は肉体の外にいる。アストラル体にいる。」と言えるであろう。そのように少しずつ「連続意識」を獲得していくであろう。ついには学徒は我々の鍵を今や利用して、意のままに幽体離脱できる日が来るであろう。失った能力を取りもどしたのである。

50 睡眠中、全人類はアストラル体でトリップする。夢はアストラル体験である。アストラル体験を思い出せるようになるべきである。眠りから覚めたとき、回想エクササイズをして、睡眠中にしたことすべてを思い出そう。睡眠中、我々の弟子は白ロッジに移動する。睡眠中、我々の弟子は遠隔地にトリップする。

51 我々の弟子はみな夢の解釈法を覚えるべきである。最もばかげた夢でさえ、まったく象徴的である。

52 内的体験は哲学的類推の法則、反対の事物の類推の法則、照応（コレスポンデンス）の法則、数霊術をもとに解釈する。

53 これらの研究を進めたい者は、聖書の「ダニエル書」を飽きずに研究すべきである。ダニエルの方法は内的体験の解釈法を教えてくれる。

## 第 6 章 妨害する闇の住人

1 まだ意識的な幽体離脱法を覚える時ではないと言って、闇の住人は我々の教えに反対する。内的世界にはまだ入るべきではないと彼らは言い、先に肉体を支配すべきだと主張する。そのようにして、哀れにも苦悩する人類に対して内的世界の扉を閉ざす。

2 そのように光の<sup>アズドラン</sup>志願者に対して高次世界の扉を閉ざし、その後はその知的体系の中で志願者をとりこにする。中世の時代、内的世界に入る扉は閉ざされた。人間は自分自身の個性を意識できるよう、物質界に専念する必要があったのである。

3 ニルバーナには活動期と深い休止期がある。1919年2月19日午後3時40分以降、活動期に入り、そのときから進化する生命は偉大なる「光」に帰還しはじめた。今、高次世界に入る扉を閉ざすのは時期はずれである。

4 ニルバーナの天使団は人類を内的世界にもどそうと、今闘っている。

5 水星は現在、宇宙の夜を脱しつつある。水星の主たちは今、人類に意識的な幽体離脱法を教えている。水星が宇宙の夜を脱すれば脱するほど、ますます水星の主たちは活動的になるであろう。

6 闇の住人は幽体離脱は危険だと言って、この偉大な宇宙の法に反対する。彼らは水星の天使団に敵対するという罪を犯し、哀れにも苦悩する人類に対して内的世界の扉を閉ざす。

7 水瓶座時代、全人類は自由自在に肉体から出入りできるであろう。闇の住人は偉大な法に反対し、その知的体系の中で<sup>アズドラン</sup>霊をとりこにする。

### 闇の住人はエデンの園の扉を閉ざす

8 たぶん人類はまだ準備ができていないので、性魔術を教えるべきではないと闇の住人は言う。このように、哀れにも苦悩する人類に対してエデンの園の扉を閉ざす。光を熱望する霊に対してエデンの園の扉を閉ざす。闇の住人は性魔術は危険だと<sup>アズドラン</sup>志願者に言った後、彼らをもその複雑な求道体系の中に閉じこめる。苦悩する人々に対して扉を閉ざし、その知的体系の中で彼らをとりにこにする。闇の住人はどんな犠牲を払っても、なんとしてでも性問題を回避しようとする。闇の住人は性の扉を憎む。

9 かつて偉大なアルカナ（神秘）を広めることは禁じられていて、広めようとした者は死刑の宣告を下された。今日、人類に対して性魔術の偉大なアルカナを否定するのは時期

はずれである。全人類がエデンの園にもどれるよう、神聖な世代は性魔術を教えている。しかし闇の住人は妨害し、人類を性の扉から引き離そうと超人的な努力をする。

10 闇の住人は偉大なる法の敵である。闇の住人は射精を支持する。闇の住人は哀れな志願者を道からそれさせ、その知的体系の中に閉じこめる。

## 閉ざされた二つの扉

11 口では言えない高尚な美辞麗句を並べ、性魔術は危険だと言って、闇の住人は哀れな人類をエデンの園の扉から遠ざける。甘い言葉を用いて、思いのままに幽体離脱するのは危険だと言う。そのようにして闇の住人は、これらの哀れな霊に対してこれら二つの自由の扉を閉ざすのである。二つの幸福の扉を閉ざし、それからその犠牲者をその知的体系の中に閉じこめる。

12 これらの体系は推理と哲学的言葉にみちている。

13 インテレクトは、その犠牲者が奈落から逃げるのを邪魔するのにルシファーが利用する、強力な武器である。奈落は、誠実だが間違った人々でいっぱいである。奈落は、とても善意にあふれた人々でいっぱいである。奈落の多くの闇の住人は間違った正直者である。

14 自分たちはインテレクトを用いて神を知ることができると、闇の住人は信じている。

15 神のみが自分自身を知っていると我々は言おう。

16 神との合一を達成するため理性とインテレクトを捨てる必要がある。神との合一を達成するため幼児のマインドを持つ必要がある。エデンの園に入るには性魔術が必要である。

17 インティモと会話するには幽体離脱を習得する必要がある。マスターのおひざもとで学ぶ必要がある。

18 初心者はまどろんで主エホバを召喚し、アストラル体で連れ出してくれるようお願いすべきである。主エホバは肉体から連れ出してくれるであろう。学徒はうとうとしている瞬間に起き上がるとよい。「天は自ら助くる者を助く」。エホバはいつでも助けてくれる。我々は自力でやっつけよう。

## 第 7 章

### 1

#### イニシアチックな準備

- 1 光にいたる狭く細い困難な道に入りたい弟子は、この世のすべてのお世辞から遠ざからなければならない。厳しくても、真理はいちばんの親友である。
- 2 精神主義のほとんどすべての兄弟はインテレクトですっかりこちこちになっている。理論のアヘンは死より危険である。我々は黙ってはいられない、罪を大目に見ることも罪なので。精神主義のほとんどすべての兄弟は、前世紀の精神主義の理論で凝り固まり、えらそうに自惚れて、<sup>うぬぼ</sup>恐る<sup>おそ</sup>恐る、われらの主クリストの秘密教義を拒絶する。
- 3 近ごろは偽クリストが大勢いて、彼らに加担する者は大逆罪を犯す。イエス・クリストはすべての霊の指導者であり、この偉大なマスターは東洋のチベットに住んでいる。
- 4 祈りの香の中に罪が隠れ、祈りの香りに混じって罪がひそむことを忘れてはならない。
- 5 偽クリストは見かけは気高く見える。これは良いとか悪いとか言うのは簡単なことである。悪の中の善を知り、善の中の悪を知るのはとても難しい。
- 6 黒ロジは、誠実だが間違った人々でいっぱいである。奈落はとても善意にみちた人々でいっぱいである。
- 7 イニシエーションの真実の道に入るとき、精神主義の兄弟はみな我々に敵対する。クリストをはりつけたのは当時の精神主義者たちである。
- 8 別に誰もどの協会も批判するつもりはない。それは罪だからである。こんなことを言うのは心苦しいが、罪を大目に見ることもまた罪である。できたら黙っていたいが、人は自分の行う悪に対してカルマを払うだけでなく、やろうと思えばできるのに行わない善に対してもカルマを払う。だからこのことを黙ってはいられない。我々は人類を深く愛するがゆえ、罪を指摘し、罪を大目に見るという罪を犯さないよう痛い所を突く必要がある。もしこれらのことを言わなかったら、恐るべきカルマを受けることになる。
- 9 大勢の人々が道に入るが、その後はもうワークを続けて、善良な一市民になる必要性をみたそうとはしない。哀れにも、それらの人々は家族や世間や自分自身に対する義務を忘れる。「お金はむなしい。」、「この世はマーヤー（幻影）だ。」、「もう私は俗事に興味ない。」などというような彼らの言葉をそのとき耳にする。自分の義務の遂行をわきまえていないので、哀れにも、そのようにこれらの弟子は失敗する。まさしく単なる一市民としての義務の遂行をわきまえないために、そのように道のこれらの帰依者はイニシエーションから遠ざかる。

10 祈りの香の中にも罪が隠れているわけを、我々の弟子は今や理解するであろう。

11 道に入る者は、何よりもまず模範的な夫や父や息子、市民のかがみ、立派な孫、家長らしい尊敬すべき祖父などになるべきである。単なる一市民としての義務の遂行をわきまえていない者は、大密儀の道を歩けない。多くの弟子は誠実で高潔な紳士としての立派なマナーを忘れ、実にいい加減な人物になり、危険人物にさえなる。

12 今まで盗みなど働いたこともない人たちが道に入ると、書物と金銭の泥棒になった。精神主義の道に参入する兄弟は書物を盗んだり、あるいは借りた後、返却しなかったりする。相弟子になっていて、彼らから借金し、盗んだりする者もいる。

13 「友愛」という言葉のかけで、刑法に定められたあらゆる犯罪行為を犯す。たぶん善行をするため、他人の金銭を奪い取る人がいる。たぶん、すべてはむなしからといって、働く人を批判する人らがいる。

14 そのようにして弟子は、偉大な密儀に通じる道を自分からさえぎってしまう。

15 「妻は精神主義の教えを受けつけない」。「私の関係する別の女性は、私と考えが一致している」。「完全に自己実現するために性魔術と一緒に実践できるのは彼女だけだ云々」。不義という恐ろしい罪を隠すため、その他神秘的なことをとやかく言って、道の途上で多くの兄弟は不義を働く。そのようにして姦通者は神殿の扉を閉ざしてしまう。

16 多くの純真な世間知らずの道の女性帰依者を誘惑するため、口実として性魔術を利用する道の兄弟が大勢いる。そのようにして、これらの神秘的な姦通者はイニシエーションの祭壇から遠ざかって、奈落に落ちる。

17 性魔術は、合法的に家庭を営む夫婦の間でのみ実践できるにすぎない。

18 たぶんカルマの法の定めだからといって、人妻を奪う兄弟がいる。こういった罪はみな無数の精神主義学徒を奈落に導いてきた。

19 我々が使命遂行のため、ある国に派遣されたとき、ある精神主義のメンバーに襲撃された。我々の書物を批判し、威圧的な口調で命令し、自宅で侮辱するため、彼らは我々を訪ねていた。世俗生活で紳士なら、あえて他家に入って命令し、家主を侮辱することなどしない。流血事件や警察沙汰になるのは目に見えているからである。不幸にも道の兄弟は、ひどく無責任なこれらの事態に陥る。

20 この世の虚飾に対する軽蔑と靈性を言いわけに、都会生活の最も基本的なルールを捨て、汚れた服を着て、まったくだらしない格好で通りをさまよう者さえいる。これを墮落という。そのようにして道の兄弟は、最悪の宣伝で大勢の人を道から遠ざける。

21 プライドや見えのためではなく、単に隣人への尊敬の念ゆえに、我々はいつも上品で立派な身なりをしよう。ひげや髪のを伸び放題にしたり、汚らしい格好で通りをさまよって歩くのは、完全に自己実現する方法ではない。自己実現したい者は、まず立派で品行方正な紳士になることから始めるべきである。

22 自己実現したい者は、巫女である妻と性魔術を実践し、最も完全な聖性の道を行かなければならない。

23 道の多くの兄弟が隣人の悪口を言い、オウムのように議論する。これはよくない。人を裁く権利は誰にもない。誰も完全ではないからである。われらの主キリストはすでにこう我々に語った。「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです云々」〔「マタイ」7：1，2〕。他人の欠点を批判する権利は我々にはない。陰口・中傷は世の中を悲しみと苦しみでみだしてきた。中傷は盗みよりも悪い。

## 2

24 議論や論争のため多くの精神主義スクールがつぶれてきた。二人の人が議論するとき、マインドにあるのはプライドと傲慢であり、どちらも対談者に対する上述の優越感を見せつけようとし、どちらのマインドにも得意になったサタンがいる。いつも我々はつつしんで自分の考えを言い、我々の考えを対談者が自由に受け入れたり、拒絶したりできるようにしなければならない。ひとりひとり好きなように自由に考えてよいし、我々は他人のマインドに強制できない。なぜならそれは黒魔術だからである。知的議論はルシファー的、悪魔的である。

25 大密儀に入れるよう、幼な子のマインドを持つ必要がある。マインドと心は幼な子である必要がある。

26 天の父が完全であるように、我々は完全である必要がある。むなしい主知主義では偉大な密儀に到達しない。大密儀には幼な子の心を抱いて到達する。我々はまったく無学文盲な白ロジの偉大なマスターたちと知り合ってきた。

27 道の帰依者を襲うもうひとつの危険は妬みである。

28 他人が進歩するからといって妬みに満たされる者は、銀貨30枚でインストラクターを裏切る「ユダ」になる。精神主義のスクールとロジでは、よき説教師の話とその教えを故意に妨害するため、嫉妬深い人は時計を見て、ベルを鳴らす。そういうわけで罪は、祈りの香の中に隠れている。

29 あるとき尊敬すべきマスター・モリヤが我々に語った。「インティモとの合一は大変

困難である。とても骨が折れる。インティモとの合一を試みる二人のうち、ひとりだけが成功する。なぜなら詩人ギリエルモ・バレンシアの言ったように、罪は同じ韻律の中に隠れているからである」。

30 本当にマスター・モリヤの言うとおりであった。罪は聖人の身なりをする。罪は殉教者の身なりをする。罪は使徒の身なりをする。

31 それゆえインティモとの合一は大変困難である。

32 これはカミソリの刃の道である。

33 我々の弟子は自分の欠点を合計し、それから次々と各欠点到2ヵ月当てるべきである。そのように欠点をすべて絶滅するであろう。

34 同時に欠点をすべて絶滅しようとする者は、ひとつも絶滅しないであろう。

35 この道はきわめて困難である。すでにクリストはこう語った。「私を捜す千人のうち、一人が私を見つける。私を見つける千人のうち、一人が私についてくる。私についてくる千人のうち、一人が私のようになる」。

36 神秘的能力の開発で一步進むごとに、聖性の道で千歩進まねばならない。

### 3

37 偉大な密儀に参入したい者は、動物的インテレクトを捨て去るべきである。動物的インテレクトはルシファー的、悪魔的である。偉大なマスターは幼な子のマインドを持っている。神を大いにおそれて生きるべきである。知的傲慢をなくすべきである。

38 素朴な、ただ純真なマインドを持つべきである。罪を隠すべきではない。

39 ときどき弟子が我々に手紙をよこして、たぶん某女性を良き道に連れてくるため、我々に彼女のマインドを支配するよう要求することがある。そのように彼らは祈りの香の中に好色を隠す。

40 そのように彼らは黒魔術のわざを我々に要求して、長兄をだまそうとする。それは罪なので誰も他人のマインドを強制できない。他人の自由を尊重せねばならない。本章でははっきり言うておくが、三つの扉を通して人は奈落に入る。怒り、強欲、好色。怒りは裁判官に変装する。強欲は善意の中に隠れる。好色は神秘的なチュニックをいつも着用する。

41 精神主義の姉妹は道の帰依者のひざの上にすわる。道の兄弟は無邪気さにかこつけて

光の姉妹とキスしあい、抱き締めあう。

42 こうして祈りの香りの中にもまた罪が隠れている。

43 もうひとつの大罪は恩知らずである。犬にパンを与えると、ありがたく思うが、道の多くの兄弟はありがたいとは思わない。本物のマスターが彼らに教えをたれても、その報いとして受け取るものといえば、迫害、憎しみ、中傷のみである。

44 一人の精神主義の兄弟を我々は知っているが、彼が失業中で空腹だったとき、パンと住まい〔コート〕を提供してくれる一人の慈善家といつも出会っていた。後に働き口を見つけると、ためらうことなく慈善家の奉仕者たちに敵対していた。ときどき公然と中傷したり攻撃したりしていた。そのように、その兄弟は恩を<sup>が</sup>仇で返していた。

45 しかし自分の罪に対しては、いつも哲学的な口実を考えだしていた。ずうずうしくもこう言っていたのである。「私は誰にもお世話になっていない。生命はすべてを与えるものであり、私に奉仕する慈善家たちは偉大なる生命の手元にすぎず、私は彼らにお世話になっていない」。

46 「万物が私の家族であり、両親はどうでもよく、私は反逆者だ云々。」と言って、実母、老父を捨てる者もいる。そのようにして彼らは祈りの香の中に罪を隠す。

47 たぶん霊的生活を送るため、妻やかわいそうに子供を捨てる者がいる。そのようにして、それらの悪人は黒魔術の奈落に落ちる。たぶん全世界的な大友愛結社をつくるため、あらゆる団体のメンバーをひとつに結びつけようとする者もいる。これらのスクールの独占者たちは、まさしく霊の商人である。

48 これらの兄弟の悪賢さはあまりにも洗練されているので、生ける統一体（ユニティ）として、クリストの化身としてまんまと中心人物に自分を位置づけるのが常である。すべてのスクール、宗旨、宗教を結びつけるという口実で、だまされやすい人々をたぶらかす。これらの闇の住人の前では、もっとしっかりと財布を見張らねばならない。

49 ノスティックは天使と悪魔の食卓に同時にはすわれない。自分の態度をはっきりさせなければならない。

50 エデンの園に入りたい者は、出たのと同じ扉を通して入らなければならない。その扉とは性である。他に扉はなく、出たところから入らなければならない。

51 スクールを次から次へと移る者は精神主義の売春婦である。

52 あるとき夫との性魔術の実践を精神主義の姉妹に勧めていたとき、グルとの性魔術のみを実践すると妻は厚かましくも我々に答えた。自分の夫の前でこう語ったのである。我々はその言葉に反論し、性魔術は夫婦の間でのみ実践できると言った。実際、俗界の姦婦はひとりも夫の前でそんなずうずうしい答えをしないであろう。精神主義のいい加減な人のみがそんな馬鹿なことを思いつく。そのうえ悪いことに、その哀れな姉妹のグルはただの感じのよい偽物、人をあざむく嘘つき、冷血漢にすぎなかった。

53 別のとき我々はひとりの病的な神秘家と知り合った。彼は大勢の女性信者を助けるという口実で、性的に彼女たちを誘惑していた。その悪人は妻の娘自身つまり継子に惚れ、継子を妻にした。その悪人は墮落した菩薩であった。墮落した菩薩は悪魔よりもひどい。私は（コロンビアの）ポゴタ市に住んでいる墮落した菩薩と知り合った。その人は性を憎む愚かな宦官の一宗派を開いた。そのようにしてこの兄弟は哀れにも家庭をいくつも崩壊させ、他人に対してエデンの園の扉を閉ざす。

54 今日、そのように誰かのあとについて行くのは大変危険である。

55 いちばん良いのは内なるマスターを捜すことである。いちばん良いのは「私はある」のあとについて行くことである。いちばん良いのはアストラトリップを習得して、白ロッジの神殿を訪れ、神殿で直接教えを受けることである。

56 イニシアチックな準備はとても厳しい。弟子は戦時中の見張りのように油断なく警戒して生きるべきである。マインドを浄化しなさい。邪悪なものにだまされたままではいけない。

57 兄弟たち、知りなさい。邪悪なものとは現代の主知主義のことであり、それは神を否定する。

58 近頃の科学主義。「あの邪悪なもの、その出現は大変な力としるしと人をあざむく奇跡を見せつける、サタンの操作に従う」。飛行機、原子爆弾、生理学・生物学・医学・化学等における偽りの驚異。科学のそれらの奇跡は皆うわべだけである。邪悪なもの、それらのうわべだけの奇跡を信じてはいけない。

59 「だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子（邪悪な人類）が現われなければ、主（イエス・ Kristus）の日は来ないからです。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言しま

す」（『テサロニケ人への手紙 第二』2：3，4）。

60 邪悪なものの奇跡を信じないよう、私はあなたがた兄弟に忠告する。それらは人を惑わす奇跡である。

61 現代の科学者は単なる見せかけしか知らず、人体のことは知らない。

62 ヒーナスの状態にある人体は空を飛び、壊したり汚したりせずに壁を端から端まで貫通し、動植物や岩に変身し、意のままに大きくなったり小さくなったりできる。

63 こういったことを邪悪なものは知らない。反クリストの科学者は、その生理学・病理学・生物学等のすべてを見せかけに基礎づけ、その上に科学を築き、偽りの奇跡を起こす。

64 そのようにして反クリストの科学者はその唯物主義をつくり、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、今や神の宮の中に座を設ける。

65 クリスト化するとき、あなたがたは本当の神智を知るであろう。

66 そのとき肉体を何千年も保存できるであろう。そのときクリストのパワーで病人をいやし、海の上を歩くであろう。クリストが聖地で行ったように、驚異と奇跡を行うであろう。

## 6

67 精神主義スクールは、誠実だが間違っただ人々でいっぱいである。祈りの香の中にも罪が隠れている。

68 クリストは二人の泥棒の間ではりつけられた。ほとんどすべての団体がクリストを利用する。善意で利用するものもあれば、悪意で利用するものもあり、それらが善い泥棒と悪い泥棒である。

69 多くのごろつきは、私心のない使徒として現れるが、クリストの名前を悪意で利用する。それらのごろつきの崇拜者は誠実だが間違っただ人々であり、不幸にも霊たちの長を裏切るといふ罪を犯す。彼らはクリストを偽物とすりかえる。これは反逆罪である。

70 道の多くの兄弟は、クリストの神秘を解しない教えの信者になる。前世紀の理論の中で石化した人々、恐るべき狂信と恐怖にみちた人々。彼らは新しいものを何も受け入れず、知識に関しては最終結論に達したと信じており、プライド、傲慢、狂信、おそるべき恐怖

にみちている。キリストを善意で利用して終わる人々である。

71 善意でキリストを利用する多くの協会の指導者は、誠実だが間違っただ人々である。あいに、偉大なアルカナを知らないで姦淫者である。彼らは間違っただ道を進み、盲人を導く盲人は最後には全員奈落に行き着く。

72 精神主義の神殿がたくさんあり、そこには霊媒能力をもつ人が大勢いる。それらの霊媒能力を介して多くの偽物が現れる。彼ら全員が自分はイエス・キリストだと言い、あわれにも人々はそんな偽物を固く信じる。奈落は闇の住人でいっぱいであり、彼らは精神主義の神殿で霊媒能力を介して現れる。不幸にもこれらの哀れな兄弟は恐るべき狂信にみち、誠実だが間違っただ人々である。それらのスピリチュアルセンターの指導者はキリストを善意で利用する。

73 多くの教団、ロッジ、スクール、スピリチュアルセンターがあり、善い泥棒のあとについて行く者もいれば、悪い泥棒のあとについて行く者もいる。

74 たまたま、哀れにもそれらの人々は「私はある」の秘密教義を知らないで、モリエールとその風刺画にふさわしい最低の奇行に陥る。多くの団体は霊的な主知主義にどっぷりつき、イニシエーションを売り物にする。それらの哀れな人々はみな姦淫し、傲慢、狂信、恐怖にみちている。

\*モリエール…1622-73 フランスの喜劇作家、役者。

75 それらの人々はみなキリストを食物にする。善い泥棒のあとについて行く者もいれば、悪い泥棒のあとについて行く者もいる。

76 彼ら全員がイエスの人格を崇拜しつづけるが、その教義を、「私はある」の秘密教義を拒絶する。

77 あらゆる宗教、宗派、ロッジ、スクールなどは神性という金糸でつながった真珠であり、それらすべてに普遍的な宗教原理が含まれる。しかしシバナダの言うように、本当にこの道は内も外も危険にみちている。これはかみそりの刃の道である。

78 ほとんどすべての精神主義スクールではマインドパワーの開発を教える。それらすべてがマインドを太らせようとする。そのようにして多くの者が黒ロッジに入る。マインドは、天のエルサレムに入場するために乗るべきロバである。

79 マインドはインティモの威光に屈伏せねばならない。

80 たぶん善いことをするために催眠術に没頭する者もいる。そのようにして罪は聖人の

服装をする。催眠術は明らかな正真正銘の黒魔術である。新しい黒魔術スクールが開設されるとき、最初の犠牲者はカルバリオの丘の殉教者である。信奉者が信じるようクリストの名において話し、クリストの名において募金し、クリストの名において黒魔術を教え、クリストの名において人に対してエデンの園の扉を閉ざし、クリストの名において世間知らずの純真なお嬢さん方を誘惑し、クリストの名において信者は靈感を受けて不義を働いて姦淫し、クリストの名において不動産を手に入れたりする。

81 神秘主義の著述家の大部分は自分の読んだことを書き、人の理論をオウムのようにくり返す。自分の知らないことを話し、知らないことを言う。いちども体験したことのないことを説明する。彼らは知的プライドに満ちている。

82 にもかかわらず厚かましくもこう言う。「私は幼な子だ。私にはプライドはない。私は飾り気がなく大変素朴である云々」。

83 「偽善者、パリサイ人、白く塗った墓、マムシの人々」。奈落、奈落、奈落に落ちよ！

84 本書をそれらすべてのスクールに送ることを考えていたとき、ノスティックである我々の兄弟のひとりと言った。「それらのスクールはこの本を認めないでしょう。彼らには都合が悪いので、それを隠すでしょう。それらのスクールの指導者がひどく嫉妬深いことがわからないのですか。スクールとグループで食べていく指導者は、放り出されるのではないかと恐れます」。

85 そのようにノスティックである我々の兄弟は言っていた。当然、彼の言うとおりであり、我々はその考えを認めねばならなかった。

86 それらの人々はみなクリストを売買して暮らす。そのビジネスで暮らしを立てる。

87 善い泥棒のあとについて行く者もいれば、悪い泥棒のあとについて行く者もいる。それが真実である。そのように祈りの香の中に罪が隠れている。

88 悪人に美德がたくさんあり、徳の高い人に邪悪さがたくさんある。聖人も美德で悪事をいろいろと働いてきた。まことにあなたがた兄弟たちに言うが、美德でさえ他人に害をもたらすことがあり、そういうときは美德の活かし方を知らないのである。「愛は法なり。しかし意識ある愛なり」。「癖を大目に見ることもまた罪である」。

## 7

89 多くの人がイニシエーションを売る。多くの人がイニシエーションを授ける。それはみな搾取と黒魔術である。真正の位階と真正の白イニシエーションは意識で受ける。

90 イニシエーション儀式は高次世界で行われる。

91 イニシエーション儀式は深層意識の問題である。それは口で言うことでも話すことでもない。

92 誰も誰に対してもイニシエーションを授けられない。イニシエーションは我々の命である。

93 近頃は、誰もがマスターになりたがる。我々はこう言おう。マスターとはただひとりであり、この世に生まれるあらゆる人の内なるキリストのみである。彼のみがマスターである。光り輝く「私はある」のみがマスターである。

8

94 次のように主エホバは我々に語った。「私はいつもあなたを助けてきた。いつまでもあなたを助けるであろう。パール礼拝者のスクール課程終了者を全員いつまでも助けるであろう」。パール礼拝者は闇の住人である。姦淫を教えるスクール、団体、ロッジ、宗教宗派はみな奈落に属する。それらはイゼベルの食卓（姦淫）で食事をするパール礼拝者のスクールであり、彼らは偶像神に捧げられた食事（理論や主知主義等）を糧とする。

\* イゼベル…ツロのエテバル王の娘で、イスラエル王アハブ（前869-850年）の王妃となった悪妻。熱心なツロの神パール礼拝者で、パール礼拝をイスラエル国民に強要した。夫アハブ王をしてサマリヤにその祭壇を築かせ、アシラ像を建てさせた。これを預言者エリヤが攻撃し、パール対エホバの戦いが行われた。（新教出版社編「聖書辞典」）

95 人々が異言を話して終わる宗派があり、聖霊がすでに自分たちの中に入ったと狂信者たちは信じている。悪魔の実体に取りつかれた哀れな犠牲者である。実際に聖霊を受けるには、清純・純潔である必要がある。なぜなら姦淫者は聖霊にそむくからである。

\* 異言を話す…『使徒行伝』2：1-13 参照。

96 イニシエーションの重い十字架を肩にかつぐ決心をする者は、精神主義の兄弟自身に迫害され、それどころか憎まれるのに気づくであろう。彼らはイニシエーションについて話をしながら毎日生活しているのであるが。純潔を憎む精神主義の兄弟は、羊の皮をまとった狼なので、純潔をいまわしく思う。彼らは最も洗練された哲学で、自分たちの愛する姦淫を弁護する。彼らにとって姦淫ほど愛するものはないので、彼らに性魔術の話をしたとたん、それを拒絶する。

97 わが兄弟、もしあなたがイニシエーションの重い十字架を肩にかつぎたいなら、道を

踏みはずしたその人たちの理論に妨害されたままでいてはならない。それらの闇の住人全員がクリストをはりつけたのである。

98 それらの闇の住人全員は、主をはりつけにしながら生きている。彼らは全員、ピロードの手袋の中にネコの爪を隠し、優しくほほえみ、言語に絶する崇高な言葉を話す、その考えは破滅にみちている。

99 「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは目に見えない墓のようなものです。その上を歩く人たちはそのことを知りません」。

\*英語版では聖書どおり以下のように訳されています。「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいのように」〔『マタイ』23:27〕。

## 9

100 イニシエイトになるには、すばらしい意識バランスがいる。パワーの開発は必要だが、それを渴望してはいけない。イニシエーションを渴望せずに、それを熱望する必要がある。悪人の心に美德を見だし、有徳者の心に邪悪さを見いだすべを知りなさい。人々は性魔術を実践しだして、その後で嫌になり、粘り強さと根気が欠けているために失敗する。自分のしていることを意識して気づかないなら、人は頑張れない。まず苦しめないなら、意識して気づけない。

101 この人類はまだ苦しみを多く必要とする。人々はたった一日でなんでも手に入れたがり、生涯、屈せずにやり通す者はまれである。人々はまだ道義的責任を負わない。

102 人々はスクールからスクールへと渡り歩いて生き、そのため失敗する。ノーシス運動から離れるノスティックは、まったく「無責任な人」、未熟な胚、胎児である。熟練したノスティックは、ノーシスから離れるくらいなら死を選ぶであろう。

103 光と闇の間に完全なバランスをとることは、実際的なアデプト（達人）の位を獲得することである。

104 狂信者は、誰もその完全なバランスをとれないであろう。

105 極悪人から大聖人が生まれる。聖人は容易に悪魔になることがある。すでに光を見た者は、まだ光を見ていない者よりも奈落に近づいている。

106 マインドの世界には、光と美にみちた壮麗なサロンがいくつか存在する。そこで出会うのは、言語に絶する光のマスターのように見える黒魔術師である。それらの闇の住人は神聖なことばかり話すが、その大変深遠な哲学の中で精液をまき散らすよう勧める。

107 多くのイニシエイトはその光り輝く誘惑に勝てず、奈落に落ちる。

108 偉大なイニシエイト、モーゼはこう言って精液の漏出を非難する。「人が精を漏らしたときは、その人は全身に水を浴びる。その人は夕方まで汚れる。精のついている衣服と皮はすべて、水で洗う。それは夕方まで汚れる」。

109 「男が女と寝て交わるなら、ふたりは共に水を浴びる。彼らは夕方まで汚れる」。  
(『レビ記』15:16-17,18)

110 そういうわけでモーゼは精液の漏出を不浄だと見なす。

111 闇の住人はネガティブな性魔術を教える。彼らはネガティブな性魔術の礼拝中に精液を射出する。

112 この種の礼拝は、身の毛もよだつ女神カーリー礼拝から来ている。

113 クーラ教団とその女神カーリーは、アトランティス人の黒魔術に由来する。今日、その女神カーリー教団はインドに存在する。このタントリックな礼拝で蛇はネガティブに目覚め、人間の原子地獄へと下降する。そのとき蛇は悪魔の恐ろしい尾に変わる。そのようにして闇の住人は純真な人たちをだます。それは「私も憎んでいるニコライ派の人々」の行ない〔『黙示録』2:6〕である。この礼拝でカナン人とカルタゴ、ツロ、シドンの住人は滅びた。その恐ろしい礼拝式でアトランティスは沈んだ。それは人間を、『黙示録』の語る「七つの頭の獣」に変える礼拝である。それはレムリア・アトランティスの怪物たちの身の毛もよだつ礼拝式である。精液をまき散らすよう教えるインストラクターはみな黒魔術師である。

114 ノーシスに入る人々の多くは一般に大変軽薄でかたくななので、このノーシスはどこか他のつまらないスクールのようにだと考える。それらの哀れな人々は気の毒だが間違っている。なぜならノーシスから人は天使か悪魔に変わってゆくからである。それがこの学習の恐るべき現実である。自分の魂を聖化せずにパワーを開発しはじめる者は、悪魔に変わる。ノーシスをビジネスにしようとする者は悪魔に変わる。

115 人々は利益、見え、先入観に基づいていつも考える。ノーシスに入るとき人は生きるために死なねばならない。傲慢なインテリはこの研究には不向きである。彼らには大変困難である。彼らはマインドを太らせようとするが、実はマインドを殺してから、それを全面的に変換して蘇らせねばならないのである。

116 ノーシスはとても奥深い意識機能である。

117 このことは理性やインテレクトでは理解できない。これは意識のきわめて深遠な問題である。多くのノスティックの兄弟は気まぐれである。断固とした不動の態度をとるかと思うと、優柔不断になって迷う。彼らはノーシスに入っていて、入っていない。いて、いない。言葉を聞いて、後で逃げ出す者は反クリストである。クリストの言うことを聞き、言葉は自分たちには厳しく思えるので、後で闇にもどる者である。後で人々にショックを与え、あきれさせる者である。邪悪な裏切り者。

118 彼らはクリストを銀貨30枚で売るユダである。言葉を聞くときは信仰心に満たされる。

119 それから再び闇に判断を狂わされ、主の言葉に反対してわめき立てる。

120 そのような者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましである〔『マルコ』9：42、『ルカ』17：2〕。

121 「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことは、霊であり、またいのちです。

しかし、あなたがたのうちには信じない者がいます。」 — イエスは初めから、信じない者がだれであるか、裏切る者がだれであるかを、知っておられたのである。 — そしてイエスは言われた。「それだから、わたしはあなたがたに、『父のみこころによるのでないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできない。』と言ったのです。」こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去って行き、もはやイエスとともに歩かなかった〔『ヨハネ』6：63-66〕。

122 いて、いないそれらの弱者、離れ去って行く者は闇の住人、ユダ、邪悪な反クリストである。

## 1 2

123 あらゆる種類の宗派、宗教、政党、祖国や国旗という考え、理論などから自由になる必要がある。

124 そういったものはみな、666の数字を持つ大淫婦の汚物である。

125 我々ノスティックの弟子は偽物に大いに注意すべきである。誰のあとにもついて行かないよう我々は弟子に忠告する。

126 霊的な道はまさしく「カミソリの刃の道」と呼ばれる。内も外も障害にみちている。インティモを具現するため我々自身の心の沈黙にひたろう。

127 誰のあとにもついて行かないよう我々は弟子に忠告する。

128 自分自身のあとについて行くように。ひとりひとりが、自分の光り輝くすばらしい内なる本質的存在のあとについて行くべきである。ひとりひとりが、自分の「私はある」を崇拜すべきである。

129 我々のあとについて来ないよう我々は弟子に頼み、嘆願する。追従者も信奉者も望まない。我々の友であるあなたがたが、自分自身の内なるマスター、光り輝く「私はある」の言うことに耳を傾けるように、本書を著した。彼はあなたがたのマスターであり、彼のあとについて行きなさい。

130 近ごろ現れている大勢の偽アバターラに注意しなさい。

131 偽物に注意しなさい。性的な誘惑に注意しなさい。

132 スピリチュアルセンターに決して通ってはならない。霊媒はあなたがたを道に容易に迷わすかもしれない。多くの弟子が、これら三つの危険な理由でひどく墮落してきた。イニシエーションと位階を失わないように、これら三つの重大な危険を避けなさい。

133 秘教的規律はとてども要求が多い。聖性をえせ信心と混同してはならない。えせ信心家の人間的タイプはこの世を涙でみたしてきた。狂信的なえせ信心家はどんなことにも震え上がる。闇のえせ信心家がコウモリ神のメキシコの彫刻を見たとき、黒魔術だと言った。えせ信心家にとっては、最も神聖なものでさえ黒魔術なのである。精神主義の姉妹たちは、偽善を共にしないからといってマスター・リテランテスを批判していた。えせ信心家の姉妹たちは、オウムたちのおしゃべりに加わらないからといってリテランテスを憎んでいた。彼女たちは口に出しても行わず、自分の知らないことを話す。えせ信心家はスクールからスクールへと蝶々のように渡り歩いて生きているだけで、座り心地のよい肘掛け椅子にいつも座っている。えせ信心家は性魔術を憎み、いつもびくびくして生きている。

134 えせ信心家は理論を楽しみ、自分は超人の王国にいると信じている。肉をひと切れ食

べて自分たちを仰天させようものなら、ガンジーやイエス・クリストのような人を厚かましくも破門するほど愚かすぎる。これがえせ信心家タイプで、いつも狂信的で、いつもびくびくし、いつも姦淫している。

135 イエス・クリストは信心家ぶる愚か者であったと、えせ信心家はいつも信じている。そう考える者は間違っている。

136 クリスト・イエスはものすごく革命的であり、大変厳しく、またとても優しいマスターであった。そのように聖性とは厳しく、また優しいものである。

137 本当の聖人とは、神の律法の十戒をすべて守る完全な紳士であり、善、真理、正義を守るため必要なときに剣の振り回し方を知っている。本当の聖人とは決してそのことを触れ回らず、いつもその行いで見分けることができる。「あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます」〔『マタイ』7：16、20〕。

## 1 5

138 傲慢で尊大な透視能力者は隣人を中傷し、この世を涙でみたく。透視能力者はニルバーナの湖のように穏やかでなければならない。そのとき、そのきわめて澄みきった湖面には宇宙の全景が映る。推理、傲慢、先入観、社会的偏見、当たり前的事柄を得意になって話す霊的な癖、怒り、利己主義などでいっぱいマインドという騒然とした不透明な水面には、奈落の闇のイメージのみが映る。

139 水面には木のシルエットが逆さになって映る。栄光にみちたあらゆるマスターにも、奈落に影がある。透視能力者が偏見にみちているとき、その影を現実と受け取る。そのようにして白ロジの偉大なマスターは、いつも透視能力者に中傷されてきた。

140 偏見と先入観にみちた透視能力者は、葉の茂った命の木を拒絶し、深い水底にひそむ奈落の悪魔のように輪郭が逆さにくっきり浮かぶ闇の影に魅惑される。昔、我々をほめたたえていた透視能力者の多くは、後に何らかの理由で考えを変え、そのとき我々に石を投げ、我々を中傷し、苦しめた。

141 実際、イマジネーションが嵐のようにわき上がる推理で攪乱されるとき、魂の星空はくもる。そのとき透視能力者は影を現実そのものと受け取る。

142 透視力を持つ菩薩が墮落すると悪魔よりひどくなる。透視力を持つ墮落した菩薩は、自分は全能でパワーにみちていると信じ、得意満面になる。事態に混乱し、影を現実そのものと受け取り、偉大なマスターたちを中傷する。

143 家庭を台無しにし、自分の知らないことを言い、自分の理解できないことを権威を

もって説明し、墮落した菩薩としての地位を決して認めず、自分のマスターよりも優れていると信じるようになる。

144 秘教的規律はととても厳しい。パワーを失うので透視能力者は自分のビジョンを他人に触れ回るべきではない。

145 透視能力者は謙虚、穏やか、従順、温和、純潔、丁重であり、言葉は控えめであるべきである。考えと言葉と行いは清らかでなければならない。透視能力者は幼な子のようにあるべきである。

## 1 6

146 本当に必要なのは生き方を知ることである。「いっさいの理論は味気なく、黄金の実のなる木だけがみずみずしい。その木とは人生である。」とゲーテは言った。

147 意識的にしろ無意識的にしろ黒魔術にはまっている多くのノスティックが、本書でノーシスから離れていくであろうと、白ロジは我々に知らせた。その言葉は彼らにはきわめて残酷に思えるであろう。それらの脱落者は反発し、我々を中傷するであろう。我々に敵対して、我々の名誉を傷つけるようなうわさを広めるであろう。

148 ノーシス主義は、今までに出会った他の多くのつまらないスクールのようなもう一つのスクールではないことを、知りたがりに警告する。多くの人が神智学徒になり、後に脱会する。それからバラ十字に移り、自分たちには何も起こらずにまた脱会する。スクールからスクールへと渡り歩いて生き、スクールが変わっても彼らには何も起こらない。ノーシスでも同じことができるのと彼らは考える。ノーシスに入る者は、敷居の門番の恐ろしい試練に内面的にあうことを我々は警告する。

149 もし勝利するなら、ニルバーナにいたる狭く細い困難な道に入るであろう。それから位階、イニシエーション、試練などが続く。弟子が高くのぼればのぼるほど、ますます墮落はひどくなる。光を見たことのない者は多くを知らず、それゆえ多く許される。しかし意識の度合いが高いほど、責任の度合いは大きい。光を見た後に離れる者は、悪魔に変わる。多くの菩薩はアストラル体の額に角を生えさせて、悪魔に変わりはてた。そのようにノーシスから人は天使や悪魔に向かう。大勢の人が道を誤った後、奈落をさまよいつける。結局は角が生えて、悪魔に変わる。

150 それがノーシスの恐ろしい現実である。

151 「知識を増す者は悲しみを増す」〔『伝道者の書』1:18〕。物好きや詮索家は引っ込んでいなさい。

152 冒瀆者は引っ込んでいなさい。ノーシスは両刃の剣である。

153 ノーシスは謙虚な者や有徳者を守って命を与え、物好き、詮索家や不純な者を傷つけ滅ぼす。

## 1 7

154 秘教的規律は実に恐ろしい。最悪の罪をマインドで犯す狂信者がいる。もし誰かを邪推するなら、厚かましくもインティモに責任をなすりつける。人々を中傷して「インティモがすべてを私に語ってくれる。」と言う。怒りを感じて、そのときこう叫ぶ。「私は怒っていない！ 私が感じるのはインティモの直観的な衝動である」。あらゆる悪想念、あらゆる邪念を自分の内なる神のせいにする。それらの人々は直観を悪意や邪推と混同し、沈黙の声をサタンの声とまちがえる。沈黙の声はむごいことは決して言わないと我々は言おう。沈黙の声は完全である。サタンの声は邪悪なことだけを言う。奈落では黒魔術師たちは友人の姿をして、イニシエイトの前でゾットするようなことを言い、話す。もしイニシエイトがそれらの闇の住人にだまされるなら、そのとき他人を中傷する者になる。中傷は盗みよりひどい。

155 中傷するイニシエイトは奈落に沈む。位階とイニシエーションを失う、つまり墮落するのである。

156 遠い昔、奈落の悪魔であったイニシエイトは今やすばらしくなった。もう闇の住人にはだまされず、悪魔を知りつくしている。その種のイニシエイトはいかなる闇の住人にもだまされず、奈落とは何かを知っている。彼らはその分野に精通した専門家である。善悪の知識の木をととてもよく知っている。古代に奈落を知らなかったイニシエイトは、今や闇の住人の愚直な餌食となる。その種のイニシエイトは闇の住人にだまされやすい。それらのイニシエイトは隣人の中傷者となる。他人をどなり、奈落に落ちる。神々になるには、善悪の知識の木を完全に知らねばならない。

## 1 8

157 クリストの御座に偽善家のパリサイ人はすわった。

158 盲人を手引きする盲人。全員、奈落に落ちるであろう〔『マタイ』15:14〕。

159 ぶどうが発酵しているからといって聖なるワインを拒絶した、偽善家のパリサイ人を我々は知っている。誰かが彼を家に泊めたところ、家主が肉を食べているからといって、彼は腹を立ててそこから逃げ出した。その邪悪なパリサイ人は、身の毛もよだつ黒魔術師であった。偽善家のパリサイ人！ 「口にはいる物はみな、腹にはいり、かわやに捨てられることを知らないのですか。しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人

を汚します。悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです」〔『マタイ』15：17-19〕。「あなたがたパリサイ人は、杯や大皿の外側はきよめるが、その内側は、強奪と邪悪とでいっぱいです」〔『ルカ』11：39〕。肉を食べているからといって、尊敬すべきマスター・リテランテスのことをパリサイ人たちは批判していた。リテランテスは答えていた、「まず私は自分の欠点を正すつもりです。欠点を正した後、それから肉を食べるのをやめましょう」。するとパリサイ人たちは法のこの偉大なグルに激怒して反撃に出ている。

160 我々が罪をとがめるので多くの偽善家のパリサイ人は我々を憎む。我々が憎んでいるとパリサイ人は言い、そのように我々を誤解する。というのは我々は売春婦のようには愛想がよくないからである。

## 1 9

161 多くの精神主義者は恥ずべき状態にあり、意識していないことについて議論し推論しているのを見るのは痛ましい。カルマについて話しても、カルマのマスターと会話したことがない。宇宙について知的に議論するが、幽体離脱のしかたを知らない。天使と個人的に会話したことがない。本を読んだので議論するだけであり、それだけのことである。いちばん深刻なのは、知っていると言っていることである。

162 気の毒な人々... それに彼らの持っているその傲慢... 哀れむべきである。

163 本を読んだことのない、正覚を得た、パワーあふれるマスターたちと我々は知り合ってきた。偉大な精神主義者のインテリとも知り合ってきたが、まったく無知にもかかわらず、確かにプライドにみちていた。何冊も本を読んできた精神主義の姉妹たちはもっとひどく、おそるべき虚栄心にみちている。見たこともないことについて姉妹たちが話し、議論する様を見るのは恥ずべきである。転生<sup>リー・インカーネーション</sup>について話しても、前世を覚えていない。カルマについて話しても、カルマの裁判所を意識的に訪れたことがない。宇宙創造について議論しても、意識的にアストラル<sup>カイト</sup>体で天地開闢に居合わせたことがない。見たこともないことについて権威をもって話し、それから座り心地のいい広間の肘かけ椅子に誇らしく座る。

164 一般的に、それらの姉妹は長いひげと髪、崇高な偽物を結局は崇拝する。別の機会に交霊術師になり、それからしまいには有名人の生まれ変わりになる。彼女たちは全員、マリー・アントワネットやジャンヌ・ダルクやマグダラのマリアになり、誰も賤民になりたがらず、全員が「偉人」になる。

165 正覚を得た本当のマスターは、決してそのことを言い触らして歩かない。

166 本当の弟子とマスターは、意識的なアストラルトリップのしかたを知っている者たちである。前世を覚えていて、アストラル体で密儀神殿に通える兄弟姉妹は、正真正銘の覚

者である。彼らは決してそのことを触れまわらず、まさしく本当に知っている。

## 20

167 幽体離脱のしかたやカルマの裁判所での清算のしかたを知っている者、密儀神殿で直接教えを受ける者、過去の転生を覚えている者。神秘学書を一冊も読んだことがなくても彼らは確かに知っている。たとえこの世では哀れな文盲であっても、一介の料理人<sup>いっかい</sup>や原始的なインディオにすぎなくても、本当に知っている人々である。

168 パワーあふれるまったく文盲の覚者を二人、我々は知っている。ひとりは（コロンビア）サンタマルタ市シェラネバダの原始的なインディアン。もうひとりはパワーにみちたグル、リテランテス、カルマ的正義の偉大なマスター。この二人のパワーあふれるイニシエイトは、連続意識を持つという特権を享受する。特権を与えられたそんな状態で、この二人のイニシエイトは決して書き記すことのできない知識を持っている。もし書き記されたら冒瀆されるからである。

169 この二人のグルと知り合った偉大なインテリたちは、彼らを蔑視した。なぜなら彼らはオウムのように話さないでいたからである。

170 彼らは信心ぶらないでいたからである。知的ではなかったからである。自分たちの身に起こった秘教的事件を言いふらして歩いていなかったからである。

171 意識をときどき偶発的に目覚めさせるだけの人たちと我々は知り合ってきたが、彼らはこういったことに関して単なる初学者にすぎない。重要なのはアストラル界層で連続意識を持つことであり、そのために本書でプラクティスと鍵を提供してきた。

172 意識的な幽体離脱のしかたを知らない者は、神秘主義を知らない。

173 神秘学書を読んだり、巧妙に理論づけたりすることは誰だて行う。

174 神秘的な智恵を意識して気づいているのは別問題である。

175 本当の神秘的智恵は内的世界で学ぶ。

176 幽体離脱のしかたを知らない者は神秘主義を知らない。

## 第 8 章 二人の証人

1 「それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ」」（『黙示録』11：1）。

2 その測りざおとは我々の脊柱のことである。その測りざおに沿って管がひとつ存在し、その中を聖霊の火が性器から上昇する。そのペンテコステ（五旬節）の火はおそろしく神聖な燃える蛇に似ている。重要なのは女性の愛し方を知ることである。重要なのは精液をこぼさずに性行為から身を引くことである。そのように聖霊の火が目覚める。そのように創造器官の燃える蛇が身をもたげる。愛、キス、性行為ほど崇高なものはない。精液をこぼさないとき、そのとき精液は精液の蒸気になる。精液の蒸気はエネルギーになる。性エネルギーは陽エネルギーと陰エネルギーに分極する。陽エネルギーは太陽的、陰エネルギーは月的である。

3 これらの太陽と月の流れは脳まで上昇する。

4 太陽の流れは右鼻孔と関係し、月の流れは左鼻孔と関係する。性器から二つの交感神経コードが立ちのぼるが、二つの管は脊髄に巻きついて脳に達する。その対の管内を通して脳という聖杯まで太陽と月の流れが上昇する。兄弟、あなたの聖杯を光の聖なるワインで満たしなさい。「それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する」〔『黙示録』11：3〕。これら二つの交感神経が二人の証人である。

5 これらはアステカの象徴的な彫刻シロネン Xilonen の背中にぶら下がる二つの聖なるコードである。「彼らは全地の主の御前らまえにある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される」〔『黙示録』11：4, 5〕。

6 二つの交感神経コードはおそろしく神聖である。

7 太陽原子と月原子が尾骨で結合するとき、燃える火の蛇が目覚める。それで、これら二人の証人はそんなものすごい力を持っている。

8 「この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている」〔『黙示録』11：6〕。

9 アステカのシロネンの背中で二つのコードは何と美しく見えることか。

10 二つのコードは火の蛇を目覚めさせるが、ヒンドスタン人はそれをクンダリニーと呼ぶ。アステカ人はその蛇をケツァルコアトルと呼び、ガラガラヘビで表現する。それは聖霊の火である。蛇が目覚めるとき、生身の蛇がたてるようなシューシューという音をたてる。その甘い静かなシューシューという音は、ガラガラヘビのたてる音やコオロギのかすかな鳴き声に似た聖音のようである。この性の蛇は情熱的なキスと性魔術で目覚める。この蛇は内的に七重構造で、脊柱の七つの教会をすべて開いて、我々を神々に変える力を持っている。二人の証人だけが、その蛇を目覚めさせて、天を開く力を持っている。その蛇を目覚めさせる方法は以下のとおり。「陰茎を女性の膣に挿入し、精液をこぼさずに身をひく」。

11 学徒が性魔術を実践するにつれ、自己を浄化していくにつれ、必然的に小密儀の九つのイニシエーションを意識に受ける。それら九つのイニシエーションは見習い（プロベিশョナー）期間中の秘教の道にすぎない。小密儀の九つのイニシエーションという秘事に学徒が物質界で気づかないということがある。そういったことは意識に起こり、もし学徒が肉体の脳にその記憶をもたらす方法を知らないなら、意識の奥底のそれらの出来事に物質界で知らないふりをするのは当然である。

12 二人の証人は聖霊の火を我々に目覚めさせる力を持っている。我々が自己を浄化していくにつれ、少しずつ蛇は上昇していく。そのように大密儀の九つのイニシエーションの準備をする。小密儀は偉大な密儀の準備をする道にすぎない。

13 小密儀はまた断ち切らねばならない鎖でもあり、大密儀に到達してはじめて切れる。

14 二人の証人には、鼻根に位置する聖なる父の原子まで蛇を持ち上げる力があり、そのとき我々は大密儀の第一イニシエーションを受ける。性エネルギーを変換しなさい。

15 我々はあなたがたに言う。性魔術を実践して、悪の巣窟から永久に離れなさい。あなたがたの内なる「私はある」を捜しなさい。我々を救えるのは彼だけである。「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。彼の戒律を守って〔訳注：日本語版聖書では「自分の着物を洗って」〕、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通して都にはいれるようになる者は、幸いである。犬ども、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行なう者はみな、外に出される」（『黙示録』22：13-15）。二人の証人は悪党全員に対してエデンの園の門を閉める。二人の証人はおそろしく神聖である。「この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である」（『黙示録』11：4, 6）。インドでは彼らはイダおよびピンガラとして知られ、それらがヒンドスタン名

である。

16 二人の証人の力を利用するために、性魔術を実践せねばならない。

17 我々は上品、清潔、純粹、高潔、立派なノーシス主義のために働く。不言実行。我々は実践的なノーシス主義を望む。道徳的に齋戒沐浴すべきである。

18 意識的なアストラトリップを覚えるべきである。

19 二人の証人を性魔術でよみがえらせるべきである。そのようにペンテコステの火が目覚める。

20 火はゴミ、ラルバ、がらくたを焼却する。そのとき火の密儀に入り、そのように自己をクリスト化する。新時代は血と火で始まるであろう。

### ガイオ (GAIO)

21 聞きなさい、深く愛しあう男と女よ。性的に結合しているとき、マントラ「ディス、ダス、ドス」(DIS, DAS, DOS)を発音しなさい。各文字の音をできるかぎりのばして発音しなさい。そのように聖なる蛇を目覚めさせるであろう。性の恍惚の間、キスと愛撫が増すにつれて、全創造物に湧きあがり鼓動する電気と元素の火とで、あなたがたはみたされてゆく。女性よ、性行為をコントロールしなさい、そうすればクングリニーを目覚めさせるであろう。男性よ、性衝動を抑えなさい、そうすれば羽毛のある蛇ケツァルコアトルを目覚めさせるであろう。オルガスムスの前に離れるなら、精液をこぼさないなら、聖なる火があなたがたに目覚め、あなたがたは神々になるであろう。光に至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はごくわずかである。多くの道を通して人は神に至ると、闇の住人は言う。狭い門がひとつ、狭い道がひとつあると、われらの主クリストは我々に言ったにすぎない。「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです」〔『マタイ』7:13, 14〕。その狭い門からエデンの園を出たので、その門からエデンの園に入らねばならない。その狭い門とは性である。出たところから入らねばならない。エデンの園とは性そのものである。エデンの園には、まちがった門から入れない。しかし、わが兄弟たち、「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは食欲な狼です。あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう」〔『マタイ』7:15, 16〕。エデンの園に入らないし、他人にも入らせない人の実が良いはずがあるか。

22 闇の住人は射精を勧める。性魔術は危険だと彼らは言い、性魔術を実践する正当な理由を持つには無数の条件を要求する。闇の住人は、哀れにも苦悩する人類に対して性の門

を閉ざし、それから無数の屁理屈<sup>へりくつ</sup>を用いて、哀れな人々を知的体系の檻<sup>かじ</sup>の中に閉じこめる。それはルシファーたちの罪である。「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです〔『マタイ』7:19, 20〕。しかし、忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、人々から天の御国をさえぎっているのです。自分もはいらず、はいろうとしている人々をもはいらせないのです〔『マタイ』23:13〕。忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、その人を自分より倍も悪いゲヘナ〔地獄〕の子にするからです」〔『マタイ』23:15〕。わが愛する兄弟たち、気をつけなさい、「わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう」〔『マタイ』24:5〕。

23 そのように、わが兄弟たち、「にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします」〔『マタイ』24:11〕。闇の住人は理論につぐ理論を用いて、性の門を閉ざすであろう。

24 我々、白ロジの兄弟たちは『聖ヨハネの黙示録』の七つの教会を研究するよう勧めらる。性の神聖な火で脊柱の七つの教会を開くのに必要な唯一の条件が、そこには見いだされるであろう。

25 聖書にはすべてが書き記されている。ルシファーたちのきらめく知力にだまされてはならない。あなたがたが神々に変わるよう、我々は性魔術の恐るべき秘密を本書で伝授した。実際、大きな犠牲を払って本書を手渡したが、人類からのお返しは恩知らずだと絶対的に確信している。ごろつきは本書を研究しても学ばず、我々を批判中傷、迫害し、我々の名声や信用を落とすであろう。

26 毒舌家は本当の長兄全員に敵対して、いろいろな中傷や、我々の名誉を傷つけるうわさを広めるであろう。それが哀れにも苦悩する人類から我々の受ける報酬である。我々は全員、救いの道は他にないことを、永遠なる生ける神の名において誓う。解放にいたる道が他にいくつかあると言う者はみな、うそをついている。そんな人はルシファーや悪魔のようであるか、少なくとも誠実だが間違った人である。

27 「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」〔『ヨハネ』14:6〕。私はエデンの園の聖なる言葉である。エデンの園とは性そのものである。その門から出たので、その門から入らねばならない。それが法である。

## 性問題

28 性を軽蔑する者はエデンの園を拒絶する。エデンの園とは性そのものである。性を重要視する必要はないと黒魔術師は言い、そのように弱者に対してエデンの園の門を閉ざす。

「そら、君に妻を預ける。お望みなら妻を利用していい。」と別の男性に言って、極端に走った闇の住人のケースを我々は知っている。この黒魔術師は妻子を捨てて、黒魔術の教義を全世界に説いてまわった。「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、その人を自分より倍も悪いゲヘナ〔地獄〕の子にするからです」〔『マタイ』23:15〕。性は重要ではないと言うことは、エデンの園を放棄することである。なぜならエデンの園とは性そのものだからである。性を蔑視する人々が大勢いるが、それらの哀れな人々は性がエデンの園の門であることを無視する。

29 それらの哀れな人々は狭い門から入りたがらず、楽園を放棄して、奈落に沈む。性という出た門からしかエデンの園に入れない。その狭く困難な門をばかにする者は、そこから入らず、奈落に沈むであろう。

30 我々をその門から遠ざけるため、ルシファーたちはすさまじい努力をする。

31 クリストがこう言ったのも当然である。「私を捜す千人のうち、ひとりが私を見だし、私を見いだす千人のうち、ひとりが私に従い、私に従う千人のうち、ひとりが私のようになる」。

32 インテレクトは、黒魔術師が我々をエデンの園の門から遠ざけるのに用いる武器である。ルシファーたちは、きらめくインテレクトを持っている。ルシファーたちは性を軽蔑し、姦淫者で、ひどく邪悪で偽善的である。最も深刻なのは、闇の住人が聖人のような外見をしていることである。彼らは福音書の光、愛、慈善について語る。一見したところ謙虚そうに現れ、それから性は重要ではなく、下品でいかがわしく、自分たちは最も純粋な霊性を探究すると言う。そのように哀れな人類に対してエデンの園の門を閉ざす。「しかし、忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、人々から天の御国をさえぎっているのです。自分もはいらず、はいろうとしている人々をもはいらせないのです」〔『マタイ』23:13〕。

\*原則として〔 〕は訳注で、( )は原文に最初からついているものです。たとえば本章の第1節の(『黙示録』11:1)。

## 第9章 七つの教会

- 1 クンダリニーは脊髄下部の穴から中に入るが、その穴は普通の俗人では閉じている。精液の蒸気がこの脊髄の穴を開け、火の蛇がそこから入っていく。脊髄に沿って「中心管」canalis centralis が存在し、東洋でブラフマ・ナーディーと呼ばれる別のさらに細い管がこの管内に存在する。ブラフマ・ナーディーの中にはさらに細い第三番目の管が存在する。その第三番目の管がチトラ・ナーディーで、このナーディーに七つの蓮華が存在する。それらが七つのチャクラ、『聖ヨハネの黙示録』の語る七つの教会である。
- 2 クンダリニーが脊髄を上昇していくにつれて、七つの教会がひとつひとつ開いていく。この七つのチャクラは脊柱から開花する七つの蓮華に似ている。聖蛇がエペソの教会に閉じこもっているときは、これらの蓮華は脊髄からぶら下がっている。しかし蛇が脳まで上昇するとき、これらの蓮華は上方を向いて、クンダリニーの性の火で輝く。
- 3 たぶんクンダリニー覚醒の権利を持つために、弟子を怖がらせて、無数の足かせと複雑難解な理論を提供する精神主義スクールがいくつか存在する。
- 4 このようにして闇の住人は、哀れにも苦悩する人類に対してエデンの園の門を閉ざす。
- 5 そんな複雑難解なたくさんの理論を前にすると弟子は無力になる。
- 6 わが兄弟たち、実を言うと、クンダリニーを目覚めさせて、尾骨にある第一番目の教会を開くため必要なのは性魔術の実践のみである。「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者（すなわち姦淫と手を切る者）に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう」〔『黙示録』2：7〕。言い換えると、性魔術の実践によって楽園に入り、命の木の実を食べるであろう。クンダリニーを目覚めさせて、性器と関係するエペソの教会を開くには、忍耐、苦しみ、ワークが必要である。
- 7 第二番目の教会を開く条件 — それは聖なる父に対する子としての愛。およびすさまじい苦難と貧しさに勇ましく耐えるすべを知ること。これが前立腺の教会、スミルナの教会である。
- 8 第三番目の教会はベルガモで、これはまったくの貞潔で目覚める。
- 9 第三番目の教会を目覚めさせたい者は、偶像に捧げられた食べ物（理論、主知主義、現代の科学主義、快楽、ごちそう、酔い等）を食べてはいけない。この教会は太陽神経叢（胃）の高さにある。
- 10 第四番目の教会はテアテラで、心臓に属する。この教会を開くのに必要な聖性の条件

は以下のとおり。貞潔、慈善、奉仕、信仰、忍耐、大愛。

11 以上が我々の神殿にある下位の四つの教会である。三つの上位の教会は神殿の塔にあり、その塔とは人間の頭部のことである。クンダリーニーは脊柱の七つの教会を開く。クンダリーニーの発達、進化、進行に必要な唯一の条件は『聖ヨハネの黙示録』の第一、二、三章に書かれている。それゆえ、たぶんクンダリーニー覚醒の権利を持つために、闇の住人が提示する足かせと複雑な知的理論は、いっさい不必要なのである。

12 聖蛇は神の言葉である。さて神殿の塔の話が続けよう。

13 第四番目の教会はサルデスで、甲状腺チャクラと関係し、これは喉頭の教会である。聖蛇がサルデスの教会を開くと、内的世界で音を聞くことができる。神秘の耳が開いて、我々は内的に光の言葉を話し、言葉で創造できる。喉頭は言葉をはらむ子宮である。天使の創造器官とは喉頭である。この教会を開くのに必要な美点は不寝番の意識<sup>ピジランス</sup>、後悔、善行である。

14 火がヒラデルヒアと呼ばれる第六番目の教会を開くとき、そのとき透視が目覚める。この教会は、脳下垂体から蓮華が咲いているように見える眉間チャクラと関係する。透視によって万物の高次面を見ることができる。透視によって内的世界と生死の偉大な神秘が見える。この教会を開くのに必要な道徳的条件は性能力、正直・誠実、聖なる父に対する忠誠である。このチャクラは驚異的な門であり、それが開くとき聖霊の白ハトが飛ぶ。

15 火が松果腺に位置する、ラオデキヤと呼ばれる第七番目の教会を開くとき、そのとき聖人の光輪が頭上に輝く。これがダイヤモンドの目、ポリビジョンの目、全知の目である。

16 聖蛇が松果腺から眉間に進むとき、そのとき高いイニシエーションが引き続いて起こる。

17 これが大密儀の第一イニシエーションであり、このイニシエーションで霊はインティモと結合し、我々は白同胞団の大密儀のマスターになる。インティモと結合するには大変な謙虚さが必要である。『黙示録』にはこう書かれている。「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座<sup>ろぞ</sup>に着いたのと同じである」〔『黙示録』3:21〕。

18 霊がインティモと結合するとき、我々は大密儀のマスターの白いチュニックを着る。眉間には光を放つ白い五芒星が輝き、七つの教会が栄光に輝く。我々はいかなるたぐいの物質的乗り物も乗らずに、この偉大なイニシエーションに出席する。この偉大なイニシエーションは肉体の外、高次世界で受け、新たなマスターはひとつの玉座とひとつの神殿を受ける。

19 クリストは、メルキゼデクの位にしたがって我々を自然の王と祭司にするためにやって来た。新たなマスターは我々の意識の深みから生じ、創造的な喉頭を通して自分の考えを述べる。新たなマスターはおそろしく神聖な力である。「ししがほえるときのように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおのおの声を出した」〔『黙示録』10:3〕。これら七つの雷は、我々の脊柱に鳴り響く七つの教会の七つの主音である。「それから、私の見た海と地との上に立つ御使いは、右手を天に上げて、永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして、誓った。「もはや時が延ばされることはない」」〔『黙示録』10:5, 6〕。

## 加害者

20 ヨガは西洋では誤解されてきた。

21 『シークレット・ドクトリン（秘密の教義）』の著者であるマスター、ヘレナ・ペトロブナ・ブラバツキーはヨギであったが、それでもブラバツキー伯爵の未亡人になった後、結婚せねばならなかった。彼女が伯爵と一緒に生活しなかったことは誰もが知っているが、再婚しないといけなかった。

22 彼女のような偉大なヨギが単なる肉感的な情欲で結婚するはずはなく、そのうえ尊敬すべき長老と結婚した。だから動機はもっと深く、もっと秘教的なのである。実際にそのマスターは宇宙的实现のため結婚が必要であった。ヨガによって何かを達成したが、すべてを達成したわけではなかった。性魔術をしないヨギは、水のない庭のようなものである。彼女は性魔術によって七匹の蛇を完全に発達させた。東洋のヨガ・スクールでは性魔術をひそかに教える。あいにくだが、西洋には多くの家庭を台無しにした偽ヨギが現れた。

23 性は下品で退廃的だと、これらの偽預言者は教え、エデンの園の壁を飛び越えられると信じている。

24 これらの偽ヨギは多くの家庭の幸福をぶちこわした。間違った門からエデンの園に入れると信じている。偽ヨギは大勢の有徳の妻に性のことをソツとするほど大嫌いにさせた。そういうふうして、これらの人物は聖霊をそのように侮辱して、多くの家庭の幸福をぶちこわしてきた。

## 心配事

25 性魔術を実践しだす兄弟をいつも怖がらせる人々が大勢いる。心配事は数えきれないほどある。「性魔術は危険だ。配偶者が腹を立てる。クンダリーニーは別のルートを進む。」という心配事がある。これはみな、苦悩する人類に対してエデンの園の門を閉ざすため、黒ロジジのでっち上げた話である。

26 性魔術は人類の正常な性行為であり、したがって有害であるはずがない。精液の射出はルシファーたちの教えた悪癖であり、あらゆる悪癖は有害である。理解があるところに怒りはなく、無理解な配偶者はイニシエイトにとって悩みの種である。その悩みは沈黙、アート、知性で解決する。無理解な配偶者の前では黙るほうがいい。こういった場合、そのことを言わずに、すべてを行い、黙って実践し、沈黙してマントラを発音し、行って言わず、アートと愛がすきまをみたま。知性のある者は、行間で言っていることを理解するといふ。クンダリーニは別のルートを進むというあの別の心配事は事実でない。なぜなら弟子が第一番目の蛇を上げはじめるとき、一人の専門家のマスターに助けてもらえるからである。脊髄管を通して弟子のクンダリーニを導かねばならず、作業を終えると、専門家はその報いを受ける。

27 イニシエイトが第二番目の蛇と作業しだすとき、別の専門家に助けてもらえる。以下同様である。弟子は決してひとりではない。心配事は、苦悩する人類に対してエデンの園の門を閉ざすため、黒ロジのでっち上げたものである。

## 聖霊教会

28 聖霊教会とはテアテラの教会である。これは心臓の教会である。結婚の料金を請求する司祭はひどい冒瀆を犯す。結婚は聖霊に属し、心の神秘であり、心を商売にすることは聖霊を商売にすることである。

29 結婚の秘蹟を商売にすることは、聖霊の神秘をひどく冒瀆することである。

30 愛は売り買いできない。なぜならそのとき聖霊に対して重大な罪を犯すからである。

31 「人はどんな罪も赦していただけます。しかし、聖霊に逆らう罪は赦されません」。  
〔『マタイ』12:31〕

32 自殺者は聖霊に対して罪を犯す。

33 聖霊は、愛と性で我々に生命を吹きこんでくれた。

34 自殺者はこの世に再び帰って来たとき、自分の意に反して死なねばならず、それが罰である。マスターを裏切るユダは、恩知らずで聖霊に対して罪を犯す。マスターの愛は心臓〔心〕の教会にある。心の火はクンダリーニを支配する。クンダリーニは心の真価にもとづいて発達、進化、前進する。たった一回の射精でも、じゅうぶんクンダリーニは脊椎骨を数個、下降する。失った管を取り戻すのはきわめて困難であり、それが弱者に対する罰である。クンダリーニの上昇は大変遅く、困難である。ひとつひとつの脊椎骨は、ある聖性の条件をいくつか要求し、これが法と愛の畏怖である。

35 男性は生ける神の神殿の一本の柱、女性はもう一本の柱である。聖霊の神殿の二本の柱はおそろしく神聖である。男性は拡張する原理、女性は引きつける原理であり、両者の性的結合に救いの鍵がある。愛は愛を糧とし、キスは深く熱愛しあう二人の神秘的聖別である。愛の至高の恍惚のうちに人間の理論を忘れる。

36 性行為はつまるところ人間の<sup>サイコクシニアル</sup>心理的性的なリアリズムにおける愛の同質化 consubstancialización である。男性は力と強さ、女性は優しさである。

\* consubstancialización は consubstancial = 「父・子・聖霊の同質性」の派生語。英語版では consubstantiation = 「実体共存説（聖体内にパン、ぶどう酒の本性とキリストの体と血の本質が共存するというルターの説）」と英訳しています。

37 ペテロは天国の鍵である。ペテロ pedro は「岩」piedra を意味し、その岩とは性のことであり、性魔術は天国の鍵である。岩（性）の上に「私はある」の教会を建てるべきである。

38 愛の魔法なくして実現は不可能である。愛し方を学ぶ者は一柱の神になる。性は賢者の石、イエソッドの立方石である。性的に結ばれた男性と女性は神々になる。理論づけるよりも愛するほうがいい。

39 ゲーテは言った、「いっさいの理論は味気なく、ただ黄金の実のなる木だけがみずみずしい。その木とは人生である」。

40 いたずらっ子、立派な庭、良妻を備えた家庭は、世界中の精神主義スクールの全理論を合わせたものよりも価値がある。清純、高貴で毅然とした優しい紳士は、女性にとっては世界中の全蔵書よりも価値がある。

41 聖霊の聖なる火で我々は神々になる。知的理論でごろつきになる。

42 愛に祝福あれ。深く愛しあう二人に祝福あれ。

## 七つの神殿

43 脊柱の七つの教会は、大密儀の七つの神殿と密接に関係し、これらの神殿の代表者は脊髄の七つのチャクラにある。それゆえ、その七つの教会は法と愛の畏怖が統治する七つの神殿である。この七つの教会は人間と宇宙に、小宇宙と大宇宙に存在する。

44 脊髄の七つの教会を開いていくにつれて、偉大な密儀の畏怖のみが統治する七つの内なる神殿のひとつひとつに入りこんでいく。たとえば稲妻と雷鳴と嵐の中でサルデスの大聖堂を見つめるとき、我々は聖なる畏怖にみたまされる。脊髄の喉頭チャクラ（サルデスの

教会)を開いたとき、はじめてそこに入れる。

45 イニシエイトが杖の上に蛇を上げたとき、族長の杖、アーロンの杖、七節のアシ〔測りざお、竹〕、黄金のアシ等を受け取る。そのときラオデキヤの教会に入る。その大聖堂は純金でできている。脊柱の火を用いて作業するにつれて、イニシエイトは違った杖を受け取っていく。東洋のヨギの七節の竹は、七つの教会を備えた脊髓を象徴する。

## 七匹の蛇

46 メキシコは新しい驚きをいつも提供してくれる。メキシコのアステカ文化博物館には首を切られた人間の彫像の奇岩がある。この奇妙な人物の頭は七匹の蛇と入れ替わっている。そこで目にするのは、この神秘的な人物の男根が勃起状態にあることである。男根は控えめにシュロの葉(勝利のシンボル)で象徴されている。男根のシンボルはアステカ・マヤ文化にたくさん見られる。テオティワカンのケツァルコアトル神殿ではきわめて特別な蛇崇拝が行われた。その神秘的な至聖所の無敵の壁にはガラガラヘビの彫刻が見られる。

47 ヒンドゥー教徒は魔力をもつ蛇クンドリニーについて語る。アステカ人はその奇岩で二つのことを我々に教えてくれる。一つ目はクンドリニーには七段階の力があること。二つ目はクンドリニーはまったく性的であること。

48 クンドリニーとは七匹の蛇を全部合わせたものである。三匹ずつの二つのグループ、および我々を神、法、聖なる父と結びつける七番目の火の舌の至高なる戴冠。

49 神智学徒は人間の七重構造について語る。

50 神智学の真理に照らしてこれらのことをよく考えると、各器官は内的、形而上学的に七重構造であることを我々は支持する。我々の脊髓も例外ではなく、やはり七重構造である。髄管に沿って、『聖ヨハネの黙示録』の語る七つの教会という七つの神経センターが存在する。これらの七つの教会はクンドリニーの性の火で活動する。そのようにして七匹の蛇は七つの体で七つの教会を開く。

51 クンドリニーの性の火は性魔術で目覚める。男根と子宮の結合には力の鍵が見いだされる。聖なるワインを一滴たりとも射出しないという条件であるが。アステカ人の間ではクンドリニー覚醒のため性魔術が実践されていた。神殿の聖なる中庭、そこに男女はまる数カ月とどまり、愛撫しあい、愛しあい、さらに性交すらしていた。だが射精を避けるため動物的エゴを抑制するすべを知っていたのである。そのように生命の清水は精液の蒸気に変換し、これらの蒸気はクリスティック・エネルギーに変換していた。クリスティック・エネルギーは、イダとピンガラを上昇する太陽と月の流れに分極していた。

52 太陽と月の原子が尾骨で接触するとき、クンドリニーつまり羽毛のある蛇ケツァルコ

アトルが目覚める。これら七匹の蛇は斬首人像で表現されている。

53 一匹目の蛇は肉体に属する。二匹目はエーテル体に属し、三匹目はアストラル体、四匹目はメンタル体、五匹目は意志体、六匹目は意識体、七匹目はインティモ、我々の真実の内なる本質的存在に属する。これらがイニシエーションの七つの門である。蛇は次々と上昇していく。これらが大密儀の最初の七大イニシエーションである。我々は性の門からエデンの園を出たし、その門からしか再び中に入れず、偽りの門はない。エデンの園とはまさしく性なのである。

54 七匹の蛇は地、水、生命の普遍的な火、風、エーテルのタットワを支配する力を与えてくれる。

55 七匹の蛇はテレパシー、直観、神秘の耳、透視、直観的ビジョン、全知を我々に目覚めさせる。我々を神々に変えてくれる。メキシコ博物館所蔵の斬首人像は古代英知のすばらしい宝である。愛は実践魔術のいしずえである。

56 アステカの神殿では、深く愛しあう男女が、魔力を持つ恐るべき火の蛇、聖蛇ケツァルコアトルを目覚めさせていた。

57 我々の宿命は愛すること、恋することである。愛の力に打ち勝てるものは世の中にはない。二人が深く愛しあうとき知的理論を忘れ去る。読書よりも愛するほうがいい。熱愛しあう二人の情熱的なキスは、精神主義スクールの理論よりも力がある。愛の恍惚のうちに性的に結ばれた二人は、クンダリーニを目覚めさせて脊髄の七つの教会を開く力を持つ。神々でさえ性の恍惚のたまものである。愛に祝福あれ。一度も愛したことのない者は、人生とは何かを知らない。愛の力で魂の炎をかき立てねばならない。動物的エゴを殺さねばならない。

58 まず性に集中し、それから性を放棄しないとイケない。まずパワーを発達させ、それからパワーを放棄しないとイケない。人々はこのことを理解せず、馬を連れてこないうちに乗りたがる。哀れな人々！... なんでも反対に理解し、頭ではなく尻尾から始めたがる。聖なる火を目覚めさせていないのに性を放棄したがる人もいる。パワーを獲得していないのに、それらを放棄したがる。なんと愚かなのか。持っているものも放棄できないのに、持っていないものを放棄するとは。この道はきわめて困難である。これはカミソリの刃の道である。すでにクリスト化した者だけが性を放棄できる。すでに「絶対」に入る準備の整っている者だけがパワーを放棄できる。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」〔「ヨハネ」14:6 “I am the way, the truth and the life.”〕とイエス・クリストは言ったが、人々はそのことを理解しない。

59 人々は自らの光り輝く「私はある」〔I am〕に興味を持たない。

60 人々は自分自身の内面を探さないで、偽物のあとを追いかけるほうを好む。光り輝く「私はある」を自分自身の内面に探究しないで、聖者に変装した詐欺師の崇拝者になる。搾取して奈落に導く悪人。それが人々の好むところである。なんと愚かなのか。悪人のあとを追いかけるために、「私はある」、道、真理を捨てる。にもかかわらず真理を探究していると言う。

61 「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」とイエスは人々に言った。「私はある」とイエスが言ったとき、自分のことを言ったのではない。自称するなんて馬鹿馬鹿しいにもほどがあり、愚かである。イエスについてそのように考えるのはお笑いぐさであろう。そのマスターはたったひとつの道を我々に教えたのであり、真理にいたる多くの道については話さなかった。四つの福音書のどこにも、イエスが多くの道を我々に示したとは書いていない。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」とイエスは言っただけである。

62 光にいたる狭く細い門から入ろう。その門とは性である。

63 我々はひとりの哀れな、ものすごく神秘的な老女と知りあった。老女は不快な目で性を下品、不潔、卑猥なものとして見ていた。そして自分はまったく純潔で清純だと思っていた。老女の清らかさを知るため、そのサタン（敷居の門番）を調査したとき、我々は仰天して身を守らねばならなかった。あのサタンは身の毛もよだつしかたで我々を攻撃した。哀れにもその人の性的渴望は激しかったが、ただ病気の老女の体は情欲をみだすのに役立たないでいた。それだけのことであった。

64 多くの人「性は下品だ。私は純潔、清純、とても霊的で、性というくだらないものにもはや魅せられない。」などと言う。

65 それらの超脱的な神秘家たちのサタンを調べると、ひどく抑圧された性的渴望にみちていることが明らかになる。サタンは姦淫者では強く、たくましい。

66 ロバにうまく乗る者、獣の調教を習得する者のみが、サタンをきれいな美しい子供に変える。しかしロバに乗り、性魔術を実践し、獣を飼いならして征服するため本当に獣と対決せねばならない。それが純潔を達成する唯一の方法である。

67 性を嫌悪すべきものとして見るそれらの哀れな人たち。実際には、サタンを守って、太らせ強くたくましくさせる。再びこの世に舞い戻ってきたとき、その種の神秘家は男女共、もっともひどい肉感的な情欲に自制心を失う。

68 もし内側でサタンが巨大で強くたくましく、情欲を満足させる好機をうかがうなら、口では言い表せないほどの神秘家であることが何の役に立つのか。言い換えるとミサを執行している悪魔。七匹の蛇を用いて作業し、自分をクリスト化しよう。もはや神々になっ

たとき、はじめて性行為を越えていくであろう。そのときロバに乗って天のエルサレムに入るであろう。獣を退治したので、そのとき本当に純潔であろう。

69 純潔は聖性のいしずえである。



Decapitated Man  
Museum of Aztec Culture, Mexico

首を斬られた人間  
アステカ文化博物館、メキシコ

## 第 2 部

### 第 1 0 章 イエスの誕生

1 マスター・イエスは墮落した菩薩であり、至高の犠牲を払って起き上がらねばならなかった。多くの精神主義の兄弟は菩薩とは何かを知らないので説明しよう。

2 インティモは神聖霊と人間的霊という二つの<sup>ツインソウル</sup>双子霊を持っている。菩薩とは人間的霊のことである。マスターが化身したいとき、化身するため自らの人間的霊（菩薩）をあらかじめ派遣する。この霊が母胎に入り、普通の平凡な子供として誕生する。そのときこの子供がマスターの菩薩だと言う。これらの菩薩は自分自身にインティモを具現できるよう準備せねばならない。

3 内なるマスターは完全な複合体で、インティモと神聖霊とがすでに全面的に融合したものである。インティモは男性的で、その神聖霊（意識）は女性的である。その結果、この混合から完全で神聖な雌雄同体<sup>ハーマフロジイト</sup> hermaphrodite が生まれる。その完全な雌雄同体の魂、それが内なるマスターであり、このマスターが化身して準備するため、自分の人間的霊を送り出す。

4 菩薩の準備がすでに整ったときマスターが菩薩に入る。マスターが誕生したと、そのとき言われる。イエスが飼い葉桶の中で生まれたと言うとき、我々はイエスの霊的誕生を秘教的に断言している。飼い葉桶というのは象徴にすぎない。

5 知恵ある魂は、哀れにも苦悩する人類を助けるため、この世の飼い葉桶の中にいつも化身する。家畜小屋の動物たちは人間の情欲や激情である。どんなマスターの菩薩でも墮落し、そのときはマスターは化身できない、ということがたびたびある。マスターは墮落しない。菩薩は人間的なので墮落することがある。菩薩が転落するとき、借金返済のため新たな化身に送り出されるが、もし何とかして立ち上がらないなら、ますます困難な環境で化身させられる。ついに起き上がる時、そのときマスターはある偉業を行うため菩薩に入る。イエスはマスターの菩薩であり、神殿で生まれた。イエスは墮落していて、超努力と犠牲を払って立ち上がった。イエスの誕生は霊的である。

6 「この人々〔神の子ども〕は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」〔『ヨハネ』1：13〕。

### 霊的誕生

7 本質的存在が誕生するよう、人間的な「我」の過程を終わらせないといけない。自分を高我と低我に分けるという過ちを犯してはいけない。精神主義の学徒が高我と呼ぶもの

は本質的存在ではなく、人間的な「我」の洗練された一形態であり、人間的な「我」が生命を維持して生き残るために利用する巧妙な自衛手段である。サタンの洗練された概念、人間的な「我」の利用する巧みな言い逃れ。生きるために死なねばならない。すべてを得るためにすべてを失わねばならない。生きる権利を持つために十字架の死で死なねばならない。人間的な「我」のなきがらの上に、栄光とパワーにみちた本質的存在が誕生する。

「人間我」(the man-I)はいたる所で目立ちたがり、皆に拍手喝采され褒められたがる。髪とひげを伸び放題にし、変な服装をして公然と通りを歩き、だまされやすい人々にマスター、長兄などと言われる。

8 「人間我」はユダヤ教の礼拝堂シナゴグや公の場で一等席にすわりたがる。謙虚さはなく、遠慮なく何もかも話し、何もかも言い、何もかも語り、人に拍手喝采されて褒められるよう芸術家のように働く。

9 「<sup>くう</sup>空の空。すべては空」〔“Vanity of vanities and all vanity.” 『伝道者の書』1:2〕。

10 「人間我」は嫉妬深い。「人間我」はアリストイポスのチュニックで変装する。言い伝えによれば、ギリシャの大哲学者アリストイポスは自分の知恵と謙虚さを見せようとして、穴がいくつも開いた継ぎはぎだらけの古くなったチュニックを着た。哲学の杖を握り、ものすごく謙虚そうにアテネの通りを歩いた。そのようにしてアリストイポスはソクラテスの家にたどり着いた。

11 アリストイポスが来たのを見るとソクラテスは叫んだ。「おお、アリストイポス、服の穴から虚栄心が見える」。

\*vanity (スペイン語 vanidad) には「虚栄(心)」の他に「むなしさ、空」という意味もあります。本章、第9節の『伝道者の書』の言葉を参照。

12 「人間我」は、氷の容器の中に怒りを隠す方法を知っている。

13 凍った容器の中の怒りの火は美しく、口では言えない香りを放つ。嫉妬は慎重さ、分別と呼ばれる。怒りは混乱とか神経質などと呼ばれ、実際、祈りの香の中に罪が隠れている。本物のマスターは自分がマスターだとは決して言わない。

14 本物のマスターはそれとわからない。平凡な一般市民のように平服をして、無名のまま誰にも知られずにあちこち歩きまわる。

15 本質的存在が誕生するよう「我」は完全に死ぬべきである。本質的存在は、今あり、いつもあったし、いつまでもあるものである。本質的存在は各原子に鼓動する命であり、我々の中にある「いと高き方」〔至高なる神〕である。本質的存在は非人格

的であり、インティモであり、我々の中にある「いと高き方」である。本質的存在は欲望、マインド、意志、意識を越えている。知性を超越している。本質的存在の存在理由はまさしく本質的存在だからである。本質的存在は命である。私は本質的存在である (I am the Being.)。

## 人間的な我の起源

16 人間的な「我」は、我々がエデンの園を去ったときに出来はじめた恐るべきラルバである。まず「我」は地上の俗人になり、それから教養のある知識人として現れる。それから生存するための「我」のぎりぎりの努力は、自分はマスターだと公言することであり、そう言われると喜ぶ。「我」は他人に自分の姿や美質や神聖なパワーを見せびらかすため、売春婦のように裸になって喜ぶ。そのときは預言者になって、他人が尊敬するようパワーと徳をひけらかす。

17 「我」はアリスティポスのチュニックを着る。痛い所を突かれぬかぎり謙虚であるが、そこを突かれると崇高な怒りにみだされて反発する。

18 「我」は自著や自分の偉業について話して喜ぶが、それは口では言えないようなプライドである。そのうえ聖者や殉教者に変装して、自分はマスターだ、それどころか天使だとすら公言する。

19 大昔、「我」は単純素朴であったが、長い年月を通じてますます複雑で気難しくなっていた。この複雑化の過程を進化・進歩だと呼ぶ人もいる。実際にはこれは進化ではなく、「我」というその恐るべきラルバの複雑化・強化なのである。「我」は無数の微妙な変換をこうむる。時として悪魔に見えることもあれば、時として幼い神に見えることもある。

20 要約すると、「我」は連続した三つの複雑化の段階をへると断言できる。第一段階は地上の一般人である。第二段階はインテレクトを発達させる、教養とか教育のある人間で、第三段階は最高に位置するエリートである。この第三段階は最も危険である。この第三段階にたどり着くと、「我」はとてはずるく危険になり、そのとき天使のような「神我」になる。天使の態度を取り、自分の価値や功績を全員に認められたいと願う。「天使我」(the angel-I)は「人間我」よりも微妙に危険である。「我」は死者の家に入るとき崩壊する。「絶対」に入ろうとする神々は「我」を殺して、死者の家に入らねばならない。それゆえ大勢のマスターをでっち上げるのはよそう。マスターは内なるクリストのみである。

21 本当のグルはそれを触れまわらない。本物のグルは内なるクリストである。本物のマスターは無名のまま誰にも知られずあちこちに行き、自分の働きもパワーもひけらかさず、謙虚である。本物のマスターはともかく品行方正な一市民である。本物のマスターは決し

てインテリではない。インテレクトは「人間我」の動物的機能である。本物のマスターは汚れない素朴で気さくな聖なる幼児のようである。本物のマスターは、生まれる人全員を啓発する内なるクリストである。

22 死後、霊は相次ぐ精神的進化期間をへてアストラル体とメンタル体を脱ぎ、それから言語に絶する無限の至福にひたる。そこでは火の驚嘆すべきハーモニー（和声）が鳴りわたる。あいにく、神秘の敷居に「我」はとどまって、我々が新たにこの世に戻ってくるのを待っている。「我」に悪と苦しみの根源がある。

23 もはや「我」が死のうとしていいるとき、栄光と威厳にみちた本質的存在が誕生する。

24 各イニシエーションにおいて我々の中で何か死に、何か生まれる。

25 そのように「我」は少しずつ死んでいき、そのように本質的存在は少しずつ生まれていくので、イニシエーションは誕生と呼ばれるのである。自然は飛躍しない。本質的存在が我々に生まれるよう、「人間我」は死ぬ必要がある。本質的存在がその冠を受け取るのは緊急に必要である。その冠とはキラキラと光り輝く「私はある」である。

26 「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与よう」〔「黙示録」2：10〕。

27 いのちの冠を受けた後、「我」は神に変身し、この危険な「神我」は内的に死者の家に入り、少しずつ決定的に崩壊していく。「死者の家」とは「我」が少しずつ死んでいく内的スクールである。

## 敷居の門番

28 敷居の門番とは、後に天使のような「神我」に変身する人間的な「我」のことである。死後、本質的存在はアストラル体とメンタル体を捨て、精神的進化のコースをたどる。そのように本質的存在は、星のきわめく無限の空間の中に幸せそうにひたる。あいにく神秘の敷居に敷居の門番がとどまる。それが「我」である。本質的存在がこの世にもどってきて新たな子宮に入るとき、結局は「我」が月の体つまり低級アストラル体の構成要素をなす。

29 生まれ変わると本質的存在は新たなメンタル体、アストラル体、エーテル体、肉体に包まれる。無邪気な新しいパーソナリティーはこれら四つの体からできている。あいにく「我」はこの新たなパーソナリティーを少しずつ占拠していき、ついには完全に支配する。

30 本質的存在は純粹で、「我」は恐ろしいラルバである。本質的存在はクリスタルのように透明で、「我」はサタンのように極悪非道である。本質的存在はどんなことにも腹を

、立てず、「我」はなんにでも腹を立てる。本質的存在は快樂と苦惱、毀譽褒貶、勝敗に無関心である。「我」はなんにでも腹を立てる。苦しみ、泣き叫び、喜び、快樂を求める。

「我」はいつも安全と保障を求める。本質的存在は決して恐れず、それゆえ安全と保障は求めない。「我」は人生、死、飢え、貧困等を恐れる。恐怖のため人間はたがいに搾取しあい、戦争を始め、盗んで蓄積し、殺害し、武装する。

31 本質的存在は欲望、執着、渴望と恐怖、死とインテレクト、人間の意志、知性を越えている。本質的存在は命の木である。

32 「我」は知的になり、その執着と恐怖、嫉妬と激情・情欲、利己主義と憎しみゆえに苦しむ。（「我」をイエスの語る「私はある」と混同しないでおこう。「我」は敷衍のラルバである。「私はある」は命の冠、本質的存在の輝く冠である）。「我」は名誉について話し、満たされることを求め、好き嫌いに従う。我々の欠点はみな恐ろしい「我」に由来する。本質的存在は好き嫌い、快樂と苦惱、インテレクトと理性を越えている。本質的存在が誕生するよう「我」を殺さねばならない。「我」はパワーをひけらかして喜ぶ。不幸にも、身のほど知らずに人々の預言をしだすイニシエイトは、沈黙をわきまえないため暗殺されて死ぬであろう。暗殺されるかもしれないので、透視能力者は他人の人生に夢中になる〔干渉する〕べきではない。クンダリニーが脊髄を上昇していくにつれて、「我」が死んでいき、本質的存在が誕生していく。

33 33個の脊椎骨のひとつひとつが、ある美德をいくつか要求する。各脊椎骨における特定の欠点の死をこれは意味し、そのように本質的存在は各脊椎骨において誕生していく。そのように「我」は各脊椎骨において少しずつ死んでいく。各イニシエーションで我々に何か生まれ、何か死ぬ。

34 イニシエーションは誕生と呼ばれる。死なくして誕生することはできない。性なくして誕生することはできない。誕生したい者は女性の子宮に入らなければならず、そのようにしてはじめて誕生する権利を持つ。

35 「我」の過程を知るだけでは「我」を殺すにはいたらない。本質的存在は火なしでは誕生できず、火は性なしでは目覚められない。「我」は炎の剣の刃のもとでのみ死ぬが、その剣とはクンダリニーのことであり、クンダリニーは妻との性魔術の実践でしか目覚めない。

36 宇宙的正義の恐るべき剣で「我」を殺さねばならない。そのようにしてはじめて、「我」の死によって、神の威厳が我々を通して表現できる。正義の剣とはクンダリニーのことであり、妻と共にクンダリニーを目覚めさせよう。

## 第 1 1 章

### イエス・クリストの初めての偉大な降誕

- 1 イエスの偉大な第一イニシエーションは、蓮華のつつましく汚れなき誕生と同じくらい自然で当然であった。菩薩イエスはイニシエーションも、パワーも、称号も、段階も、天使の位階も、マスターの位も、社会的地位も、神聖な地位も、王国も、金銀も渴望しないでいた。天使、大天使、熾天使、能天使ら全員以上でありながら、ただ単に善人であるほうを選んだ。
- 2 誰かが「悪天使よりも人間であるほうが価値がある。」と言った。
- 3 その最も複雑なしかたで、「我」は巧妙に強欲になる。もはや貴族の称号は渴望しないが、神聖な称号を渴望する。皆にマスターと呼ばれたいと思い、天使の位階の秘教的称号を求め、諸世界のカルマに巻きこまれて限らない永遠の時間を無駄にする。もはや金銀は渴望しないが、神秘的パワーを渴望する。もはや名誉も偉大さも渴望しないが、イニシエーションと段階を渴望する。もはや風格〔領地、統治権〕も地上の王国も渴望しないが、内的王国と高次世界での風格威厳とを渴望する。楽園を統治して喜び、信じられないように思えるが、なんと自分自身の神聖な天使の位階を失うまいと用心するまでになり、言語に絶する誘惑者になる。諸世界と諸太陽を統治して喜び、エデンの園を慈悲の菩薩たちに提供する。もはやふわふわのベッドに横になって地上の快適な邸宅でのんびりしたいとは思わないが、ニルバーナの言語に絶する至福に安らぐことを熱望する。このような存在たちは狭く厳しい困難な道を好まない。ニルバーナの天上の憩いに安らいで喜ぶ一方で、哀れにも人類は苦しみ、泣き叫ぶ。そして我々が「絶対」に入るのを阻止するため、彼らは我々に魅惑的な楽園を提供する。
- 4 本当に私は親愛なる弟子たちに言うが、長期の辛い義務の道を進むためニルバーナの幸福を放棄するほうがいい。
- 5 義務は我々を直接「絶対」へと導いてくれる。これはニルバーナの幸福より優れている。ニルバーナのそれらの神聖な誘惑に負けないようにしよう。
- 6 誘惑する神々の提供するニルバーナの誘惑、惑星の王国を放棄し、人類愛ゆえにニルバーナ（天上の幸福）を放棄する菩薩は光栄にも三度確認される。そして恐ろしく長い時間の後、「絶対」に入る権利を獲得する。「絶対」はその運動から解放された生命であり、至高のリアリティーであり、ただ抽象的な絶対運動として表現するだけの抽象空間、限らない幸福、完全な全知である。「絶対」は、創造によらない〔永遠なる存在の〕光と完全なる充満、絶対的幸福、その運動から解放された生命、無条件の無限の生命である。
- 7 絶対的に「在る (Be)」権利を持つために、「我」の過程に終止符を打たねばならない。その最も巧妙に洗練された仕方、「我」は危険な幼な子に変わる。大勢のニル

バーナのマスターたちの「我」は我々を誘惑して、「苦しい道を捨てて、ニルバーナに来たらどうか。我々は幸福だ。」と言う。我々の苦しみにも同情して、ニルバーナの幸福で誘惑する。天使、大天使、熾天使、能天使、力天使、座天使、さまざまな栄光の天使階級の「我」には、美しさにみちた幼な子の無邪気な面が常にある。その神我は段階、イニシエーション、パワー、神聖な称号、ニルバーナの威厳、神聖な風格を渴望する。神我は完全に洗練された人間我そのものである。私の言うことを聞きなさい、おー、ニルバーナの天使よ。聞きなさい、おー、惑星の神々、幸福な存在、神人、ニルバーナの住人よ、聞きなさい。「絶対」にまっすぐ我々を導いてくれる長く辛い義務の道は、ニルバーナの幸福よりも優れていると我々は言う。義務の道を進む者はその道から離れたがらない。苦しい道から離れる者は哀れである。彼らは世界のカルマに巻きこまれたままであろう。人類の目に涙がひとしずくでもあるかぎり、心の痛みがひとつでもあるかぎり、幸福を受け入れるのを断る — 我々、人類を深く愛する者たちはそう言う。

8 段階、パワー、イニシエーション、神聖な風格を渴望するかわりに、苦しむ人類に役立つ人間であらうと努力すべきである。

9 偉大な奉仕の法則で精一杯がんばるべきである。聖なる父の偉業で実り豊かな仕事を捜すべきである。哀れにも苦悩する人類にもっともっと役立つ手段と方法を捜すべきである。これは内界での称号、イニシエーション、秘教的段階、惑星の王国を渴望するよりも優れている。

10 パーソナリティー、個性、「我」は苦悩と悲嘆の硬い岩に我々を縛りつける頑丈な鎖である。神々と人間は制約された生の苦しみを受け入れる。

11 「絶対」では我々はカルマと神々を越え、法を超越する。マインドと個人意識は、せいぜい我々が人生に四苦八苦するのを助長するだけである。「絶対」ではマインドも個人意識も持たない。そこでは我々は無条件の自由な、絶対的に幸福な本質的存在である。「絶対」はその運動から解放された無条件、無制限の生命、法に苦しむ恐れのない生命である。魂と物質、カルマと苦しみ、思考と言葉と行い、静寂と音、それに形態を越えた生命である。

12 「絶対」は抽象的な絶対空間、抽象的な絶対運動、遠慮のない無条件の絶対的自由である。絶対的全知と絶対的幸福。

13 「絶対」に入るため「我」の過程を終わらせねばならない。人間的な「我」は死者の家に入るべきである。アストラル体のなきがらの共同墓地に行くべきである。威厳とパワーにみちた本質的存在が誕生するよう、奈落で崩壊すべきである。

14 大勢のマスターたちの「我」はそのパワーと風格を喜ぶ。自分は神のようだと宣言し、威厳と言語に絶する美しさを持つ。大勢のマスターたちの「我」は自分の姿とパワーを

人に示すため娼婦のように裸になり、人に褒められ尊敬されるようビジョンを話して喜び、自分のイニシエーションと秘密について話す。お金を数えて生きる欲張りのようである。貴族の家柄と莫大な資産についてしょっちゅう話して、誇らしげに生きるごろつきのようなものである。

15 人間と神々よ、聞きなさい。イニシエーションとは意識の目覚め、意識の奥底の問題である。口をつぐみ、謙虚になり、慎むすべを学ぼう。本当の進化は「我」ではなく意識に起こる。「我」は進化しないで複雑になり、それだけのことである。鉱物意識は植物意識として目覚めるとき進化する。鉱物の各原子は、美しさにみちたエレメンタルの肉体である。これらの鉱物エレメンタルは言葉、意識を持ち、種族や一門でグループをつくる。無邪気な子供のようなものである。

16 鉱物レベルの上には崇高な植物界がある。植物意識もまた動物意識として目覚めるまで進化する。各植物は、動物界に入るのを熱望する子供っぽいエレメンタルの肉体である。動物意識も人間意識として目覚めるまで進化する。ずっと後、人間は天使、大天使等として目覚める。

17 「我」はラルバにすぎず、敷居のラルバそのものであり、ますます複雑になっていく。「我」は内なる獣で、四つの体（肉体、エーテル体、アストラル体、メンタル体）を支配する。「パーソナリティー」と呼ばれるその怪物はそういうふうに出来ている。

18 大勢のマスターの「我」はもはや政治的地位は望まないが、霊的地位を望み、リーダーとして喜び、スクール、ロッジ、スピリチュアル・ムーブメントでの高い位階のために戦う。「在る」権利を持つため、「我」の過程とパーソナリティーを終わらせないといけない。正義の冠を受け取る権利を持つため、個性を終わらせないといけない。

19 その運動から解放された偉大な生命の真の幸福を我々に与えられるのは、非人格的生命と本質的存在のみである。

## 神殿のセレモニー

20 神殿はお祭り気分ひたっていて、祭壇には貴重なランプが燃える。

21 三色旗が聖域に意気揚々とひるがえり、その旗には父の青と子の黄と聖霊の赤が輝く。反省の部屋の中では東方の三博士が待つ。三博士は神秘の太陽、ベツレヘムの星に導かれて神殿にやって来た。気高い菩薩イエスは祭壇の前にすわったが、白い亜麻布のチュニックを着て、頭を白いフードでおおっている。空には厚い黒雲が広がり、雨が激しく降っている。預言者によってこう書かれている。「ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから」〔『マタイ』2：6、参考『ミカ書』5：2〕。ここに、その羊

飼いが自分の霊的誕生に居合わせており、これは心のクリスマス（クリスト降誕）である。今や良き羊飼いは立ち上がり、神殿の聖域に進む。恐ろしい雷がひとつ闇に輝くが、これはおそろしく神聖な光線である。この恐るべき瞬間、内なるマスターがその菩薩に入った。この菩薩はすでに第一番目の蛇を杖（さお）の上に上げていた。菩薩イエスは準備が出来ていたのである。

22 三博士はイエス・クリストという人間の幼な子を礼拝しに来た。これがマスターの誕生である。これが心のクリスマスである。「この人々〔神の子ども〕は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」〔『ヨハネ』1：13〕。

23 三博士は神殿でイエスを礼拝した。イエスはそのとき崇高なことを言った。「おー、わが神エホバ。天から落ちたあの雷はなんとすごかったのか。イエスは神殿の神秘の聖域まで上ったが、その尊い聖域は美しい欄干で囲まれていた。

24 マスターはフードをはずして椅子にすわった。その瞬間、雷が天から落ち、内なる本質的存在がマスターに入った。

25 肉によって生まれた者は肉であり、御魂<sup>みたま</sup>によって生まれたものは魂である〔『ヨハネ』3：6〕。イエスは魂と真理に生まれた。天使の合唱隊は喜びにみちて歌い、三博士は良き羊飼いを礼拝した。

26 「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」〔『ルカ』2：14〕。

27 イエスは中背で、顔は日焼けして小麦色である。黒髪で、やはり黒いひげはほんの少し生えていた。目は黒くて鋭く、額は広く、かぎ鼻で、唇は薄く迫力があつた。イエスの神秘的誕生、それが大密儀の第一イニシエーションである。

## 第 1 2 章 聖家族、エジプトに逃れる

1 預言者たちが言っていたようにイエスがユダヤのベツレヘムで誕生したとき、世の救い主の霊的誕生を君主に伝えるため、イニシエイト団がヘロデの宮殿の大ホールに集まった。

2 ヘロデは中背のほっそりとやせた体つきで若々しい紅顔をし、当時のならわしに従ってチュニックを着て、きらびやかな戦士のかぶとを頭にかぶっていた。

3 ヘロデは仕事台の前にすわって神殿のイニシエイトたちの報告に耳を傾けたが、それを信じず、イエスが約束されたメシアだと認めず、あれこれ議論し、激怒してイニシエイトたちの報告を退けた。

4 イエスはヘロデに「全くそのとおり。あなたの言うとおりで。実はあなたは私のことが少しも気に入らなかったのだ。」と言った。するとヘロデは立腹して、会議に「月を食べてはならない。」と話しかけた。月崇拜を捨ててはならないという意味で言ったのである。

5 民族宗教はみな月に属し、ユダヤ教は月に属する。

6 ヘロデはまったく保守主義者で、そういう人としてユダヤの保守的伝統を守っていた。ユダヤ民族の古い祭司階級を守っていた。ヘロデは世の救い主を拒絶した。

7 ヘロデの宮殿でのこの集まりは意義深く、そのイニシエイト会議で世界の太陽 Kristus 展開の新時代が告知されたのである。明らかに保守主義者だったヘロデは、月の過去と民族的偏見に固執し、イエスが世の救い主だと認めようとはしなかった。このイニシエイト会議は失敗に終わった。そのときヘロデはイニシエイトを殺すよう命じ、兵士に幼な子を殺すよう命じた。イニシエイトは秘教的に幼な子と呼ばれるので、幼な子とはヘロデが殺させたイニシエイトのことのである。兵士はベツレヘムの通りを歩いて行って、イニシエイトたちを殺した。そのようにエレミヤの預言が成就した。「ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ」〔『マタイ』2:18〕。イエスはうまく生き延び、それからエジプトの地に逃れた。季節は冬、雨が多量に降っていた。イエスは勇ましく天候の厳しさに耐えねばならなかった。この事件が起こっているとき、すでにヨセフとマリヤは年老いていて、わが子イエスのためひどい目にあった。聖家族は陸路と水路で旅をし、エジプトにたどり着いた。

### エジプトのイエス

8 エジプトの地でイエスは密儀学徒としてピラミッドに入り、女神ベスタに仕える白いチュニックを着た巫女が、イエスに研究するようにと最初のパピルス文書を渡した。

9 エデンの園の木は二本ある。善悪の知識の木と命の木である。善悪の知識の木、それは性であり、命の木は本質的存在である。あらゆる正真正銘の文化的教義はこれら二本の木を念入りに研究しなければならない。なぜならもう一方の木を忘れて一本の木だけを研究しても、役立たない不完全な知識が得られるにすぎないからである。性を知らないなら、本質的存在を研究して何の役に立つのか。本質的存在を知らないなら、性を研究して何の役に立つのか。

10 両方の木がエデンの園にあり、それどころか同じ根を共有する。

11 これらが白ロッジの主要な二本の大柱、知恵と愛である。知恵は善悪の知識の木、愛は命の木である。エジプトの地では二本の木の教義が深く研究されていた。命の木の宿命的な影が「我」である。知識の木の宿命的な影が姦淫である。人々は影を現実と受け取る。

12 「我」の過程を終わらす者は、自分自身に本質的存在を実現する。

13 姦淫を終わらす者はクリストに変わる。

14 イエスは神殿内でものすごい浄化を体験し、ひとりのマスターに毎日教えを受けていた。ある日、階段を降りていると、ひとりの女性に誘惑された。イエスは誘惑を克服して勝利した。マスターは何度も試練を受けた。「我」との戦いはすさまじかった。菩薩は前世で墮落してしまった。イエスは五匹の落ちた蛇を上げねばならなかった。六匹目と七匹目の蛇はマスターに属する。

15 マスターはひとりも墮落せず、墮落するのは菩薩である。

16 菩薩は意志霊（人間的霊）である。人間的霊は肉体、エーテル体、アストラル体、メンタル体という罪の四つの体をまとっている。これら四つの罪の体のおのの蛇は落ちていて、イエスはそれらを上げねばならなかった。

17 五匹目の蛇は人間的霊に属し、やはりそれも落ちていて、イエスはそれを上げねばならなかった。イエスは地球に数限りなく生まれ変わっていて、墮落していた。神の子は栄光にみちていた... が、人の子は墮落していて... 立ち上がった。神の子とは、この世に生まれるあらゆる人の内なるクリストである。

18 イエスはイニシエイト団で学んだ。当時、影の闇の人物がひとりエジプトのイニシエイトたちと戦っていたが、イニシエイトたちは光の立場を堅持した。

19 ひとりのインストラクターが性の大神秘をイエスに教えた。

20 ピラミッド内には絢爛たる婚礼の間がひとつあり、神殿のその寝室でイエスは妻と性魔術を実践した。その巫女である妻は、美しい心を持つ金髪の白人女性で、神殿のきわめて高位のイニシエイトであった。イエスはひとりの人間であり、また一柱の神でもあった。人間として非の打ちどころがなく、妻がいた。

21 性魔術の恍惚の間、イエスは以下の順に聖音節を唱えていた。「インリ — (IN... RRRRIIIIII)」、「エンレ — (EN... RRRRRBBBBE)」、「オンロ — (ON... RRRRROOOO)」、「ウンルー (UN... RRRRRUUUUU)」、「アンラー (AN... RRRRRAAAAA)」。

22 マスターは音節 IN-RI、EN-RE、ON-RO、UN-RU、AN-RAの文字それぞれの音を長くのばして、これらの音節を唱えていた。マントラ INRI によって眉間にある第六感が目覚めるとき、人の考えを読み、内的世界のものをすべて見ることができる。マントラ ENRE によって魔法の耳が目覚めるとき、はるか彼方から聞き、内的世界の声を聞くことができる。マントラ ONRO は心臓にある直観を開く力を持っている。直観は第七感で、心臓と松果腺にある。これは心臓では沈黙の声、松果腺ではポリビジョンつまり直観的ビジョンである。直観的な人はすべてを見、すべてを知りつくし、全知で力強い。マントラ UNRU によってテレパシー感覚が目覚めるとき、遠くから人々の考えを知覚できる。テレパシー感覚は太陽神経叢のへその上にある。マントラ ANRA によって、いくつかある肺チャクラが目覚め、過去生を思い出す。これらの感覚はアストラル体に咲く蓮華に見える。

23 イエスは性魔術の間、これらの蓮華を回転させた。

24 そのとき性的に結ばれた男性と女性は、電気と宇宙的火でみちている。まさしくそれはクンドリーを覚醒させてチャクラ、円盤、アストラル体の磁気的車輪を回転させる瞬間である。性の力によってアストラル体のパワーをすべて目覚めさせることができる。

25 性の力によって我々は天使に変わる。

26 マスターはマントラ「アウム (AUM)」も唱えていた。このマントラは秘教的に「アオム (AOM)」と発音する。「ア」で口をじゅうぶん開き、「オ」で口を丸め、「ム」で口を閉じる。すべてのものは「ア」で発生し、「オ」で温められ、「ム」で誕生する。誕生したい者は、その権利を持つため女性の子宮に入らねばならない。

27 「アオム」の各文字は、途切れることなくのばさねばならない。

28 マスター・イエスは性魔術の恍惚の間、マントラ「イアオ (IAO)」も唱えていた。イエスは射精を避けるため、ちょうどいい時に離れるすべを知っていた。そのように神秘的パワーをすべて目覚めさせた。

29 マントラ「イアオ」は、つながず別々に母音のひとつひとつを長々とはっきり発音して、唱える。「イアオ」は聖なる蛇を目覚めさせる力を持っている。イエスは女性の愛し方を知っていて、そのように魂の聖火を目覚めさせ、神殿の三十三の聖室を踏破した。

30 神は完全なる二人の頭上に輝く。

31 女性ほど美しいものはない。愛の欲びは我々を神々に変えてくれる。女性が愛し方を知るとき女神に変わる。男性が熱愛の仕方を知るとき神に変わる。

32 肉欲的情欲は、どす黒い血のような赤色にオーラを染め、情欲を克服すると、その色はバラ色に変わる。

33 理論づけるよりも愛するほうがいい。難解な理論を解釈するよりも熱愛し、愛し、口づけするほうがはるかにいい。だが「サタン」を殺しなさい。

34 ゲーテいわく「いっさいの理論は味気なく、ただ黄金のツレノ実のなる木だけがツルミずみずしい。その木とは人生である」。

### 神殿の三十三室

35 エジプトには三十三室を備えた、ある地下通路が存在していた。我々の脊椎骨のひとつひとつが神殿のそれぞれの部屋に関係する。内的世界ではこれらの脊椎骨は「峡谷」と呼ばれる。蛇は峡谷から峡谷へと脊柱管を上っていく。たった一回の射精でも蛇は過失の重さに応じて峡谷をひとつ、もしくはそれ以上下降する。失ったそれらの峡谷を取り戻すのは至難のわざである。

36 われらの主キリストは我々に言った、「墮落者が失ったものを取り戻すには後で大いに奮闘せねばならないので、弟子は墮落してはならない」。

37 性魔術は、すでに家庭を営む夫婦の間でのみ実践できるにすぎない。いろいろな女性と性魔術を実践する者は不義を犯すことになり、姦夫や姦婦は誰ひとりとして何も得るところはない。

38 他人を助けるため性魔術を実践するというのを口実に、不義を犯す男女がいる。姦通を正当化するためこれらの知識を利用するのは、聖霊に対する恐るべき罪である。姦通者は、号泣と歯ぎしりのみが聞こえる外のくら闇に沈む〔「マタイ」8：12 他多数〕。

39 性魔術は、しかるべく営まれ構成された家庭内でのみ実践できるにすぎない。姦通を正当化するため性魔術を利用する者は哀れである。

40 (肉体に属する)一匹目の蛇を上げたので、ベツレヘムでイエスは神秘的に誕生することができた。エジプトでは(エーテル体に属する)二匹目の蛇を用いて作業を始めた。巫女のおかげでイエスは二匹目の蛇を用いて作業できたのである。この蛇がエーテル体の脊髄を上っていくにつれて、マスターは部屋から部屋へと地下通路を通り過ぎていった。

41 各脊椎骨にはその特別の条件、美德そして試練、誘惑、危険がある。闇の住人は各脊椎骨で我々を攻撃する。神殿の三十三室のひとつひとつでイエスは恐るべき神秘を学び、秘密のパワーを受け取った。エーテル体の蛇が眉間に到達したとき、聖なる父の太陽が夜の雨のなかに輝き、中心に片目のあるイニシエーションの星がナザレのイエスの頭上にとまった。眉間にあるフィラデルフィアの教会が、どこから見ても美しい太陽のように輝いた。イエスは白い亜麻布のチュニックを着て、イニシエイトたちはイエスの上に真っ白のフードをかけた。

42 言語に絶する宇宙的祝祭が神殿の栄光を輝かせ、うっとりするようなシンフォニーが星満ちる魂の天国を宇宙的歓喜でみたした。そのように菩薩イエスは大密儀の第二イニシエーションを要約しおえた。そのように第二の誕生を迎えた。二匹目の蛇はイエスのエーテル体の七つの教会を完全に開き、その驚くべき乗り物は栄光に輝いた。

43 愛と女性によって、これがみな成し遂げられる。女性に祝福あれ。知恵による愛し方を知る男性に祝福あれ。

44 「エジプトを出て紅海を渡るなら、あなたがたは全員、神々になるであろう」。人間がエーテル体をクリスト化するとき、エデンの園に入り、その住人になる。クリスト化したエーテル体は霊の婚礼衣装、黄金体である。二匹目の蛇はエーテル体のパワーを我々のために解き放ち、エーテル体でトリップするパワーを授けてくれる。女性は性的衝動を抑制して、精液をまき散らすのを避けることにより、これをすべて成し遂げる。男性は射精を避けるため折よく離れるすべを知ることにより、これをすべて成し遂げる。そのようにしてクンダリニーは太陽ロゴスのオーラの中で発達、進化、進歩する。イエスのエーテル体ははりつけにされ、五つの聖痕を受けた。ひとつひとつの偉大なイニシエーションでゴルゴダの丘の全ドラマを生きないといけない。イエスのエーテル体はクリストになった。イエスのエーテル体の七つの教会は、栄光にみたされ輝いた。

### 三匹目の蛇

45 二匹目の蛇を用いた作業を終えた後、マスターは火の三匹目の蛇を用いた作業を始めた。三匹目の蛇はアストラル体に属する。これらの各蛇を用いた作業はとても長く困難である。クンダリニーは脊髄の中心管ゆっくりと上らねばならず、この作業は遅く、骨が折れる。

46 三十三個の脊椎骨のひとつひとつは聖化の道徳的条件だらけで、これが愛と法の畏怖

である。各蛇の上昇は、まる数年を費やす作業と聖化を意味する。

47 たった一つでも脊椎骨を征服するのは英雄的行為である。三匹目の蛇はアストラル体のチャクラを開き、アストラル体の脊椎の中心管を上昇する。この火の蛇はアストラル体の七つの教会を開き、そのようにしてマスターのアストラル体はすっかり変わった。三匹目の蛇は、眉間から始まって心臓の聖なる第三中枢に通じる秘密の道を進んで、心臓まで到達する。心臓には七つの中枢がある。眉間から心臓に通じるこの秘密の道には、七つの恐るべき部屋がある。このすべてが愛と法の畏怖である。三匹目の蛇がテアテラの教会を開くとき、イニシエイトはアストラル体にそのとき火の二つの小さな翼を与えられる。この翼は、いかなる宇宙意識層にも瞬間的に入りこむ力を我々に授けてくれる。

48 運動の精霊たちは、アストラル体の操作法と宇宙運動の法則とを我々に教えてくれる。

49 三匹目の蛇が心臓に到達したとき、マスター・イエスは神殿の光り輝く大ホールに入り、栄光にみたされてそこを歩いていた。マスターは威厳と力にみたされて輝き、マスター・イエスのアストラル体は死・復活・昇天というイニシアチックな（奥義の）過程を通過した。

50 アストラル体から火によって、美しい幼な子に見える意識霊（アストラル体の意識的価値、セフィロトの価値）という霊的エキスが抽出される。三日間この美しい幼な子は聖墓の中にとどまる。三日後、幼な子は復活し、インティモつまり内なる本質的存在と融合する。この秘教的復活の後、イエスは自然の原子地獄に降りた。

51 奈落の中で我々は過去生のいっさいの悪を要約せねばならない。マスター・イエスは奈落の中で四十日間耐えた。昇天前に下腹部にある奈落の扉が開く。昇天前に我々は火で調べられ、内なる黄道帯を教えてもらえる。我々の進化は獅子座で始まったし、獅子座で終わる。

52 この四十日間、閉ざされた神殿の中でマスターたちは、我々が奈落から自由になるのを助けるため神聖言語で歌う。言葉の力はおそろしく神聖である。

53 奈落で我々は闇に最後の別れを告げる。この四十日間、イニシエイトは性行為を慎むが、四十日後に性魔術の儀式にもどる。エデンの園を去って以来、全人類は奈落に沈んでしまい、奈落から今にも出ようとするときになって初めてそこに自分たちが住んでいることに気づく。こんなことを言うのは悲しいが、事実である。

54 四十日が経過した後、マスターの昇天がやって来て、聖なる父のもとに昇り、聖霊を受けた。神殿では四位（四人）の天使がトランペットを吹いて、イニシエイトの昇天を告げる。長老の威厳のある頭をした聖霊の白ハットが我々を待っている。それから我々は栄光と幸福にみたされて神殿に入る。聖霊は我々を力と知恵と威厳でみたま。イエスは神殿に

入って、大密儀の第三イニシエーションを受けた。祭壇は色とりどりの花で飾られていた。マスターたちは白い亜麻布のチュニックを着て、頭は足まで垂れる真っ白いマントで覆って居合わせた。宇宙的な音楽が神殿の聖域内に厳かに鳴り響いていた。イニシエーション・セレモニーは荘厳であった。そのようにしてイエスは大密儀の偉大な第三イニシエーションを要約しおえた。太古、悠久の昔に消え去った世界で、イエス・クリストは大密儀の九大イニシエーションをすべて通過したが、すべてを要約せねばならなかった。菩薩は過去生で墮落してしまったので、失ったものを取り戻さねばならなかったのである。これらの偉大なイニシエーションは内的世界で受ける。聞きなさい、男性の諸君。いかに多くのことが愛で達成するか。ごらんなさい、女性の諸君。愛という言語に絶するものを。

55 イエスの偉大な第三の神秘的誕生は神殿巫女のおかげで達成した。七つの言葉は第三イニシエーションで受ける。性魔術は大アルカナ、愛の神秘である。

56 反動的な人たちに説得されたり、臆病者に妨害されたりしてはいけない。理論を解釈しても何も得るところはなかろう。精神主義スクールは小心な理論家でいっぱいである。彼らに説得されてはいけない。彼らを避けなさい、危険である。

57 性魔術を実践しなさい、そうすれば神々になるであろう。これは水瓶座時代の教義である。これはノーシス主義である。これは第五の真理である。これはイエスが七十人の弟子にひそかに教えた教義である。

58 いっさいの秘密の中の秘密は「セムハムフォラシュ」 Shema Hamphorash の石にある。それはイエソッドの立方石、賢者の石である。それは性である。

59 それは性魔術である。愛。愛に祝福あれ。

60 聖書〔『創世記』28:10-22〕によればヤコブは眠りから目覚めたとき、石を聖別し、油を注いで祝福したという。実際、そのときからヤコブは性魔術を実践しだした。後にヤコブは自分の内なるマスター、真実の本質的存在を具現した。ヤコブは天使イスラエルである。

61 イエスは「セムハムフォラシュ」の石で力にみたされた。

## 四匹目の蛇

62 マスターが四匹目の蛇を目覚めさせたとき、扉を三回たたいて、言語に絶する音楽が流れ、快い花があちこちにある、光り輝くホールに入った。二つのグループに別れた四人のマスターがイエスを迎えた。それらのマスターは威風堂々と輝いていて、ひとりひとりが右手に宇宙的正義の剣を持っていた。彼らは剣のつかを心臓にあて、抜き身の剣は恐るべきパワーにみたされてそびえ立っていた。マスター・イエスはマスターの二つのグルー

プの間に身を置き、その一方で言語に絶する音楽がそこに流れていた。美しい神殿巫女と熱心に性魔術を実践することによって、イエスのメンタル体の蛇は目覚めた。女性なしでは何も達成されず、女性は男性なしでは何も達成しない。性魔術ですべてが達成し、愛の歓びのようなものは何もない。それからマスターが教室に入ると、弟子はみな長椅子に座っていたが、そこで宇宙マインドの知恵を学んでいた。イエスはもう一人の生徒としてそのサロンにつつましく加わった。

63 メンタル体は、意気揚々と天のエルサレム（高次世界）に入るため乗るべきロバであり、シュロの葉（拍手）と称賛と祝祭でそこに歓迎される。メンタル体は濃密な有形の体である。肉体、エーテル体、アストラル体、メンタル体という罪の四つの体は物質的である。マインドは我々の内部に宿る最も扱いにくい動物であり、いけにえの祭壇でそのマインドをはりつけにせねばならない。マインドは欲望と悪の巣窟である。

64 湖に石を投げると、中心から周囲に向けて波が生じるのが見られるが、それらの波が石の衝撃による水の反応である。マインドとはそのようなものであり、外界からの衝撃にたえず反応して存続する。侮辱されたら殴りたいと思う。誘惑されたら肉欲的情欲にみたされて反応する。ほめられたら笑顔をふりまき、ののしられたら悪をもって報いる。マインドはロバのようで、たたいたら、もっと早く歩き、たたかなかつたら、もっと遅く歩く。あれほどマインドについて話をするクリシュナムルティは、マインドをクリスト化するにいたらなかつた。四匹目の蛇を上げなかつたので、クリシュナムルティのメンタル体の脊椎の三十三室は闇にみたされており、性魔術が彼には欠けている。欲望、利己主義、罪、邪悪さはみな人間のマインドに宿り、ただ火のみがそれらのゴミを燃やす。

65 理性は「インティモ」に対する大逆罪である。

66 何度も何度もインティモ、本質的存在は命令しても、マインドはその推理で反逆する。インティモは予感や思考という形で話す、マインドは推理と比較で反抗する。

67 推理は意見、正反対の概念の闘い、概念の選択過程などにもとづく。推理の葛藤で分裂したマインドは、本質的存在、インティモにとって無用の道具である。

68 心の声はインティモの声である。インティモの声は直観である。推理なしの行動は正しい行動である。直観による行動は正しく、的確で、完全である。水瓶座の人類は直観的であろう。知的教養文化は「我」のまったく動物的な機能である。インテリはプライド、傲慢、性的情欲にみちている。インテレクトは理性にもとづき、理性はルシファー的、悪魔的である。理性によって神を知ることができると思っている人たちがいる。神のみが神自身を知っていると我々は言おう。

69 論理的思考や推理で時間を浪費するより内的瞑想を実践するほうがいい。内的瞑想によって神、インティモ、本質的存在、至高者と話ができる。そのように内なるマスターか

ら学ぶことができる。そのようにマスターのおひざもとで神智を学ぶことができる。

70 外的感覚が情報源なので、インテレクトは外的知覚を栄養とする。外的感覚はまったく不完全で欠陥があるため、その情報源は役立たない。欠陥のある顕微鏡で細菌は研究できないし、欠陥のある望遠鏡で星は研究できない。我々の持っている十二感覚をみな目覚めさせねばならない。

71 相反する概念でマインドを分裂させる、正反対の物事の闘いを起こさず、静かに、完全な形で思考は流れるべきである。分裂したマインドはインティモの道具として役立つことはできない。

72 推理を終わらせて直観を目覚めさせねばならず、そのようにしてはじめて神の真の知恵を学べるし、そのようにしてはじめてマインドはインティモの手中にとどまる。マインドの本当の肯定的機能は芸術、美、愛、音楽である。愛、神聖建築、絵画、歌、彫刻、人間の役に立つ技術 — という神秘的芸術。だが、それらの神秘的芸術には利己主義も悪意も憎しみ等もない。インテレクトはマインドの否定的機能で、悪魔のようである。

73 四匹目の蛇は物質マインドをクリスト・マインドに変換するが、この蛇はメンタル体の脊髄を上昇する。イエスはメンタル界の三十三室のひとつひとつに入った。四匹目の蛇が脊椎骨から脊椎骨へと上昇していくにつれて、物質マインドをクリスト・マインドに変換した。火なくしてマインドをクリスト化するのは不可能であり、性魔術と愛によってはじめて火は目覚める。

74 人間のマインドはメンタル体の敷居の門番に支配されている。この悪魔的創造物はメンタルな「我」である。この門番の試練でメンタル体の外にそれを追い出し、撃退せねばならない。それはマインドのサタンである。そしてそれは知的で傲慢で、懸命に推理し、姦淫を犯す。人間のマインドが凶悪なわけを今や理解すべきである。最も危険な悪魔たちは偽善者のマインドを持ち、聖者のふりをする。

75 イエスは試練にことごとく勝利し、マインドのサタンを征服した。

76 イエスは聖霊の火で脊柱の三十三室を照らし、そのひとつひとつで恐るべき神智を学んだ。

77 メンタル界には宇宙一危険な黒魔術師たちがいて、崇高な外見をし、口では言えないような立派なことを話し、続いてとても巧妙に射精を勧める。そのようにして偉大なインシエイトたちを墮落させるのである。メンタル界には人類の悪業がある。マインドを高等な部分と下等な部分に分けるべきではない。メンタル体は肉体に似た有機体である。メンタル体をインティモにゆだねるなら我々は神々に変わり、サタンにゆだねるなら悪魔に変わる。

78 マインドを意志のむちで支配せねばならない。天のエルサレムに入るためそのロバに  
乗らねばならない。そのようにしてはじめて、最も純粹な原子でできた解脱体を受けるに  
ふさわしくなる。解脱体はクリスティックな外見をしていて、完璧さの気品があり、この  
体が肉体に取って代わる。解脱体は肉でできているが、アダムから来る肉ではない。それ  
は天人の体で、病気にも死にもさらされない。

79 イエスの四匹目の蛇が心臓の第四中枢に到達したとき、神殿で祝祭があった。白い  
チュニックとフードを身につけたマスターは全員、貴賓席をしめ、イエスにブッダの称号  
を授けた。神殿に入る前、イエスはとうとい至聖所において、チュニックを着て、白いフー  
ドをしていた。

80 そのように愛と性魔術のおかげで、イエスは罪の四つの体から自由になれた。性の魔  
力のおかげで四つの真理（四諦）の竜、ブッダに変わった。四匹目の蛇は宇宙マインドの  
世界でイエスの七つの教会を完全に開いた。この出来事の宇宙的祝祭は壮大であった。ピ  
ラミッドには、とうといランプがひとつ燃えていた。勝利の旗をかかげて都の通りを進む  
大行進が行われた。エジプトの群衆は神秘的熱狂に酔いしれ、マスターにかっさいを送っ  
ていた。都市警備員たちはパレードのために名誉ある通りをつくり、興奮した群衆の移動  
と停止のすべてに秩序を保つため大奮闘せねばならなかった。

81 現代では、弟子がブッダの位を受けるとき、世界の祝福された母神は「ここには心か  
ら愛するわが子がいます。ここには新しいブッダがいます。」と言ってマインドの神殿で  
弟子を紹介する。女神はそれからわが子にシバの王冠をいただきせ、ブッダのマントをか  
ける。サナート・クマラはそれから「あなたは罪の四つの体から解放されて、神界に入っ  
た。あなたはブッダだ。罪の四つの体から解放される時人間はブッダになる。あなたは  
ブッダだ。」と叫び、一番上に十字架のついた皇帝の球を渡す。

82 そのときの高次世界での祝祭は厳かである。エジプトではこれらのイニシエーション  
・セレモニーは生身の肉体をまともなまま行われていて、まだイニシエイト団は閉鎖され  
ていなかった。新しいブッダ、イエスの祝祭は狂厳であった。いにしへのファラオたちの  
聖地は栄光にふるえた。おごそかな行進はものすごかった。

83 イエスは大きな十字架を肩にかついで、パレードの先頭に立った。実際、十字架は大  
密儀に関連する。

84 主の受難の全ドラマは密儀神殿の中、クリストの前で上演されていた。イエスは神殿  
でそのドラマを上演した。

85 後に、預言者たちに愛された都で、イエスはそのドラマを痛々しく生きた。

86 イエスの最初のマスターはエルチャナム Elchanam、二人目はラビ、ヨシュア・ベン

・ペラチア Jehosuah Ben Perachiah であった。彼らはパレスチナにおけるイエスの教師であった。今やブッダは意気揚々とエジプトで十字架をかついでいた。自分の昔の師をしのいで、ブッダになってしまった。

87 インティモと融合する霊的エキスが、メンタル体から抽出される。これは神殿で実現する。そのようにイエスは意気揚々と大密儀の第四イニシエーションを終えた。性の火はマインドの神殿ですさまじく燃えあがる。

## 五匹目の蛇

88 マスター・イエスは砂漠に行った。季節は冬、エジプトは寒かった。そこには寂しく荒廃した古ぼけた密儀神殿があった。マスターはホールに入って、<sup>グレート・ハイロファント</sup>大秘儀司祭たちの前にひざまずき、五匹目の烈火の蛇の恐るべき神秘への参入を求めた。

89 エジプトの大賢人たちは承諾すると、マスターはホールを出て、人けのない神殿の小さな至聖所に入った。季節は冬、マスターたちは白色と空色の宗教的なマントを着こんで寒さを防いでいた。そのようにしてマスターは五匹目の蛇の神秘に参入した。その蛇は意志霊の脊髄の中心管を上昇する。前述したように、インティモは意志霊と意識霊という二つの霊を持っている。六匹目の蛇は意識霊に属し、七匹目の蛇はインティモ自身に属する。これらが七匹の蛇である。三匹ずつの二つのグループ、および我々を神、法、聖なる父と結びつける七番目の火の舌の崇高な戴冠。それゆえ双子霊を持つインティモは、言語に絶する純粋な魂なのである。四つの物質的体は、三位一体の永遠なる魂の神殿である。「あなたがたの体は生ける神の神殿であり、至高なる神があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」〔『コリント人への第一の手紙』3:16 他〕とタルススのパウロは言った。至高なる神とは我々の内に宿るインティモのことである。「いつわりの夜明けが地上に現れる前、ハリケーンと嵐からから生き残った人たちがインティモをほめたたえたところ、夜明けの前ぶれが彼らに現れた。」と『知恵の契約』〔要検討 the testament of wisdom〕には書いてある。

90 人間のパーソナリティーは馬車、マインドは馬車を引く動物、インティモは御者である。手綱は意識、鞭は意志である。手綱の操り方を知らない御者に災いあれ。鞭の操り方を知らない御者に災いあれ。なぜなら手綱と鞭を使わずに、それらを手の中に握ったままになるからである。手に負えない獣は御者を奈落に引きずりこみ、そのときインティモは馬車を失うであろう。今日、インティモから離れた悪党が大勢いるが、彼らは奈落でひどく絶望的な進化をたどる大衆である。それらの人たちは皆、額に角をはやしている。彼らは悪魔である。彼らの多くが、自分は預言者やアバターラ（化身）だと公言し、精神主義スクールを設立し、きらめく知力が授けられている。その中には行儀のよい、優れた教養を持つ者もいる。貴族の上流社会層の中には無数のエリート、教養人、インテリがいて、それどころか神秘的習慣を持つ者さえいる。彼らはすでにまったくインティモから離れ、それらの霊は額に角をはやしており、闇の悪魔である。この人たちは罪の四つの体（肉体、

エーテル体、アストラル体、メンタル体) だけを持っている。三位一体の不滅の魂はあいにく彼らのうちにもはや住まず、物質界に生きていても、心の中では「奈落」に住む。

91 マインドを意志の鞭で打たねばならない。鞭の使い方を覚えねばならない。人間的意志をクリスト意志に変換して、意志霊をクリスト化せねばならない。それらが五匹目の蛇の神秘である。

92 クリスト意志だけが、天で行うように地でも聖なる父の意志を行うすべを知っていて、ベートーベンの九つの交響曲の威厳をすべて持っている。クリスト意志は言語に絶する音楽であり、言葉の威厳を反映する。

93 人間は自分の意志を獣にゆだね、そのため失敗する。聖なるマスターは「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはではなく、あなたのみこころのように、なさってください」〔『マタイ』26：39〕と言った。巫女のおかげで聖なるマスターは五匹目の蛇を杖の上上げることができた。五匹目の蛇が目覚めるときイニシエイトは神殿に入り、そのとき神殿はペロニカの聖顔布で飾られている。いばらの冠をかぶった聖顔はクリスト意志の生々しいシンボルであり、哀れにも苦悩する人類のためにまったく犠牲になることをあらわす。

\*ペロニカの聖顔布…十字架を背負ってイエスがゴルゴダの丘へ引かれる途中、ペロニカがイエスの顔の血と汗をぬぐうと、その顔の像が印されたという。

94 意志の世界ではイニシエイトはみな、自分の十字架を背負う。

95 クリスト意志だけが高等な命令に従うすべを知っていて、他人の自由意志を尊重し、たとえ遊び半分であっても他人に対して強制しない。なぜなら他人に無理やり何かをさせるのは黒魔術だからである。意志の世界では、その霊は人類を救うため十字架にかかる。

96 五匹目の蛇は意志霊の脊髄をとともゆっくりと、やっとのことで上昇する。五匹目の蛇が心臓の聖なる第五中枢に達したとき、ブッダ、ナザレのイエスは聖域に入った。エジプトの一人の偉大なイニシエイトは「人々はマスターと大いに闘う。」と言った。実際、わが兄弟たち、あらゆる宗教宗派、スクールがマスターと大いに闘う。

97 それからマスター・イエスは神殿の大ホールに入った。そこには何人もの高齢の〔別訳：古参の〕マスターがおり、妻と性魔術を實踐していて、五匹目の蛇を上昇させようと勇ましく奮闘していた。ひとりの大秘儀司祭は、尊敬すべき長老たち〔古参者たち〕を見つめて微笑んでいた。性魔術は大アルカナの言語に絶する秘密である。

98 エジプトでは、大アルカナをあえて漏らしていた者は死刑を宣告された。首は切られ、心臓はもぎ取られ、その灰は四方八方にまかれた。

99 中世、大神秘を漏らしていた者は、毒をしみこませたネッソスのシャツや短剣や毒薬や処刑台で殺された。水瓶座の新時代を始めるため我々はアルカナをおおびらに手渡す。大アルカナとは性魔術である。

100 五匹目の蛇を完全に上昇させたとき、イエスは立ち上がった。墮落していたからである。

101 ブッダ・イエスのイニシエーションの祝祭は壮大であった。聖なる踊り子たちは神殿で陽気に踊っていた。音楽と神聖舞踊には巨大な神秘的パワーの鍵が隠されている。

102 妻を熱愛し、愛し、一緒に性魔術を実践することによって、イエスの霊はエジプトで立ち上がった。六匹目の蛇と七匹目の蛇は内なるマスターに属し、彼は決して墮落しないので、イエスはそれらの蛇を上昇させなくてもよかった。墮落するのは人間的霊、すなわちマスターの菩薩である。この暗黒時代、墮落した菩薩がたいへん大勢いる。その中の一人が身の毛もよだつ悪魔に変わったアンドラメレックであり、今日中国に生まれ変わっている。それらの菩薩は普通の一般人であり、その多くは現在悪徳と悪業にまみれている。悪霊ヤーベは墮天使である。菩薩はカルマを支払いながらたえず生まれ変わり、苦楽を味わう。彼らは皆のような人間である。地の泥から立ち上がるまで、当然、彼らの中に内なるマスターは入れない。ダニエル、ソロモンその他きわめて多くの菩薩が墮落している。

103 このカリユガの暗黒時代は、悪魔よりひどい墮落した菩薩にとって致命的であった。娼婦を気の毒に思った一位の大天使は助けようとしたが、弱い菩薩と一緒に墮落して剣を失い、地の泥の中に沈んだ。当然、その菩薩はインティモから離れ、数々の痛ましい転生の後ようやく再起し、ついに神ともう一度合一できた。

## エジプトでのイエスの最後

104 落ちた五匹の蛇を上げた後、ブッダ・イエスは栄光に輝いていた。もはや戴冠以外何も必要なかった。イエスの冠は世界より古い歴史がある。まことにイエスは言った、「アブラハムが生まれる前から、『わたしはいる』（I Am) のです」〔『ヨハネ』8：58〕。

105 『黙示録』〔2：10〕に「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」と書いてある。命の冠とは本質的存在の中の本質的存在である。正真正銘の本当の「私はある」（I Am) である。本質的存在が我々に生まれるよう「我」が死ぬ必要があり、その後、光り輝く神聖な「私はある」である命の冠を本質的存在は受ける。昼が夜と、冬が夏と、神が悪魔と異なるように、「私はある」は「我」と異なる。低我と高我について話す者が捜しているものは、「我」の過程をうまくかわす言い逃れである。我々ノスティックは言い逃れを捜さない。なぜなら「我」とは身の毛もよだつ敷居のラルバだと知っており、「ある」ためにそのラルバを殺したいと願うからである。そのようにしてはじめて光り輝く「私はある」を我々に具現して、命の冠を受ける

ことができる。

106 エジプトではマスターは「ファラオン」FARAON を唱えて幽体離脱のしかたを学び、そのように意のままに幽体離脱していた。アステカ人たちが雨の神チャックモールに扮しているのとまったく同じように、マスターは寝床に横になっていた。頭を枕にのせ、マントラ「ファラオン」を唱えつつ、うとうとしていた。このマントラを唱える際には三つの音節に分ける。まず自然全体に響く「ファ」。二番目はエジプトの「ラー」。三番目はヒンドスタン人の有名なマントラ「オーム」を思い出させる「オン」。

107 マスターは心の中でこのマントラを唱えて、うとうとし、そのように自由自在に幽体離脱していた。マントラ「ファラオン」の各文字の音をのばすのは大切である。

108 肉体が眠りにつくと霊は覚醒意識で内的界層に向かい、そのように思いのままにアストラトリップする。エジプトのファラオは、火の翼を象徴する一对の小さな翼からなる秘教的な聖勲章をひとつイエスに授与した。この勲章はイエスの心臓の上に載せられた。

109 そのころエジプトには道を踏みはずしつつあるイニシエイトがひとりいて、イエスを邪道に導こうとしたが、失敗した。イエスはその男性をいましめたが、無駄に終わり、大変ゆゆしき状態にすでであった。

110 これが水瓶座時代を始めるため我々ノスティックの広めている神秘の知恵であり、それゆえ我々はこの新時代の創始者である。「しかし私たちは、知恵を語ります。私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。神はこれを、御霊によって私たち（ノスティック）に啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです」（『コリント人への手紙 第一』2：6, 7, 8, 10）。

111 今世紀の〔別訳：この世の〕宗教、スクールはみなイエスの人間的な人格を崇拜し、食べ物にするが、「私はある」の秘密の教義を拒絶する。誰も自分のきらきらと光り輝く「私はある」を心の内に捜そうとしない。それはイエスが我々に教えた教義だが、人々はこれらの教えを拒絶する。なぜなら「獣のような人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわかまえるものだからです」（『コリント人への手紙 第一』2：14）。「しかし私たちは、完全な人間の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません」（『コリント人への手紙 第一』2：6）。

112 これらのことが起こった後、マスター・イエスはラクダに乗って、ピラミッドから立

ち去った。それからヒンドスタンの聖地にいた。東洋のチベットにいて、密儀スクールに参入した。

113 マスターはインドとチベットで大預言をいくつか行った。

114 雪に覆われたチベットの峰で、マスターはマスターたちの大集会のある密儀大神殿に入った。

115 イエスは大密儀の真の秘儀司祭である。この訪問後、イエスは聖地にもどった。そのころにはすでにヘロデは亡くなっていた。

## 第 1 3 章 聖地にて

1 偉大なブツダ、ナザレのイエスは、あらゆる時代の中で最も壮大な使命を果たすため帰郷した。だが、預言者はだれでも故郷では尊敬されない〔『マタイ』13:57他〕のは、確かに間違いないことであり、まったくその通りである。

2 イスラエル民族は、マスターを取り巻いて世界を救うため選ばれた。その民族に預言者や聖人が輩出したわけはそのように解される。シオンの無敵の壁にシオンの王、ダビデの子、ソロモンの栄光が輝いた。エルサレムの壁にエホバの御顔が輝いた。エルサレムの石畳道にイザヤ、サムエル、エレミヤ、エゼキエルその他多くの預言者が光にみたされて輝いた。その民族は主といっしょに歩むべく選ばれた民であった。

3 不幸にも、最終試練の土壇場になってイスラエル民族はバルバを自由の身にして、約束されたメシア、クリストをはりつけた。クリストとヤーベのうちのどちらかを選ばなければならないときに、クリストをはりつけて、黒ロジの長ヤーベを崇拜した。ヤーベは墮天使、悪霊、おそろしく邪悪な悪魔である。

4 そのようにしてユダの民は約束されたクリストをはりつけにした。そのようにイスラエルの民は失敗した。そのようにしてクリスティックな知恵を地上のすみずみにまで広めるため選ばれた民は、奈落に沈んでしまい、今やヤーベの教えを奉じ、完全に失敗した。自分のマスターを裏切って、はりつけにした民族である。もし主をはりつけにしなければ、西洋の運命は異なっており、今ごろはクリスティックな秘教を説いてまわる崇高な啓発されたラビ（師）たちがいたであろう。

5 クリスティックな秘教、ユダヤの秘密のカバラ、聖錬金術の結びついたものが世界をすっかり照らし、変えていたであろう。

6 レビ族の密儀がクリストの光で輝いたであろう。ノーシスが至る所でまばゆく輝いていたであろう。

7 世界は死んだようなローマ・カトリック主義のキリスト教にその時はまっていなかったであろう。人類は暗黒時代の恐ろしい闇から救われていたであろう。不幸なことに選民は失敗し、全人類は奈落に沈んだ。

8 地はひどく揺れ動き、至聖所の幕は真っ二つに裂けた〔『マタイ』27:51他〕。そのとき契約の箱は、救済の唯一の希望として誰の目にも見えたままであった。その箱は大アルカナを秘めた性器を表す。性魔術。罪のあがないと救いの至高の鍵。

### イエスの洗礼

9 ブッダ・イエスは威厳にみちていて、唯一欠けていたのは戴冠だけであった。イエスはヨルダン川に向かったが、そこにはヨハネが住んでいて、彼の神殿があり、そこで司式していた。ヨハネは白ロッジの偉大なマスターである。神殿の扉には「下品な踊りは禁じる。」という銘が刻まれていた。ヨハネは中背で白ひげを生やした尊敬すべき長老であった。司式する際は、絢爛たる祭服を神殿内で着ていた。

10 神殿の外ではラクダの皮を身にまとっていただけで、そのように半裸の、この尊敬すべき長老は威風堂々としていて、皆に尊敬されていた。その体は筋肉隆々としていて、広い額は光り輝く本質的存在の威厳を反映していた。ヨハネはメシアの到来まで生きないといけなかった。ブッダ・イエスの偉大な先駆者とならねばならず、そのように運命の書に書いてあった。イエスが神殿に入ると、ヨハネは衣服をぬぐよう命じた。ヨハネは祭服を着ていた。裸のイエスは性器を白い布でおおっていただけで、それから広間を出て、至聖所に入った。ヨハネは純粋な油を主に塗って聖別し、水を頭に注いだ。その瞬間、三つの星が内的に魂の天国に輝いた。三つめの星は生ける火のような赤色をしていた。そのとき天から知恵の魂が降りてきた。

11 それは至高なる瞬間であった。知恵の魂は松果腺を通してイエスの中に入った。聖なる父はそのときはイエスの体内に入らず、魂の目だけに見える絢爛たる火の馬車に乗って居合わせたただけであった。ブッダ・イエスの戴冠はそのようなものであった。『黙示録』〔2:10〕に「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」と書いてある。イエスは忠実であったので、そのように命の冠を受けた。それは自らを知らない永遠なる氣息、我々の内にある「絶対」の氣息、インティモ自身が放たれる各人のあの純粋な光線、ヒンドスタン人のアートマンの糸、「私はある」。「知っている者には言葉は力を与える。言葉を具現した者以外、誰もそれを発音しなかったし、発音しないであろう」。イエスは洗礼で言葉を具現した。

12 「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった〔別訳：しかし、やみはこれを悟らなかった〕」〔『ヨハネ』1:1, 2, 3, 5〕。

13 東洋人はコスミック・クリストをクリストスと呼ぶ。エジプト人はそれをオシリスと呼んでいた。インド人はビシュヌ、チベット人は観音、美声と呼ぶ。声の軍隊。偉大なる氣息。中心太陽。太陽ロゴス。神の言葉。

14 ノスティックの洗礼の後、栄光にみたされて、太陽のように輝く真っ白い聖光を帯びて、クリストはイエスに輝いた。

15 そのようにしてイエスは、自らの燦々と光り輝く「私はある」を具現した。その瞬間

からブッダ・イエスはイエス・クリストと呼ばれた。

16 「ことばは人〔別訳：肉〕となって、私たちの間に住まわれた。この方は恵みとまことに満ちておられた。すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた〔別訳：まことの光があった。それは世に来て、すべての人を照らすものである〕。」〔『ヨハネ』1：14, 9〕。

17 「彼」には階級による違いはなく、「彼」においてはすべて一体である。「ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。『《私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである。》と私が言ったのは、この方のことです』」〔『ヨハネ』1：15〕。

18 「私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである」〔『ヨハネ』1：16〕。

19 自分の内なるクリストを具現する者もみな、「彼」になるであろう。

20 かつて幾人かが「彼」を具現したし、将来、多くの者が「彼」を具現するであろう。先に七匹の蛇を杖の上に上げないなら、誰も命の冠を受けることはできない。「私は命の冠を受けた。」と言う者は皆うそをついている。命の冠を受ける者は、そうは言わず、ただその行いでわかるにすぎない。命の冠はものすごい秘密である。

21 我々は主の住まいにならねばならず、「モーゼが荒野で旗ざおの上に蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません」〔『ヨハネ』3：14〕。聖なる父のもとに昇るため我々にクリストを具現せねばならない。クリストは一個人ではなく、声の軍隊、神の言葉である。子によって以外、誰も聖なる父に到達しない。クリストにおいて我々は皆「ひとつ」である。主においては人と人との間に違いは存在しない。なぜなら「彼」においては我々は皆「ひとつ」だからである。「彼」においては個性は存在しない。「彼」を具現する者はそのとき「彼」、「彼」、「彼」である。「多様性は調和ある統一である」(Variety is Unity.)。

22 本質的存在が我々に生まれるよう、パーソナリティーと「我」を終わらさねばならない。個性を終わらさねばならない。

23 クリストの人生を調査するため、もし恍惚境にある神秘家が七つの体をすべて捨てるなら、そのとき自分が主の受難のドラマを演じて、奇跡と驚異を行っているのを知るのであろう。自分が死んで、三日目によみがえるのを知り、その神秘家はクリストの体をまとい、そのとき「彼」、「彼」、「彼」になっているであろう。なぜならクリストの世界には個人は存在しないからである。クリストにおいては、たった一つの本質的存在のみが存在し、多くのものとして表現する。「我」と個性を終わらせるとき、意識の価値のみが残

るが、それは永遠なる絶対抽象空間の属性である。「彼」はただ「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしは光です。わたしはいのちです。わたしは善き牧者です。わたしは門です。わたしはパンです。わたしはよみがえりです。」と言えるだけである。本質的存在は、本質的存在の中の本質的存在、「私はある」、我々ひとりひとりの中にある偉大なる氣息のあの息吹、我々の個人的な光線を受け取る。「彼」、「彼」、「彼」。「私はある」はあらゆる人間の内なるキリスト、神聖な「アウゴエイデス」、ロゴスである。「命の冠」を受ける者は、「私は『彼』である、私は『彼』である、私は『彼』である。」と言う権利を持つ。

24 神智学者に言うが、「彼」はモナドではないが、「彼」からモナドが放たれる。「彼」は我々の個人的な光線であり、その光線は完全なる三つ組である。「彼」のみがカルマの法則から我々を解放してくれる。「彼」は各人のロゴスの光線である。法の最後はキリストである。

25 カルマの法則とは冷酷な継母、我々を荒治療するやぶ医者にすぎず、それだけのことである。キリストにおいて我々は自由である。キリストはロゴス、言葉である。キリストは我々を力強い自由な王と司祭にしてくれる。命の冠を受ける者はカルマの法則から解放される。

26 「彼」は声の軍隊、我々の光り輝く知恵の竜である。命の冠、信仰、言葉、正義の冠、キリストである。カルマの法則の最後がキリストなので、法において我々は奴隷であり、キリストにおいて全員自由である。

27 「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう」〔『黙示録』2:10〕。

28 永遠なる「私はある」の属性は、声の軍隊である。

29 あなたがたの偶像崇拜、宗教、スクール、宗派、教団、ロッジをことごとく捨て、あなたがたの本質的存在の奥底に住む、さんさんと光り輝く「私はある」を捜しなさい。それはあなたがたの唯一の救い主である。

30 キリストは声の軍隊、唯一の本質的存在である。すべての存在の本質的存在。永遠なる絶対抽象空間のすべての属性の総計。完全かつ非人格的、普遍的な無限のコスミック・キリスト...。キリストは複合統一<sup>ユニア</sup>体である。光は闇のところ<sup>ユニア</sup>にやって来たが、闇は光を知ることはなかった。

31 キリストは太陽ロゴスである。声の軍隊は、永遠かつ完全なる無条件の複合統一<sup>ユニア</sup>体である。キリストは創造的ロゴスである。最初の瞬間の言葉である。永遠なる絶対抽象空間

の深みから放たれた偉大なる氣息であり、言葉の軍隊である。永遠なる絶対抽象空間とはすべての本質的存在の中の本質的存在の中の本質的存在、「絶対」、無名のもの、廣大無辺の空間である。自らのクリストを具現する者はみなクリスト化し、声の軍隊に加わる。エジプトではクリストはオシリスと呼ばれていて、それを具現している者はオシリス化した者であった。アステカ人の間では「私はある」はケツァルコアトルである。

## 冠の三つの面

32 命の冠には三つの面がある。一つめは「日の老いたる者〔日々の長老〕」、聖なる父。二つめは聖なる父に深く愛された子。そして三つめは聖霊、大賢人。父、子、聖霊、命の統一<sup>ユニテ</sup>体の中にある完全なる三つ組。この三つ組と命の統一<sup>ユニテ</sup>体とを合わせたものが、聖なる4である。永遠なる四人の大工、祭壇の四つの角、海上の四つの方位〔要検討 winds「風」?〕、そのマントリックな言葉が永遠なる神の恐るべき名前ヨッド・ヘー・パウ・ヘーである神秘の聖テトラグラマトン（聖四文字名）。

33 人間ひとりひとりには自分本来の冠があるが、それは我々を「絶対」と結びつける自分の光線である。インティモは「命の冠」に深く愛された子である。我々本来の冠から神智学<sup>セブナリー</sup>の七つ組がすべて生じた。「命の冠」は神智学者の知らない「私はある」である。

## 日の老いたる者

34 「日の老いたる者」は各人の原型であり、聖なる父である。地上の人間の数ほど天には聖なる父がいる。「日の老いたる者」は神秘の中の神秘〔隠れたるものの中の隠れたるもの〕、慈悲の中の慈悲、善の中の善、我々の存在の根源、「大風」である。「日の老いたる者」の髪の毛にはカールが十三あり、ひげには房<sup>ヒゲ</sup>が十三ある。

35 死を克服してはじめて「日の老いたる者」を具現できる。アルカナ13の葬式の試練は奈落よりも恐ろしく怖い。アルカナ13は「日の老いたる者」のアルカナである。

36 「日の老いたる者」を具現する権利を持つには、至高の死が必要である。「日の老いたる者」を具現する者だけが、尊敬すべき長老の髪とひげを内的に生やす権利を持つ。

37 葬式の試練に勝利した後、死の天使の立ち会いのもとでのみ、ようやく「日の老いたる者」を具現できる。「日の老いたる者」を具現する者は、永遠の中のもう一人の老人である。「日の老いたる者」は、絶対抽象空間から最初に流出した、おそろしく神聖なものである。

## 最初の神聖なカップル

38 「日の老いたる者」から神聖なカップルが流出する。クリストとその処女の妻、聖霊

であり、彼女はあらゆる人間の中の言語に絶する女性に似ている。この聖なる母は白いチュニックと青いマントを身につける。祝福された女神、世界の母は貴重なランプを手にとらずさえる。聖者は非の打ちどころのないクリストのようであり、勃起した男根、高くかけた権杖、塔、あらゆるとがった石、栄光のチュニックで象徴される。その聖者は神聖な起源である。

39 聖女は言語に絶する処女である。この聖なる母は、アステカ人の間では一人の神秘的な処女で象徴される。この処女の喉には神秘的な口があり、実際に喉は言葉がはらまれる子宮だというわけである。神々は喉頭を用いて創造する。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」〔『ヨハネ』1：1〕。

40 聖霊は光を生じさせるものである。「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた」〔『創世記』1：3〕。その秘教的な意味は「神がそれを仰せられたので光ができた。」である。

41 アステカの処女には手が四つあるが、その意味はこうである。つまり彼女は父から命を受け、万物に言葉で命を与える。彼女は世界の母である。その奇妙な頭は、からみ合う二匹の不思議な蛇からなるが、それら二匹の蛇は脊髄交感神経の二つの神経索であり、それら二本の管内を通して性エネルギーが脳まで上昇する。それらが『黙示録』〔11：3－12〕の二人の証人、全地の主の御前にある二つの燭台、純金のような油を流す二本のオリーブの木、マーキュリーの杖カドケウスにからみつく二匹の蛇である。

42 女神の腕は二匹の蛇である。エデンの園の誘惑する蛇と、荒野でイスラエルの民をいやした青銅の蛇。

43 アステカの処女のスカートは蛇でできている。胸には死を意味する蛇が一匹いる。生きるために死なねばならず、すべてを得るためにすべてを捨てねばならない。ケツァルコアトル神殿という名の蛇の神殿では聖霊が崇拝されていた。日の出前、チュニックと白黒赤のマントを身につけた神官が、おこった火の中に貝殻の粉末をかけていた。これには白黒赤の海の貝殻を用いていた。白は純粋な魂、黒は魂が物質の中に下降することを意味し、赤は聖霊の火で、その火によって我々は純粋な魂の清らかさにもどる。この香は天まで立ちのぼり、神官は命のために祈り、植物の花は咲いていた。なぜなら聖霊は宇宙の性的な火だからである。儀式は日の出前、ケツァルコアトル神殿で執り行われていた。なぜなら聖霊は光を作り出すものだからである。神官はマントラ「イン・エン」IN EN を唱えていた。

44 預言者ヨナもまたアステカ人とまったく同じように聖霊の儀式を行い、このために同じ祭服と香を用いていた。

45 火中に香を投じる際、やはりヨナもマントラ「イン・エン」を唱えていた。この儀式

はどこのノーシス神殿でも定着させるべきである。貝殻は海水と関係し、水は聖霊の火の宿るところである。したがって海の貝殻は、申しぶんのない聖霊の香だということがわかる。母や聖霊は我々に力と知恵を与えてくれる。

46 処女の象徴はヨニ（女陰）、聖杯、神秘のチュニックである。

47 射精しないとき、神聖なカップルの性力はすべてその源にもどり、霊的センターを開き、おそろしく神聖な火の力を目覚めさせる。モーゼはホレブ山で「母」を具現するにいたり、悟りを開いた。「神聖なカップル」を具現する者もいるが、「日の老いたる者」をなんとか具現する者はほんの一握りである。これらが冠の三つの面つまり生命の統一<sup>ユニティ</sup>体の中の三位一体、父、子、聖霊である。

48 イエスの前に大勢のブッダが命の冠を受け、はりつけにされて死んだ。イエスの後に何人かがそれを受けたし、将来は大勢の者がそれを受けるであろう。知恵ある魂は世界を救うため、物質にはりつけになって生きるのが常である。

49 聖なる4、テトラグラマトンはアステカの処女の四本の牙、ヨッド・ヘー・パウ・ヘー、神聖な「私はある」で象徴される。カバラではケテルが父、コクマーが子、ピナーが聖霊である。これがセフィロトの王冠、命の冠である。この三つ組と統一<sup>ユニティ</sup>体とを合わせたものが聖なる4、聖なる神秘的なテトラグラマトン、ヨッド・ヘー・パウ・ヘーなのである。

## 神殿の七本の二重の柱

50 知恵の神殿の七本の柱は二重であり、それらは燃えさかる火である。それらが七段階の火の力、七匹の蛇である。冠を受けた後、我々は各柱のダブルを上げないといけないが、それらは「私はある」の七匹の光の蛇である。

51 我々は七枝燭台に火を灯して、主の住まいになる必要がある。クリストはベツレヘムの幼な子のように我々のハートに誕生する。それは幼な子神である。我々のハートにもクリストが誕生しないなら、ベツレヘムでクリストが誕生したのは虚しかったであろう。我々ひとりひとりにクリストがはりつけにされ、死んで、よみがえらなかつたら、クリストがはりつけにされ、死んで、死者の間で三日目によみがえったのは虚しかったであろう。「私はある」は、小さな幼な子のように我々に生まれ、そして少しずつ成長していかねばならない。自然は飛躍しないからである。

52 クリストが我々に誕生するのは、ハートのクリスマス（クリスト降誕）である。

53 イエスの前に大勢のイニシエイトがクリストを具現したし、イエスの後に何人かがクリストを具現したが、将来も大勢の者がクリストを具現するであろう。

- 54 知恵ある魂は、人類救済のため世界の飼い葉おけの中に何度も誕生する。
- 55 イエス・クリストは七匹の光の蛇をひとつひとつ根気よく上げねばならなかった。七匹の火の蛇と七匹の光の蛇が存在する。
- 56 光の蛇の一匹一匹の上昇は至難のわざで、骨が折れ、それはまことに聖性と愛と法の畏怖である。
- 57 イエスはまず最初の光の蛇、つまり肉体の光の蛇から上げねばならなかった。各脊椎骨は困難な美德と恐るべき聖性を要する。この蛇のおかげで我々は、口では言えない七つの秘密のひとつに数えられる奈落の王になる。
- 58 一匹目の光の蛇が各脊椎骨に到達するにつけて、我々は神殿の三十三の聖室のひとつひとつに入っていく。この蛇の上昇が終わると、信仰と自然の密儀<sup>ミステリー</sup>の第一イニシエーションがやってくる。七匹の光の蛇はこれらの密儀に属する。これらが永遠なる七つのカルバリオの丘である。
- 59 イニシエイトが二匹目の光の蛇を目覚めさせるとき、そのときは週一回だけ性魔術を実践できるにすぎない。ずっと後、イニシエイトは性的になる。つまり性的な触れ合いがなくても今や愛の歓喜を味わい出すのである。そのときにはもう全能なる神々となっている。これらは犯すことのできない神聖な法則である。金曜日が性魔術の日である。この二匹目の蛇でエーテル体は絶対的にクリスト化し、我々はエデンの園のもどるが、そこでは主エホバが我々を歓迎してくれ、そのようにエデンの園の住人になる。
- 60 クリスト化したエーテル体は黄金体、霊の婚礼衣装であり、この衣装で自然のどの領域にも入ることができ、偉大なる仕事に仕えるためトリップできる。
- 61 霊の婚礼衣装は水のように澄みきっている。これがソマ・プチコンで、純粋なガラスでできているように見え、途切れることのない連続意識を我々に授けてくれる。それは月光に支配され、言語に絶する少女のように見える。
- 62 イエスのアストラル体は三匹目の蛇のために変貌し、変容の山で、「私はある」の威厳をおびて太陽のように輝いた。

\*変容…イニシエーションの三つの山の象徴ペテロ、ヨハネ、ヤコブ。イエスは、この三人だけを連れて高い山に登ったところ、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、その顔は太陽のように輝き、その衣は光のように白くなった。（『マタイ』17：1-9、  
『マルコ』9：2-10、『ルカ』9：28-36）

- 63 四匹目の光の蛇は絶対的にマインドをクリスト化し、そのとき我々は主のマインドを

持ち、主がこのマインドを通して自己表現するとき、我々は言語に絶する神々となり、クリストのように輝く。

64 五匹目の蛇は、言語に絶するクリストに意志霊を変え、そのとき我々は主の意志を持つ。

65 六匹目の光の蛇は意識をクリスト化し、そのとき我々は主の意識を持つ。七匹目の光の蛇はインティモを絶対的にクリスト化し、そのとき我々は「父よ。わが霊〔魂〕を御手にゆだねます。」と言う。それが七番目の言葉であり、そのとき我々は言語に絶する、力にみちた神聖なクリストとなる。以上がおそろしく神聖な七つのゴルゴダの丘である。女性を愛し、恋することによって、これらの頂に到達する。

\* 十字架上のイエスが発した七つの言葉。

- 1) 「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」 (『ルカ』23:34)。
- 2) 「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」 (『ルカ』23:43)。
- 3) 「女の方。そこに、あなたの息子がいます」「そこに、あなたの母がいます」 (『ヨハネ』19:26,27)。
- 4) 「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」 (『マルコ』15:34)。
- 5) 「わたしは渇く」 (『ヨハネ』19:28)。
- 6) 「完了した」 (『ヨハネ』19:30)。
- 7) 「父よ。わが霊を御手にゆだねます」 (『ルカ』23:46)。

66 男女同権である。

67 これら七匹の光の蛇は『黙示録』の七つの封印であり、ただ小羊、「私はある」のみが解くことができる。愛は宇宙最大の幸せであり、我々をクリストに変えてくれる。ノスティックの家庭は純潔、愛、美にみちている。

68 アステカの神殿の中庭で、男女はまる数カ月とどまり、射精にいたらずに愛しい、性的に結びついてきた。そのようにして男女共、自己実現していた。これはクリストが七十人の弟子に密かに教えた教義であり、「私はある (I am)」の聖なる教義である。「わたしはいのちのパンです。わたしは生けるパンです」。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります」。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしはその人をよみがえらせます」 (『ヨハネ』6:48,51,54,56)。

69 神々に変わるため、「私はある」の肉を食べ、血を飲まねばならない。

70 心霊術、神智学、バラ十字等のあの超洞察者たちを全員、我々は知っている。ご存じのように、あの人々はみな大変ごうまんで、人生の物事はすべて息を吹いて、びんを作る〔英語版：「シャボン玉を吹く」〕ようなものだと信じている。本書が下品で冒瀆的だと見なされても驚くにはあたらない。というのは今や、それらのずば抜けた洞察力を持つ人々は、たぶん命の冠を受けたように見えるからである。今や乱用者たちは至る所で数を増し、大勢のクリストが出現し、超戴冠者たちの収穫が増えだすであろう。「にせクリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民を惑わそうとして、しるしや不思議なことをして見せます」（『マルコ』13：22）。だから大いに気をつけていなさい。

71 「わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそそれだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう」（『マルコ』13：6）。だから警戒して、寝ずの番をいなさい。

72 ノーシス運動内も含めて、にせクリストたちが出現するであろう。

73 命の冠を受けたという妄想を示さない心霊術の霊媒はいないであろう。

74 我々、「聖なる島」の住人は、反クリストたちにだまされないよう、あなた方にこのように警告する。「そのとき、『そら、クリストがここにいる。』とか、『そこにいる。』とか言う者があっても、信じてはいけません」（『マタイ』24：23）。

75 本書をもって我々は水瓶座時代を始めるが、人類には本書を理解する準備がまだできていないことはわかっている。それゆえにあなた方が永罰の奈落に落ちないようにその危険を警告する。本書は聖書よりもっとひどく悪用されるであろう。あなた方の燦々と光り輝く「私はある」を捜しなさい。性魔術を実践し、自らの魂を完全に聖化しなさい。

76 「この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません」（『マルコ』13：31、『ルカ』21：33）。今のところ二人の証人は姦淫のため死んでおり、彼らをよみがえらせるべきである。二人の証人の死体はこのソドムの広場にさらされている。性魔術によってあなた方の三人の証人がよみがえるとき、闇の住人は震え上がるであろう。「彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす」（『黙示録』11：5）。

77 今は注意しなさい。二人の証人が死んでいるので、あなた方はクリスティックな力をまだ持っていないからである。そのため闇の住人は簡単に我々をだますことができる。クリストたちに注意しなさい。神智学者、バラ十字学徒、水瓶座主義者、心霊術家等に注意しなさい。それらの人々はクリストに従うと言うが、実は「聖なる」偽者に従い、クリストがどのようなものかということすら知らず、その闇の住人たちは誰ひとりとして「私はある（I am）」とは何かを知らない。

78 聖なるマスターは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです

。」〔『ヨハネ』14：6〕と言ったが、それらの人々はそれを理解せず、燦々と光り輝く「私はある」を自分自身の内に捜すかわりに、崇高な偽者の後ろを歩くほうを好み、「クリストに従う。」と言うのである！ ああ、なんと皮肉で、なんと下劣なのか。

79 彼らは光り輝く「私はある」を捨てた後、多くの道があり、どの道を進んでもたどり着けるといふこじつけを持ち出す。なんという皮肉。マスターはそれほど多くの道については我々に話さず、ただ「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」と言っただけである。

## 第 1 4 章 カナの婚礼

1 イエスの行った最初の奇跡は、水をワインに変えたことである。これが我々の弟子が行わねばならない最初の奇跡であり、そこからイニシエーションに入る。この奇跡をイエスは婚礼で行った。

2 やはり間違いなく確かなことであるが、結婚において、水をワインに変換すべき性的な触れあいによって、水（精液）を錬金術師の光のワインに変換せねばならない。性魔術はその方法である。苦悩する全人類のため公然とイニシエーションの道を開示する際、イエス・クリストは性エネルギー変換、性魔術を我々に教えることから始めた！ 性エネルギー変換から始まるイニシエーションの全ドラマを生身の体で演じた。性魔術によって我々は神々になる。夫婦が神々の状態に上昇するとき、そのときはじめて性的な触れあいがなくても今や愛の喜びを味わうことができ、それはもう神々に属することである。

3 自然のアーカーシャ年代記を研究するとき木造の大きな御殿が見られる。カナの婚礼は豪華であった。花嫁はあの古びた御殿の貴族の令嬢であった。小麦色の顔、鼻すじの高く通ったローマ鼻、出っぱった上唇、中背のからだで、白いウェディング・ドレスを着て、頭には花冠をつけていた。披露宴は厳かで、イエスはそれに出席した。突然、ワインがなくなってしまった。イエスはサロンを横切り、豪華な御殿の片隅に向かったが、そこには澄んだ水を満々とたたえた四角い樽がひとつあり、水面にはオリーブの葉がいくつか浮いていた。イエス・クリストは右手をあの命の清水の上にのぼし、それから水をワインに変えた。みな喜び、披露宴が続けられた。

4 この奇跡によってイエスは性魔術をおおっぴらに教えた。命の水（精液）を錬金術師の光のワインに変えねばならず、そのように聖なる火が目覚め、そのように背骨の火が発達する。

5 忘れてはならないが、動植物や人間のあらゆる種子の中にコスミック・クリストが宿る。

### 天の御国で一番偉い人

6 「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか」。そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真中に立たせて、言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。

7 だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です」  
（『マタイ』18：1-4）。

8 イエスの信奉者だと言う者たちは、その例にならおうとせず、今や誰も幼な子になろうとしない。

9 教皇、枢機卿、大司教、司教、司祭はこれ見よがしに誇らしげにデラックス・カーで旅行し、断固として幼な子になりたがらない。主知主義にどっぷりつかり、高い身分の肩書をちりばめ、巨富を持っている。野蛮な現代のいろいろな宗派の聖職者たちは、聖職者の肩書に喜び、無知な羊たちの歓待や贈物、敬意に満足する。彼らもまた幼な子になりたがらない。

10 このごろは人は皆、王侯貴族になって、ユダヤ教会の一等席にすわりたがる。全員が偉大なアバター（化身）や偉大なマスターになりたがり、誰も幼な子になりたがらない。全員があまりにも知りすぎ、それらの教を説いても、適用しない。ひとりも幼な子のマインドを持ちたがらず、気に入らない。さまざまなスクール、教団、ロッジ等の兄弟姉妹は本の虫である。たくさんを知っていると信じていて、幼な子になるのは馬鹿らしいとすら思えるのである。しかし単なる傲慢ゆえに、本当に自分は幼な子のようにと公言し、それが現人類である。有名人の生まれ変わりだと全員が言い、ひとりも坊やになりたがらず、皆の中で一番つまらない者になりたがらない。

11 命の冠を受けるためには幼な子のマインドを持たねばならない。

12 知的傲慢から解放されて、恐怖と主知主義を終わらさねばならない。心靈主義の奇行から解放されて、あらゆる種類の主知主義と理論を悟性から一掃せねばならない。

13 性魔術を実践し、欲望ばかりか欲望の認識そのものすら殺さねばならない。

14 幼な子のマインドを持つため推理を終わらさねばならない。幼な子は推理せず、洞察し、直観で知る。幼な子はお金を渴望せず、姦淫せず、不義を働かず、人殺してではない。

15 どうして人殺しが幼な子になれよう？ どうして盗人が幼な子になれよう？ どうして姦淫者が幼な子になれよう？ 怒り・貪欲（金銭欲）・色欲 — 三つの扉を通して人は奈落に入る。

## 不老不死の靈藥

16 大密儀の第四イニシエーションでイニシエイトはニルバーナを獲得し、限りない幸福のみが支配する神界に入る。大密儀の第五イニシエーションに達すると神々の山にたどり着くが、その頂上に通じる道が二つある。ひとつは山をぐるぐる取り巻いて頂上にいたる螺旋の道。もうひとつは「絶対」に直通する長くて辛く細い困難な義務の道。

17 マックス・ハイデルは人間の山について語る。この山の頂はニルバーナで、そこに

たどの着くには、小密儀の九つのイニシエーションと大密儀の五つのイニシエーションを通過せねばならない。

18 イニシエイトが人間の山の頂にたどり着くと、神々の山のふたまた道の前にいて、ここでイニシエイトの前に恐ろしい門番がひとり現れる。門番はイニシエイトにニルバーナの螺旋の道を示して、「これは良いワークだ。イニシエイトは宇宙の無限の世界、永遠に回転するもろもろの太陽、幸福にみたされたニルバーナの神々を目にし、言語に絶する樂園に幸せに暮らす。」と言う。それから、「絶対」に直通するまさに狭く困難な、長く辛い義務の道を示して、「これは高等なワークだ。二つの道のうち、どちらの道を進むか今すぐ決めないといけない。」と言う。イニシエイトが考えようとする、と、「考えてはいけない。今すぐ答えなさい。」と言う。

19 恐るべき瞬間である。なぜなら幾劫にもわたる運命がかかっているからである。我々の宇宙的進化の中で最も恐るべき瞬間である。人類愛ゆえにニルバーナを放棄するイニシエイトは、光栄にも三度確認される。無限にも思えるような長い時間の後、ニルバーナを得て人類愛ゆえにそれを失った後、ついに「絶対」に入る権利を獲得する。ニルバーナの螺旋の道を選んだイニシエイトには、活動期とニルバーナの幸福の中に憩う深い休息期とがある。ただきわめて長い間隔をあけて諸世界に化身するだけで、永劫の間、もう一度天球の無限の幸福にひたる。

20 彼らは罪の四つのからだを用いないので、星々の音楽の中で限りない幸福を味わう。そのように無限の永劫の後、ゆっくりと、ごくゆっくりと「絶対」に到達する。この道は極端に長い。1919年2月19日午後3時40分、ニルバーナは活動に入り、今やニルバーナの天使団は高次界に向けて進化を方向転換しようと奮闘している。

21 カルマの借金の重荷に苦しむニルバーナの住人がいて、宇宙顕現サイクルの間に返済する。マスターが転生する際の大きな危険は菩薩の墮落で、現在、この世には墮落した菩薩が無数にいて、マスターは彼らに合体して現れることができない。意志霊が未発達のため墮落するが、アストラル体に欲望が存在するかぎり菩薩は成長しないので、欲望を抹殺せねばならない。

22 マスターは「グローリアン（栄光）」ではきわめて光り輝くことができるが、墮落した菩薩を用いては苦悩する人類のために働けず、これはマスターがひどく苦しむことを意味する。

\* 「グローリアン」…内なるクリスト、神、セフィロトの王冠。

23 マスターとその菩薩は神秘的な二重の個性である。人類愛ゆえにニルバーナを放棄する菩薩は、不老不死の霊薬を求める権利を持っていて、それにより望むだけ長い永劫にわたって肉体を保存できるのである。

24 サンジェルマン伯爵は、17、18世紀にヨーロッパでまどっていたのと同じ肉体をまどって現在生きている。

25 ザノニは同じ肉体をまどって無数の歳月を生きた。

26 メグノウル Megnour〔未詳〕は同じ肉体をまどって無数の歳月を生き長らえた。

27 サナート・クマラは、1800万年前レムリアでまどっていたのと同じ肉体をまどって現在生きている。人類を守る防壁の偉大なマスターたちは、無数の歳月使った肉体をまどって生きている。クートフーミ、モリヤをはじめとする多くのマスターは大昔の肉体を保存し、死は彼らに打ち勝てなかった。そのように彼らは転生の危険、つまり環境・誘惑・遺伝等にさらされて菩薩が墮落する危険を避けてきたのである。ただ鋼のように固い意志を持つ者のみが決して墮落しない。

## 第 1 5 章 コウモリ神

1 メキシコ連邦区的美術館にはコウモリ神のアステカの彫刻が一体置いてある。たとえ園の住人に中傷されて黒魔術師と見なされても、コウモリ神について話そう。この彫刻は死の主要な天使団のひとつのアステカの貴重な象徴である。土星の影響下で働き、カルマの法にもとづいて霊を肉体から分離させる死の天使たちの象徴は、コウモリ、フクロウ、円形鎌である。死の天使たちは霊を肉体から取り出して、肉体と霊を結ぶ銀のひもを切る。

2 霊は睡眠中どこにでもトリップし、銀のひものおかげで肉体に戻ることができる。死の天使たちは作業中の外観は骸骨だが、その後は美しい容貌をする。実際に彼らは天使なのである。

3 コウモリ神はエデンの園のまん中に住む。コウモリ神は死の天使であり、殺す力があるのと同様にやす力もある。

4 アステカ人はコウモリ神を召喚するため馬蹄形のチェーンをつくっていた。そのチェーンの輪は結ばれておらず、誰も互いの手や体に触れず、祭壇側は開いていた。儀式の出席者は畏敬の念にみたされてしゃがみ、うずくまっていた。

5 全員がマントラ「イシス」(ISIS)を二音節で唱え、各文字の音を「イー スー イー スー」(iiiiii ssssss iiiii sssss)というようにのぼし、各文字の音をできるだけ保った。「ス」(S)はコオロギ(バッタ)や、アステカ人の中では聖蛇であるガラガラヘビの尾の音響器官のように発音する。「ス」は驚異と奇跡を起こしうる、かすかな声である。マントラは何度も続けて唱えられた。神官は海の貝殻の白い粉末の香を小さな香炉の中に投じていた。貝殻と聖火は内的に関連していた。香炉はテーブルに置いてあり、祭壇には生と死の象徴である二つの炎が燃えていた。神官は出席者のほうを振り向くと、鋭利なナイフで祝福し、心をこめてコウモリ神を呼んでいた。そのようにして恐ろしい死の天使団が参列していた。この儀式はノーシス神殿でも実践できる。

6 カルマの法の許可がおりればコウモリ神は病人を治療できる。どんなグループの人でも重病人の治療のためこの儀式を実践できる。この儀式をアステカ人は、今でもヒーナスの状態で存在する金むくの神殿で実践していた。

7 コウモリ神はアルカナ13の葬式の試練に居あわせる。イエスがアルカナ13に到達したとき、死者の墓地の中をさまよった。恐ろしい死の幽霊が、身の毛もよだつ夜の恐怖のなかでイエスを攻めたて、蒼白な死の亡霊が彼にゾットする過去を思い出させた。イエスは死の天使の最高審議会を打ち負かさねばならなかった。闘いはすさまじかったが、彼は勝利し、恐れなかった。そのとき「日の老いたる者」が激しい突風のように彼の中に入り、そのように子と父はひとつになった。これはアルカナ13で実現する。この過程は王冠を受

ける者全員でいつも同じであり、これは信仰と自然の密儀の第二イニシエーションに属する。

8 「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、<sup>オキコ</sup>幼子たちに現わしていただきました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。

9 すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません」〔『マタイ』11：25-27〕。

## ベタニヤでの晩餐

10 実際、不老不死の霊薬は、まっ白な、力にみちた陽電性と陰電性のガスである。イニシエイトが不老不死の霊薬を求める際、サナート・クマラの神殿に入り、聖なる資格と必要条件をすべて読んで聞かせられる。サナート・クマラは白ロッジのイニシエイト団の創始者で、他のレムリアのイニシエイトたちと共にゴビ砂漠のオアシスに住んでおり、彼ら全員が1800万年前から同じ肉体を保存する。サナート・クマラは「あなたは偉大な生贄の台に捧げられたもう一人の犠牲だ。」と言って、イニシエイトに祝辞を述べ、それから祝福する。

11 この後、玄関に「延命者のノーシス神殿」という銘が書いてある内的世界の別の神殿に入る。イニシエイトはアストラル体でそれらの神殿に参列し、そこでセレモニーの最中に不老不死の霊薬を受ける。

12 そのガスは生命の実質にとどまるが、後にアルカナ13の試練で死を克服せねばならない。その試練は実に恐ろしく、首尾よくそれに立ち向かうだけの勇氣を持つ人間はごくわずかである。いずれにせよ必ず死なねばならないと勝利者は注意される。実際に死ぬが、死なない。死後三日目、イニシエイトはアストラル体で自分の墓にやって来て、肉体を呼ぶ。運動の精霊、死の天使たち、その他の天使団がその作業を助けてくれる。

13 肉体は言うことをきいて、墓穴から起き上がると超感覚的世界に完全に浸透する。それから聖女たちがある薬品でその肉体を処理し、聖なる天使団が命と動きを吹きこむ。次に至上命令に従って肉体は松果腺を通してイニシエイトの中に入る。この腺はアストラル体の千弁蓮華、聖人の光輪、ダイヤモンドの目である。そのようにして死者の間からよみがえる。

14 復活したマスターはみな、肉体をまとして無数の歳月を生きる。ザノニは死者の間から復活した後、妻をめとるという過ちを犯したため、フランス革命の最中にギロチンで頭を失った。

15 そんな頂点では、イニシエイトはただ俗界の生命潮流を導くため生きるにすぎず、もはや妻を必要とせず、これがキューピッドの贈り物である。イニシエイトの肉体はヒーナスの状態にとどまる。それなのに望む所で目に見え、手で触れられるようになり、白ロッキにもとづいて物質界で働く。そのときから偉大な生命を管理する。火、風、水、地を支配する力を持ち、自然全体がイニシエイトの前にひざまずき、言うとおりにする。人間の中にまぎれこんで生きることができ、神人となる。当然、この高みに到達するにはアルカナ13の試練に合格することが不可欠である。

16 肉体は死のための防腐処理を施されるが、ベタニヤの晚餐がアルカナ13のこの出来事に対応する。死のための防腐処理を施された後、肉体は墓のために特殊な進化をし、それは数字の30と35の範囲内で展開する。30と35を加えるとアルカナ11、「飼いならされたライオン」になる。本性を飼いならし、それを克服せねばならない。肉体に墓の準備ができているとき、死と復活の過程があとに続く。この場合、死の天使たちは銀のひもを切らず、そのようにして死ぬが、死にはしない。イニシエイトの肉体の頭脳は特殊な変化にさらされ、もっと明晰鋭敏で素晴らしくなる。

17 ベタニヤの晚餐はイエス・クリストのこれらの過程に対応する。「さて、イエスがベタニヤで、らい病人シモンのおられると、ひとりの女がたいへん高価な香油のはいった石膏のつぼを持ってみもとに来て、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ。弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。『何のために、こんなむだなことをするのか。この香油なら、高く売れて、貧乏な人たちに施しができたのに』。するとイエスはこれを知って、彼らに言われた。『なぜ、この女を困らせるのです。わたしに対してりっぱなことをしてくれたのです。貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいないわけではありません。この女が、この香油をわたしのからだに注いだのは、わたしの埋葬の用意をしてくれたのです。まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう』」〔『マタイ』26：6-13〕。

18 死の神秘は壮大である。ヨルダン川から上がった後、イエスは砂漠の人気のない場所で崇拜すべき死の女神に出会った。死神である母神はアステカ人の間ではミエトランシワトル Mictlancihuatl という名で知られる。死の女神は死の天使たちの最高の長である。

19 死の女神は苦しみと悲嘆から我々を解放する唯一の存在である。

20 計り知れないほどの母性愛にいつもみたまされ、崇拜すべき優しい慈悲心にみたまされて、死の女神は我々をこの涙の谷、現世から何度も何度も連れ出してくれる。

21 苦しみの三つの鍵は月、姦淫する女性、濁った水であり、そういったものはすべてサント・マリアの身の毛もよだつ王国、奈落に属する。

22 祝福された死の女神は愛と慈悲心である。アステカ人は九つの頭蓋骨のある宝冠で死の女神を表すが、九とはイニシエーションである。

23 アルカナ13を実現する者は完全に解放される。死の女神は受けては与え、それゆえ四つの手で表された。

### 風神エヘカトル

24 アステカ人の風神エヘカトルはイエス・クリストの復活にかかわった。三日目にイエスの墓に入って、「イエス、肉体ごと墓から起き上がりなさい。」と大声で叫んだ。

25 エヘカトルはイエスの肉体に活動と動きを生じさせた。

26 エヘカトルはとうとい天使であり、運動の精霊である。運動の主たちは宇宙運動のすべての活動を支配する。アステカ人はエヘカトルを崇拝していた。「週の初めの日の明け方早く、聖女たちは準備していた香料を持って（アストラル体で）墓に着いた。ほかの女たちも彼女たちといっしょにいた」〔『ルカ』24章他、以下同じ〕。

27 イエスの肉体は内的世界の中に浸透し、ヒーナスの状態にとどまった。墓はからっぽであった。「ペテロは走って墓へ行き、かがんでのぞき込んだところ、亜麻布だけがあった。それで、この出来事に驚いて家に帰った」。イエスの肉体は香料と聖なる膏薬で処理され、それからアストラル体の松果腺からマスターの中に入った。そのようにして肉体をまとって復活し、ヒーナスの状態にあるその肉体はエマオ村の弟子たちの目に見えた。「彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった」。十一使徒にはイエスが復活したことなど信じられないように思えたが、そのときイエスは彼らの真ん中に立って、「平安があなたがたにあるように。」と言った。「彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った」。ただ彼らには死体が命を持てるとは信じられないように思えたからである。「すると、イエスは言われた。『なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています』」。そして肉と骨からなる生身のからだを持っていることをきちんと証明するため、食卓に着いて彼らといっしょに食事した。

28 後にマスターは東洋のチベットに向かった。

29 マスターは死者復活の教義を人類に教え、示した。性魔術を実践することにより、女性を深く愛することにより、愛し方を知ることにより、人はだれでも復活の至高の頂点に到達できる。

## シャンバラ

30 シャンバラは東洋のチベットの秘密の国であり、イエス・クリストは復活したまさにその肉体をまとめて現在そこに住んでいる。彼の密儀神殿もそこにある。その国はヒーナスの状態にあり、白ロッジの主要な僧院がそこに存在する。

31 大昔にさかのぼる肉体をまとったマスターが大勢そこに住み、ヒーナスの状態である。水面を歩いたときイエスは肉体をヒーナスの状態に置いていた。弟子はだれでも同じようにしてトリップできる。うとうとして、それから信念をもって眠ったまま夢遊病者のように寝床から起き上がりなさい。それから超感覚的世界に浸透するつもりで軽くジャンプしてみよう。ジャンプすると宙に浮かぶが、それがヒーナスの状態と呼ばれるものである。そのようにして空中に浮揚し、水面を歩く。すぐに成功する者もいれば、数ヶ月それどころか数年かかる者もいる。

32 世界のすみずみにまで白ロッジの僧院がヒーナスの状態に存在する。アストラル体やヒーナスの状態で我々の弟子はシャンバラを訪れて、クリストと話ができる。ガンダーラの都市から北東に向かう道があり、シータ川とバスタニ川に通じているが、これら二つの川の向こう側には二本の聖なる柱が存在する。やがて湖があり、ひとりの高齢のイニシエイトが旅人を秘密の国シャンバラまで案内してくれる。まったく隠れているため、この国は決して俗人には見つからないであろう。

33 復活したが今でもヒーナスの状態にあるまさにその肉体をまとめて、イエス・クリストは水瓶座の絶頂期に戻ってくるであろう。

34 後にそのマスターは、コラディー Koradhi という第六人種を啓発するため、南極大陸に戻ってくるであろう。

35 ずっと後、第七人種を教育するため戻ってくるであろう。

36 彼は世界の救世主であり、実際のところ我々を救えるのは燦々と光り輝く「私はある」のみである。イエス・クリストは「私はある」の教義をもたらしたがゆえに救世主なのである。ローマの司祭たちは主の秘密の教義を盗んだ。

37 クリストが柱に縛りつけられ、5千回ないしはそれ以上鞭で打たれているのを、恍惚状態にある神秘家なら誰もが、多くの精神主義スクール、宗教宗派の中に見ることができる。

38 それらのスクールや宗教はみな主を鞭で毎日打っている。

39 イエス・クリストの上にはもっと高等な存在がいると神智学者はまだ信じている。

40 イエス・クリストは「絶対」を放棄してこの涙の谷にやって来た「パラマールタサチャ」Paramarthasatya なので、神智学者は間違っている。

41 イエス・クリストはすべての霊たちの指導者、「絶対」の住人である。

42 「父よ。彼らをお救<sup>ゆる</sup>してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」〔『ルカ』23:34〕。

43 悪魔の弟子になる者は奈落に行って、崇拜すべき師（グル）である悪魔に同伴するであろう。我々は全員そのように言う。

### 第 3 部

## 第 1 6 章

# ノーシス運動

1 力にみちた普遍的ノーシス革命運動は意気揚々とあらゆる戦線で前進し、もはや何物も誰もこの光の凱旋行進を止めることはできまい。我々の長は主イエス・クリストであり、死者の中から復活したまさにその肉体をまとってチベットのシャンバラに住んでいる。他の多くのマスターはその肉体が復活の賜物であり、イエス・クリストといっしょに住んでいる。

2 我々は水瓶座の新時代の創始者である。

3 新時代において我々は地上にノーシス政府を樹立し、そのとき国境、税関、戦争、憎しみ等は消え去るであろう。

4 西洋におけるノーシス運動の中心的な本部は、南米コロンビア共和国サンタマルタのシェラネバダのノーシス最高大神殿 Summum Supremum Sanctuarium である。

5 シェラネバダの山々の中には我々の地下神殿がある。白ロッジの神殿はみな地中にあり、全世界の森林と山々の中にある。

6 ノーシス運動の総責任者は、ラテンアメリカのノーシス最高騎士団長フリオ・メデューナ V. である。

\*この第6節は英語版では省略されています。

7 ノーシス運動の最高本部は東洋のチベットのシャンバラである。〔ラテン〕アメリカ全土には無数のノスティックが住んでいる。

8 ノーシスの旗には二つの縞がある。上の縞が赤色、下の縞が白色で、これら二つの水平の縞の間には金色の大十字がひとつある。旗ざおの上には鉄の十字がひとつ付いている。我々は「私はある」(I Am)の信奉者である。私は正真正銘の水瓶座時代のアバターである。

9 こう主張するのを許していただきたいが、ノーシス運動は一スクールではなく、国際的、普遍的革命運動である。主の哀れなしもべ、惨めな罪人である私が、光り輝く「私はある」の威光について主張するのを許していただきたい。徳の欠如と罪の重さを感じて、私は「私はある」の前にひざまずく。

10 「私は」水瓶座のアバター「である」。「わたしは、天から下って来

た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です」〔『ヨハネ』6:51〕。私は新時代の創始者である。「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である」〔『黙示録』21:6、22:13〕。私はひとつひとつの原子、ひとつひとつの太陽に鼓動する力である。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです」〔『ヨハネ』8:12〕。私はあらゆる力の中で強い力であり、私にはあらゆる力が反映される。私は「ある者」である。全世界最強の力は愛の力である。私は愛の力である。

11 燦々と光り輝く「私はある」の前に謙虚にひざまずきなさい。

12 「彼」、「彼」、「彼」が、あなたがたの「唯一の」救い主である。

### ノーシス伝説

13 我々はローマの円形闘技場でライオンに投げ与えられ、地下墓地で儀式を行った。ローマ・カトリックの宗教裁判では生きたまま火あぶりの刑にされた。聖地ではイエス・クリストと行動を共にした。パレスチナの神秘的なエッセネ派であったが、日和見主義の教義を間に合わせに作っているのではない。二千年間隠れていて、古くて簡素な重い十字架を肩に背負って、今再び街に戻ってきたのである。

14 パウロ是我々の教義をローマにもたらしたが、彼はナザレ派のノスティックであった。

15 クリストは我々の教義をひそかに七十人の弟子に教えた。

16 セティアン派、ペラタ派、カルボクラテス派、ナザレ派、エッセネ派はノスティックである。エジプト、アステカ、ローマ、トロイ、カルタゴ、エレウシウス、インド、ドルイド、ピタゴラス学派、カンピール、ミトラ、ペルシャ等の密儀は全体的に見て、ノーシスとかノーシス主義と呼ばれるものである。

17 暗黒時代の到来と共に閉鎖された古代ノーシス神殿の扉を今再び開く。

18 我々は真のイニシエイト団を今開いている。

### 理論ではなく実践

19 もう人々は研究にうんざりし、やっと自分で知り、見て、聞いて、触れ、手でさわりたいと思っている。水瓶座の新時代は実践的な神秘家のためにある。意のままに幽体離脱し、ヒーナスの状態で肉体ごとトリップする方法を覚える必要がある。生身の体で宙に浮

揚し、内的世界に入り、死者の霊を訪れ、肉体で天使の世界に入る — これらはみな確かに魂の大勝利なのである。

20 そのようにして白ロジの神殿のすべてに移動し、偉大なマスターのおひざもとで学び、生と死の大神秘を知ることができる。そのようにして膨大な理論と膨大なばかげた主知主義から解放される。我々は弟子に忠告するが、「サンタマリア」の王国（奈落）の闇の人々とのかかわりを注意深く避けなさい。

21 闇の住人は幽体離脱は危険だとあなたがたに言うであろう。イエス・クリストになりすます危険な偽者からそのように学んだのである。彼らはきわめて複雑な理論であなたがたを恐怖と混乱に陥れるであろう。交霊会が最高だと確信させるため、心靈術者はあなたがたのマインドを混乱させようとするであろう。あらゆる心靈術センターには、いまわしい身の毛もよだつ奈落の悪魔が、口では言えないような聖人やイエス・クリスト本人として一般に現れる。哀れにもそれらの人々は、奈落のいまわしいラルバや悪魔の犠牲者であり、最も深刻なのは自分たちが光の側にいると確信していることであり、闇の住人は自分たちが間違っていることをひとりも信じない。幽体離脱は危険で、まだその時期ではないとあなたがたに言う者もいるであろう。このような人々は俗人よりも優れていると強く確信している。そういった人々はみな奈落に住み、おそろしいほどひどく傲慢で、恐怖と姦淫にみちている。みじめにも精液をこぼすがゆえに彼らは黒魔術師であるが、それにもかかわらず自分たちの有り様を決して認めない。あたたかい微笑みと見せかけの優しさをまじえて、崇拜すべき姦淫を洗練された詭弁と巧妙な哲学で弁護する。姦淫の協会はみな黒ロジである。マスター、グル、アバターラ、長兄、偉大な改革者、インド出身の王子等になりすます人々にとって、弟子が幽体離脱の仕方を覚えるのは不都合であり、自分自身の弟子に正体を暴露されるのを恐れる。しかも彼らは幽体離脱の仕方も知らず、まして人にそれを教えることなどできはしない。当然、哀れな信奉者を理論と恐怖で妨害しようとする。人種、信条、階級、肌の色等による差別のない偉大な普遍的な友愛団体を組織することを口実に、ひげや髪の毛を伸び放題にしておく人もいて、スクールというスクールを独占しようとする。恥ずべき犠牲者は哀れにも子ヤギの群れ、狭量で有害な狂信者に結局なってしまう。それが今の現実である。だから我々の弟子に忠告するが、奈落のそれらのスクールとのかかわりを注意深く避けるように。実際それが今の有り様なので、誰のあとを追わないのが一番よい。誰かのあとについて行くのはとても危険である。我々の「私はある」を崇拜しよう。

## 第 1 7 章 ヒーナスの状態

- 1 ヒーナスのこれらのプラクティスでまず必要なのは、弟子が厚い信仰心を持つことである。懐疑心にみたされた人はこれらの研究に入らないほうがよい。間違いになりかねないからである。
- 2 次に必要なのは聖ヨブよりも頑張るって辛抱することである。これらのプラクティスで頑張りが足りないと、必然的に失敗することになる。プラクティスを始めたものの、飽き飽きしてすぐにやめる者は、これらの研究には向いていない。遠ざかるほうがよい。
- 3 三つめに必要なのは組織だった方法と秩序をプラクティスに確立することである。
- 4 ヒーナスの状態の肉体でトリップする方法を覚えられるよう、弟子はハルポクラテス Harpocrates 神の力を利用してもいい。
- 5 プラクティス。めんどりの卵のいちばんとがった先端に小さな穴をひとつ開け、鋭利な器具を用いて黄身と白身を取り出す。その前に卵を水でゆでる。卵の殻にはハルポクラテス神の力が含まれているが、それはクリスティックな力が形を変えたものに他ならない。学徒は枕元か寝床のそばに卵の殻を置き、それからハルポクラテス神を召喚しながらうとうとする。まどろみときわめて深い信仰心とが必要だけである。「われは神を信じ、クリストを信じ、ハル・ポ・クラ・ティスト Har-po-crat-ist を信じる。われを肉体ごとノーシス教会に運びたまえ。」というように、信仰心を抱いてハルポクラテス神の祈りを唱えながら眠りこむべきである。この祈りを何度も焼けて心の中で唱え、それからうとうとして夢遊病者のように寝床から起き上がり、卵を手にして、それから「ハル・ポ・クラ・ティスト、肉体で行くので、われを助けたまえ。」と言いながら歩きなさい。家を出る前、できるかぎり遠くにジャンプし、正確な落下地点に印をつけなさい。翌晩、同じ場所を実験を繰り返えし、先の印を越えようとしなさい。眠りは宝物のように保たねばならない。パワーは眠りときわめて厚い信仰心にある。日に日に新たな進歩が見られるであろう。そのように、成功するまで何日も何ヵ月も何年も根気よく続けねばならない。飛距離が少しずつ伸びていくのは、大いに進歩しつつある明らかなサインであり、ヒーナスの状態に少しずつ入りつつあることを、それは示している。後に弟子は 3, 4 メートルないしはそれ以上ジャンプするようになる。頑張りが大変重要であり、そのようにして初めて成功する。ついに弟子は、通常の限界を越えて実際になんとか空中にとどまり、そのとき肉体はヒーナスの状態にあり、人々の目には見えず、不可視になる。その状態で肉体は内的世界の中に浸透していて、生理的特徴を維持したまま超感覚的世界の法則、空中浮揚、弾力性、柔軟性〔可塑性〕、多孔性等の支配を受ける。これは夢遊病を緩和したもの、つまり意識ある自発的な夢遊病なのである。
- 6 眠りと信仰心の力はすさまじい。そのように内界の神殿で直接教えを受けることがで

きる。

7 インドではヨガは肉体に「サンヤシ（綜制）」samyasi を行うことによって、ヒーナスの状態に入る。「サンヤシ」は同時に起こる瞬時の集中、瞑想、法悦からなる。我々はハルポクラテスのプラクティスでヒーナスに入る。サンヤシを行うときヨガは空を飛び、水上を歩き、やけどせず火をくぐり、大地の岩と洞窟に入る。瞑想のこの高みに到達する者は、もはや思考の「サンヤシ（綜制者）」である。西洋では西洋のヨガを利用するが、ハルポクラテスのプラクティスはその一部である。それを成就するための条件は信仰心、粘り強さ、沈黙である。他人に自分の勝利を触れまわる者はパワーを失い、ごろつきになる。その種の愚かな饒舌家はノーシス運動から追放すべきである。生身の体（ヒーナス）でチベットを訪れ、マスターたちやイエス・クリストと話ができる。ニール夫人は自著『チベットの跳びはねる行者たち』〔英語版『大密儀』では『チベットの魔術と神秘』と訳されている〕の中で、疲れることなく長距離を夢遊病状態で疾走するチベットのラマたちについて語っている。この行者たちをまねよう。我々はまったく実践的であり、知的放浪で時間を浪費したくない。そのように我々ノスティックは勇敢に話す。

8 今や人々は実践的な物事を望み、理論、知的放浪、搾取はもうたくさんである。実践的な問題にもどり、本題に入ろう。

9 姦淫と悪事のためにこれらのパワーを悪用する者は哀れである。これらのパワーを獲得する者は、ただ白ロッジの僧院を訪れるためだけに、あるいは自然の驚異を学ぶためだけに、それらを利用すべきである。ハルポクラテスのプラクティスを毎回実践した後は、内なる体に大量のエネルギーが蓄積されていき、それと共に肉体をヒーナスの状態に置くためのパワーを少しずつ獲得していく。強い忍耐が必要である。

10 これらのパワーを悪用する者は外の暗闇の中に沈むであろう。そこではすすり泣きと歯ぎしりだけが聞こえる。

11 そういう人は生まれなかったほうがよかったか、石を首にゆわえつけられて海に投げ込まれたほうがましである。これは神聖科学である。不幸にも人類はただお金と性交と犯罪を求めるだけである。

12 精神主義の兄弟姉妹は花束の中にいるマムシであり、俗人よりもひどい。

13 注意。眠りすぎると幽体離脱する。燃えるような信仰心を抱いて、まどろむと、ヒーナスの状態の肉体でトリップする。それゆえ眠りを調節できるようになりなさい。

## 想像力、インスピレーション、直観

- 14 想像力（イマジネーション）とは透視力そのものである。想像することは見ることである。
- 15 発明品を想像する発明家は、実際にそれを透視している。発明品はみな物質界に現れる前、内的世界に存在する。すでに内的世界に存在していたのである。発明家は発明品を想像してから、物質界に具体化する。画家は描こうとする絵を想像するが、その絵はすでに内的世界に存在する。
- 16 透視力を開発するには沈黙の仕方を知る必要がある。自分のビジョンを話す透視者はよくない。冒瀆ゆえにノーシス神殿から追放すべきである。額チャクラを回転させるとき、イメージは光と色と音にみたされて映る。それが訓練をつんだ透視力である。透視者は苦しみ方、沈黙の仕方、慎み方、死に方を知るべきである。
- 17 インスピレーション（靈感）。内的世界の象徴的イメージを解釈できるようになるとき、靈感認識に到達したのである。内的イメージは哲学的類推の法則、対立物の類推の法則、照応（コレスポンデンス）の法則、数霊術の法則にもとづいて解釈する。
- 18 敵は何に似ているか。猛牛である。雨は何に似ているか。涙である。
- 19 直観。論理的思考や推理をしなくても知るとき、高次世界で象徴的イメージを見て、その意味をただちに知るとき、直観的認識に到達したのである。直観的な人は論理的思考や推理をしなくても、すべてを知りつくす。水瓶座の新時代は直観の時代である。
- 20 マントラ「オーム」OM には額と心臓のチャクラ、透視と直観を目覚めさせるパワーがある。「オーム」を瞑想することによって悟りに達する。想像力、インスピレーション、直観はイニシエーションに必須の三つの道である。注意しておくが、他人に自分の秘教的事件を言いふらす覚者は神殿の冒瀆者になる。その種のノスティックはインストラクターが厳しくたしなめないといけない。

## 第 1 8 章 使徒の職

- 1 パワーを持ちたい者は人類のために犠牲になるべきである。
- 2 パワーは、統治者ロゴスが何か借りがあるとき、人間に報いる支払いである。何も借りがない者には何も支払われない。
- 3 太陽系の支配者はアティン Atin と呼ばれ、この偉大な存在はいかなる場合でも借りを支払う。
- 4 透視者は他人の生活をこっそり調べるべきでも、また誰かを裁くべきでもない。なぜならそれは間違っているからである。人は人であり、他人の生活はどうでもいい。我々の義務は偉大なる仕事で働くことであり、そのようにして給料が支払われるであろう。性魔術を実践することによって、悪癖を断つことによって、聖なる父の仕事で無私無欲に働くことによって、イニシエーション、位階、パワーは獲得する。
- 5 イニシエーションと位階の欲しい者は本書を研究し、それからそれを実践し、いたるところで誰にでもその教義を教え、使徒に、ノスティック・リーダーになりなさい。多くを無償で受け取り、多くを支払いとして受け取る。友人を呼び招き、人々を集め、この教義を教えなさい。力にみちた普遍的ノース革命運動のリーダーになりなさい。
- 6 天賦の才を備えた人たち、この教義を教えなさい。だが、それでビジネスをしてはいけないし、他人の生活をこっそり調べるため透視力を用いてもいけない。
- 7 謙虚な貧乏人、素朴で気さくな労働者で純粋な神殿をつくりなさい。世界を変えよう。水瓶座の新時代のために、いざ出陣。鎖を断ち切れ！ この教義をたずさえて戦いに行こう。パチカンの煙の立ちこめる廃墟の上にノースの旗をしっかりと立てよう。いざ、いざ、いざ出陣！ 今の腐敗し悪い邪悪なものすべてと戦おう。（身支度した）上流階級の若旦那、糊づけした襟の坊ちゃんたちの言うことをそのあたりで耳にするであろうが、彼らは何と言うであろう？ 実際、このごろはすべてが腐敗している。
- 8 聖なる父の偉大なる仕事で働きなさい。そのように借金を支払って、カルマの法から解放されるであろう。後にキリストに対する信仰によってあなたがたは義とされ（罪をゆるされ）、そのとき恩寵のもとに生きるであろう。罪の奴隷であるときカルマの法の支配を受ける。主のはしめであるとき、恩寵の働きのもとに生き、信仰によってすべてを受け取るであろう。恩寵や祝福としてパワーを授かるであろう。労働者は給料を受け取り、それは法からの支払いである。すでにおのれをキリスト化した者は天恵、パワー、栄光、威厳を恩寵や祝福として受け取る。法の存在しないところには罪もまた存在しない。聖なる父の偉大なる仕事のために献身し、おのれを聖化しなさい。

9 偉大なイニシエイトの属性とは何かを理解できるイニシエイトはごくわずかである。ノースの使徒には自分たちを裏切るユダ、自分たちを否定するペテロ、疑って自分たちを悩ますトマス、ざめざめと泣くマグダラのマリアが存在するものである。偉大なイニシエイトはきわめて素朴なため、過小評価されて軽蔑される。まちがった基準で定着した習慣にもとづいてイニシエイトに日常生活を送ってほしいと、誰もが思うであろう。偉大なイニシエイトの日常生活を判断する際、思慮深い人は誤る。あまりにも素朴すぎて思慮深い人には理解できないのである。ノースの使徒は沈黙の仕方、慎み方、死に方を知るべきである。

## 会合の秩序

10 会合は、規律正しく尊敬の念を抱いて行うべきである。

11 インストラクターは、マスターではなく「フレンド（友、君）」と呼ばれるべきで、内なるクリストのみがマスターである。ノース運動は没个性的であり、謙虚な貧しい労働者からなる。あらゆる人格主義を拒否し、いばりちらす専横な人を受け入れないでおこう。誰も人の上ではなく、我々の間では全員が労働者、左官、整備士、農民、作家、医者等である。

12 金の子牛の偶像崇拜は水瓶座時代には撤廃されたままとなるであろうが、ノース運動ではそれを拒絶する。一柱の火の神は我々に「水瓶座時代には資本は首を切られるであろう。」と言った。その偉大な存在は地球の火の層に住む。新時代にはインテリはいないであろうが、彼らはその野蛮さと邪悪さゆえに危険であり、彼らとのかかわりを避けなさい。新時代には金持ちも貧乏人もいず、偉大なる仕事の、尊敬に値し、品位のある働き手のみがいるであろう。それで終わりである。

13 我々の間では爵位も、医者、弁護士、グル、マスター、長兄、アバターラ等の<sup>まじろまじろ</sup>仰々しい肩書も認めない。我々全員が友であり、水瓶座は友のハウスである。

14 会合はみなこの教義のある部分の学習・解説から始めるべきである。唯一のマスターはクリスト、完全なる複合統一体である。我々人間は多少とも不完全である。

15 本書の著者である私は誰のマスターでもなく、私のあとを追わないでほしい。誰か他の人のように私は不完全であり、不完全な誰かのあとを追うのは誤りである。ひとりひとりが自分の「私はある」のあとを追うように。

16 新たな神殿ができるときは、ノース運動の総責任者たちに報告すべきである。そのようにして我々の支持を受け、支援されるであろう。我々は援助をこい求める者全員をつねに援助する。

## 人員選抜

17 現在、白ロッジの大イニシエイト団の兄弟たちは、新時代をスタートするため、羊から山羊を分けて人員を選抜している。人殺し、売春婦、泥棒の人員で光の時代をスタートするのは不可能であろう。神智学者やバラ十字会員であっても精液をこぼす者は誰でも悪魔になると、我々は言おう。神秘主義の泥棒、短気な人、人殺しも悪魔になる。今日、額に角をはやしている霊が数えきれないほど存在する。インティモから分離している悪魔である。その多くは善意にみち、誠実だが間違っているとはいえ、すでにこれらの霊は悪魔の段階に落ちてしまった。それなのに自分たちはすごい聖人だと信じている。なんと単純なのか。悪魔は奈落の住人になり、『黙示録』〔20：1－7〕の至福千年ミレニウムである水瓶座には生まれ変われず、山羊座（聖霊の時代）まで延期され、そこでラスト・チャンスが与えられるであろう。その時代にヤーベは肉体を持ち、パレスチナに生まれ、軍人になるであろう。そのとき奈落の住人たちは奈落の恐怖を味わった後、規律を守らせられ、クリストをとるかヤーベをとるか肉体の形で態度をはっきりさせないといけないであろう。

18 そのときユダヤ人はヤーベを約束された真のメシアとして推薦し、決定的に邪悪なパーソナリティーは奈落でヤーベについて行く。結局、連続する永劫を通じて粉々に崩壊するであろう。

19 それらのパーソナリティーのモナド、インティモは、新たなパーソナリティーをまとして落伍者の段階で進化を続けるであろう。永劫の後、必然的にゴールに達するであろう。現人類の進化は失敗してしまった。この大バビロンはそっくり火と血で破壊されるであろう。人類の半数以上が額に角をはやしているが、これらの霊はゆっくりした困難な恐ろしい進化を続ける。アーリア人種は今の全人類であり、大淫婦は奈落の底に落ちるであろう。神々は大淫婦を裁き、価値なきものと見なした。奈落！ 奈落！ 奈落！

20 第三次世界大戦が始まる前、彼らはいろいろな方法で平和を求めるが、インテレクトは完全に失敗するであろう。

## 第 19 章 世界のカルマ

1 水瓶座の新時代がスタートする前、全国家は巨額のカルマ的負債を支払わねばならないであろう。人類の利益のため東西間に戦争があり、そのように主エホバは語る。東洋の勝つことが知られている。

2 「水瓶座時代には資本は首を切られるであろう」。「合衆国は罰を受けるであろう」。そのように法に書いてある。パチカンは砲撃や爆撃を受け、血と火で破壊され、まもなく恐るべき負債を支払うであろう。スペインは変わり、全ヨーロッパはすっかり共産主義化するであろう。南北両アメリカは水瓶座のサインの間に大連盟を形成するであろう。陸海空どころか両極でさえ戦いが行われるであろう。東洋が勝つであろう。2018年には電球やポータブルランプですら原子力が利用されるであろう。

3 ちっぽけなスクールをひとつにすることによって新時代を開始するつもりだと愚かな人々は信じている。哀れな人々。マムシのこの邪悪な文明の煙の立ちこめる廃墟の上に、新時代はスタートするであろう。

4 2500年には大都市に宇宙船のステーションができるであろう。

5 1962年2月4日午後2時から3時にかけて水瓶座時代がスタートした。

6 宇宙船問題を協議するため高次世界でマスターの大会議が開かれ、人類に宇宙船を引き渡すべきかどうか決められようとしていた。マスターはひとりずつ意見を述べた。地球人類が他の太陽系惑星に行って、あらゆる歴史的征服の期間にここですでに犯したのと同じ犯罪と悪事を犯すのではないかという恐れがある。人類への宇宙船譲渡が何を意味するのか理解するには、メキシコでのエルナン・コルテスの犯罪、ペルーでのピサロの犯罪を思い出すだけでこと足りる。

7 新時代のイニシエイト〔英訳者はイニシエーター、創始者と訳〕の肩書で最後に意見を述べねばならなかったのは、本書の著者、あなたがたの卑しいしもべであった。

8 我々は人類の比較研究をせねばならなかった。地球の住人は失敗してしまった。金星の住人ははるかに進歩していて、すでに善の中の悪を認識し、悪の中の善を認識する。火星の住人は地球人などより少し進化している。苦悩に満ちたこの、あなたがたのしもべは言葉の重責を理解して、「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」〔『マタイ』26:39〕と言うだけにとどめた。私の「私はある」はそのとき「天体間の関係を確立しなさい。」と言った。進歩したどの人類もその宇宙船を持っていて、それらの飛行範囲が地球人に引き渡されるであろう。ある一部の科学者はこの宇宙船

をつくろうとしても、できず、そのプライドは死ぬほど傷つくであろう。他の天体の住人がその建造を教えに来るであろう。そのように、「悪党」の科学は致命傷を負い、科学者は他の太陽系住人の前にひざまずかねばならないであろう。

9 今世紀の科学者は宇宙征服を口実に人工衛星を打ち上げ、無防備な国家や国民を有利に砲撃するための基地を実際に設立したがっている。

10 水瓶座〔時代〕には別惑星の住人が地球に大勢定住し、水瓶座のインストラクターとなるであろうが、もうチベットにこっそりと住んでいる者もいる。他の太陽系惑星への旅行はありふれたものとなるであろう。それは我々の進化に提供される特別の援助である。核エネルギーの乱用によって火山が目覚め、そのとき現アリア人種の第七亜人種の最期まで、全面的な地殻変動をもたらす大地震と海底大地震が起こるであろう。アリア人種はこれらの天変地異で滅亡するであろう。

11 後に第六人種が南極大陸で繁栄するが、肉体はより小さいが、霊はより大きく、十二の感覚は発達しているであろう。その人種のアバターは木星のリージャント（摂政）、サチャリエルで、第六の真理を教えるため肉体をまとうであろう。

12 新時代の卑しいしもべ、私サマエルは、あなたがたに第五の真理を教えただけである。人間よ、聞きなさい。第五の真理とは性魔術のことである。ガブリエルは第一人種のアバターであった。ラファエルは第二人種のアバターであった。ウリエルは第三人種のアバターであった。ミカエルは第四人種のアバターであった。私サマエル・アウン・ベオールは今の第五人種のアバターである。サチャリエルは第六人種のアバター、オリフィエルは第七人種のアバターであろう。

13 七つの真理が存在する。I. この世の苦しみと不幸の知識。II. 人間のもろさの知識。III. 欲望と罪の知識。IV. 人間のマインドの知識。V. 知識の木。VI. 人間の意識。VII. 生命の木。七人のアバターと七つの真理があり、ひとりひとりが恐るべき真理をひとつ教える。イエス・キリストはアバターではなく、すべての者を超越し、救世主、すべての霊の長であり、アバターたちの教えを確かなものとし、詳しく説明する。水瓶座のピーク時にやって来て、サマエルがあなたがたに与えた教えを揺るぎないものとするであろう。他の人種でも以下同様である。イエス・キリストがしもべである預言者たちに告知したように、そのときには神の国が成就しているであろう。

14 各人種は天変地異で終わる。奈落の穴は今開いていて、そこから立ちのぼる煙は戦争、飢饉、貧困をもたらす。20世紀全般から21世紀の一部にかけて致命的な戦争が何回か起こるであろうが、今や、獣の印を両手と額に持つ霊はみな奈落に入りつつある。七人の御使いのひとりひとりが、大天変地異のためにラッパを吹いてしまった。第五の真理、「知識の木」を受け入れようとしない者は気の毒である！ 『黙示録』第8、9、10章を読んでみるといい。すべての国が荒廃し、破壊され、大いなるバビロンは奈落に沈むであろう。

## 第 2 0 章 コンジュレーション

1 儀式前だけでなく、まどろんでいる最中にも心の中で唱えて（そのようにして睡眠中に最高の宇宙意識層に移動するからである）、高等な聖天使団から援助を求められるよう、我々ノーシス学徒はコンジュレーション〔悪魔払いの呪文〕とインボケーション〔神々への祈念の呪文〕を知り、暗記すべきである。それらは闇の攻撃から、あるいは危急の際、身を守るすばらしい武器としても役に立つ。我々は闇から身を守るすべを知るべきである。コンジュレーションは信仰心をこめて祈るべきである。

\* スペイン語版典礼書を参考にした箇所もあります。特に四のコンジュレーション、風のエクソシズム、水のエクソシズムはラテン語の本来の発音を重視して音訳しました。

### 四のコンジュレーション

2 カプット モルトゥウム、インペレット ティビ ドミヌス ペル ウィウム エト  
Caput mortuum, imperet tibi dominus per vivum et  
デウォトゥム セルペンテム。

devotum serpentem.

3 ケルupp、インペレット ティビ ドミヌス ペル アダム ヨット カ ウァ。  
Cherub, imperet tibi dominus per Adam Jot Cha Vha.

4 アクィラ エランス、インペレット ティビ ドミヌス ペル アラス タウリ。  
Aquila errans, imperet tibi dominus per alas tauri.

5 セルペンス、インペレット ティビ ドミヌス テ・トラ・グラ・マ・トン、ペル  
Serpens, imperet tibi dominus te-tra-gram-ma-ton, per  
アンゲルム エト レオネム。

Angelum et leonem.

6 ミカエル、ガブリエル、ラパエル、アナエル!

iMichael, Gabriel, Raphaël, Anael!

7 フルアット ウドール ペル スピリトゥム エロヒム。

Fluat udor per spiritum Elohim.

8 マネアット テーラ ペル アダム ヨット・カヴァ。

Maneat terra per Adam Jot-Chavah.

9 フィアット フィルマメントウム ペル イアフウェフ・ゼバオト。

Fiat firmamentum per Iahuvehu-Zebaoth.

10 フィアット ユディキウム ペル イグネム イン ウィルトゥテ ミカエル。

Fiat iudicium per ignem in virtute Michael.

11 死んだ目の天使、この聖水に従え、消え失せろ。

- 12 羽根のついた雄牛、この剣で刺されたくないのなら、働け、土にもどれ。
- 13 鎖につながれたワシ、この印 + に従え、この一吹きに消え失せろ。
- 14 変わりやすい蛇、われの足もとにはいつくばれ。さもなくば聖なる火によって苦しみもだえさせられるだろう。そしてわれのたく香とともに蒸発せよ。
- 15 水は水にもどるよう。火は焼き焦がすよう。空気はめぐるよう。明けの明星であるペンタグラムの効力により、そして光の十字の中央に書かれたテトラグラムの名により、土は土の上に落ちるよう。アーメン。アーメン。アーメン。

## 七のコンジュレーション

- 16 ミカエルの名において、ヘホバがおまえに命令し、遠のけるように、チャバホット！
- 17 ガブリエルの名において、アドナイがおまえに命令し、遠のけるように、バエル！
- 18 ラファエルの名において、エリアルの前から姿を消せ、サンガビエル！
- 19 サマエル サバオトにより、そしてエロヒム ギボールの名において、立ち去れ、アンドラメレック！
- 20 サチャリエルとサチェル・メレックにより、エルバーの前に従え、サナガブリル！
- 21 シャダイの神聖な、人間的な名により、そしてわれの右手のペンタグラムの印により、天使アナエルの名により、ホッ・チャバであるアダムとイブのパワーにより、さがれリット！ 我らに手をかけるな、ナヘマ！
- 22 聖なるエロヒムにより、そしてカシエル、セアルティエル、アフィエル、サライエルの神々の名により、オリフィエルの命令により、さがれモロッチ！ 我々はおまえのえじきに、我が子をささげたりはしない。
- 23 アーメン。アーメン。アーメン。

## ソロモンのインボケーション

- 24 王国の威力、われの左足の下と右手の中に位置したまえ！
- 25 栄光と久遠、われの肩にふれ、勝利の道にわれを導きたまえ！
- 26 慈悲と正義、われの人生の均衡と榮譽となりたまえ！
- 27 知性と智恵、われに冠を与えたまえ！
- 28 マルクットの魂、寺院の建物全体をささえる二本の柱の間にわれを導きたまえ！  
ネッツアーとホッドの天使、イエソッドの立方石の上にわれをしっかりと立たせたまえ！
- 29 おー ゲドゥラエル！ おー ゲブラエル！ おー ティフェレット！ ビナエル、  
われの愛となりたまえ！ ルアフ ホフマエル、われの光となりたまえ！ 御身のある姿、  
そして御身のあるであろう姿となりたまえ！ おー ケテリエル！
- 30 イッシム、シャダイーの名において、助けたまえ！
- 31 チェルビム、アドナイーの名において、われの力となりたまえ！
- 32 ベニー・エロヒム、子クリストの名において、サバオットの徳により、われの兄弟と  
なりたまえ！
- 33 エロヒム、テ・トラ・グラ・マ・トン名において、われの代りに戦いたまえ！  
〔別訳：われのために〕
- 34 マラヒム、ヨッド・ヘー・パウ・ヘー名において、われを守りたまえ！
- 35 セラフィム、エロアー名において、われの愛を清めたまえ！
- 36 ハスマリム、エロヒムとシェシナーの光彩によって、われを輝かせたまえ！
- 37 アラリム、働きたまえ！ オファニム、回りたまえ、さん然と輝きたまえ！ ハホッ  
ト ハ カドッシュ、さげびたまえ、語りたまえ、うなりたまえ、ほえたまえ！ カドッ  
シュ、カドッシュ、カドッシュ、シャダイー、アドナイー、ホッチャバ、エイエアセレイ  
エ。
- 38 ハーレルヤ。ハーレルヤ。ハーレルヤ。
- 39 アーメン。アーメン。アーメン。

## 高等魔術のセレモニー

40 高等魔術のセレモニーでは自然の四大要素の魔を払<sup>エクソシズ</sup>うべきである。これらのエクソシズムは暗記すべきである。病人に飲み物を与え、水で預言し、嵐を遠ざけ、空間のシルフの魔を払うため必要になるかもしれないからである。またある時には火事をくい止めたり、サラマンダーやノーム等に命令したりするため必要になるかもしれないからである。

### 火のエクソシズム

41 火のエレメンタルには剣をもって命じる。南を向いて、こう言う。

ミカエル、太陽と光線の王。

サマエル、火山の王。

アナエル、アストラル光の王子。

我らを助けたまえ、

クリストの名において、クリストの威厳にかけて、クリストのパワーにかけて。

アーメン。

42 それから火のついた炭の入った香炉に香をつぐ。

### 風のエクソシズム

43 鳥の羽根を手に持って東西南北の四方に息を吹きかける。東を向いて、こう言う。

44 スピリトゥス デイ フェレバトゥル スペル アクァス、エト

Spiritus Dei ferebatur super aquas, et

インスピラウィット イン ファキエム ホミニス スピラクルム ウィタエ。シット

inspiravit in faciem hominis spiraculum vitae. Sit

ミカエル ドックス メウス エト サブタビエル セルウス メウス、イン ルケ

Michael dux meus, et Sabtabiel servus meus, in luce

エト ペル ルケム。

et per lucem.

45 フィアト ウェルブム ハリトゥス メウス、エト インペラボ スピリティブス

Fiat verbum halitus meus; et imperabo spiritibus

アエリス フィユス、エト レフレナボ エクォス ソリス ウォルンタテ コルディス

aeris hujus, et refrenabo equos solis voluntate cordis

メイ、エト コギタティオネ メンティス メアエ エト ヌトゥ オクルティ

mei, et cogitatione mentis meae et nutu oculi

デクストリ。

dextri.

46 エクソルキソ イギトゥル テ、クレアトゥラ アエリス、ペル

Exorciso igitur te, creatura aeris, per  
ペンタグラマトン、エト イン ノミネ テトラグラマトン、イン キュプス スント  
Pentagrammaton, et in nomine Tetragrammaton, in quibus sunt  
ウォルuntas フィルマ エト フィデス レクタ。アーメン。セラ、フィアト。  
voluntas firma et fides recta. Amén. Sela, fiat.

そうありますように。シルフとシルフィド、われに従いたまえ、クリストにかけて、クリストにかけて、クリストにかけて。アーメン。

## 水のエクソシズム

47 西を向き、コップ一杯の水を両手で持ち、こう言って水の生き物に命じる。

48 クリストの名において、クリストにかけて、クリストにかけて、

フィアット フィルマメントウム イン メディオ アクアルム エト セパレット  
Fiat firmamentum in medio aquarum et separet  
アクァス アブ アクィス、クァエ スーペリウス シクゥット クァエ  
aquas ab aquis, quae superius sicut quae  
インフェリウス、エト クァエ インフェリウス シクゥット クァエ スーペリウス、  
inferius, et quae inferius sicut quae superius,  
アド ペルペトランダ ミラクラ レイ ウニウス。ソル エイユス パーテル  
ad perpetranda miracula rei unius. Sol ejus pater  
エスト、ルナ マーテル エト ウェントゥス ハンク ゲスタウィット イン  
est, luna mater et ventus hanc gestavit in  
ウーテロ スオ、アスケンディット ア テラ アド コエルム エト ルルスス ア  
utero suo, ascendit a terra ad coelum et rursus a  
コエルオ イン テラム デスケンディット。エクソルキソ テ、クレアトゥラ  
coeluo in terram descendit. Exorciso te, creatura  
アクァエ、ウト シス ミヒ スペクルム デイ ウィウィ イン オペリプス  
aquae, ut sis mihi speculum Dei vivi in operibus  
エイユス、エト フォンス ウィタエ、エト アブルーティオ ペカトルム。アーメン。  
ejus, et fons vitae, et ablutio peccatorum. Amén.

## 地のエクソシズム

49 棒を持ってノームの<sup>エクソサイズ</sup>魔を払う。北を向いて、こう言う。

50 聖なる都の十二の石の名において、  
隠されたタリズマンにかけて、  
世界をつらぬく磁石の釘にかけて、

大地の地下労働者たち、我はおまえたちの魔を払う、  
クリストの名において、クリストの血にかけて、クリストの愛にかけて。  
アーメン。

## 不可視になる秘密

51 愛する人が亡くなっても嘆き悲しまず、苦悩のそのエネルギーを安らぎ、喜び、幸福の波動に変換しなさい。望むたびに意のままに不可視になるパワーに哀悼の念を変換しなさい。「本性を変えなさい、そうすれば探し物が見つかるであろう」。変換の科学であらゆるパワーが得られる。イエスはそのパワーを持っていた。「死はあらゆるものの冠である」。哀悼の念やすすり泣いて、肉体を去った霊のことを深く悲しむべきではない。喜びと安らぎを与えて死者のために祈ろう。

## 植物魔術

52 黒魔術師から身を守るために。地面に、レモンの木のまわりに円をひとつ描き、木の近くに水を入れた穴をひとつつくる。九つの小さい棒切れを三つずつの三つのグループに分けて穴の中に突き刺す。たき火をして、自分のために働いてくれるようエレメンタルに頼む。一本一本の木には恐るべきパワーを持つ木霊が宿る。レモンを一個じっと見つめて、それをもぎ取り、火に投げ入れる。もしそのレモンが爆発して爆音が生じたら、それは黒魔術師が作業をしているということである。身を守ってくれるようエレメンタルに命じ、三つずつもぎ取って、一個ずつ九つのレモンを火に投げ入れなさい。火に落としたレモンは、それぞれアストラル界で爆弾のように爆発し、黒魔術師の作業を破壊してくれるであろう。エレメンタルは木から出てきて一匹の犬の形をとり、闇の住人たちを攻撃してくれるであろう。

## 招神

53 火、風、水、地の四つのエクソシズムを唱え、それから一緒になって働いてくれるマスターを召喚しなさい。祭壇前で作業を行うべきである。

54 ある個人的問題を解決する必要があるときは、カルマの偉大なマスター、アヌービスとその四十二人の法の裁判官を召喚すべきである。このように手続きを取りなさい。「クリストの名において、クリストの名において、クリストの名において御身を召喚する。アヌービス、アヌービス、アヌービス。アーメン」。それから祭壇に向かい、望みの援助を求める。カルマの裁判官たちは法にしたがって我々の苦境を打開してくれるであろうが、法に違反することはできない。願いが聞き入れられないときは抗議すべきではない。功德が足りないからであろう。審判に会釈すべきである。

55 病人の治療にはラファエル、パラケルスス、アエスクラピウス等を召喚する。

\*アエスクラピウス…古代ローマの医療の神。ギリシア神話のアスクレピウスに相当。

56 七柱の惑星守護神と作業できる。そのおのおのが自分の分野のスペシャリストである。ガブリエルは生殖と関係する。ラファエルは医学、ウリエルは愛、家族、子供等、ミカエルは高官や高僧、サマエルは力、サチャリエルは権力、オリフィエルは土、鉱山等と関係する。以下のようにクリストの名において、三度その名を唱えて彼らを呼ぶことができる。「クリストの名において、クリストにかけて、クリストにかけて、御身、栄光ある（召喚する神々の名前）を呼び、こい求める（ここで請願）」。

57 そのようにして儀式形式の白魔術で働く。神々は法にもとづいて我々を助け、法を破ることはない。他人を強制するために念力を用いるべきではない。それは黒魔術である。法を尊重しよう。

58 いつこれらの知識を活用すべきかは、すぐれた感覚が教えてくれる。このような問題を知るため透視力と直観力を開発する必要がある。取りつかれた人から悪魔を払うのに、また闇の住人から身を守るのに七のコンジュレーションが役に立つ。



## 第 2 1 章 独身者の性問題

1 プラーナヤマは独身男女のための性エネルギー変換法である。すでに知られているように、男性の睾丸と女性の卵巣から二つの神経節の索が出て、脊髄に 8 の字形に巻きつき、脳まで達している。これらが『黙示録』の語る二人の証人である。ザカリヤの語る二本のオリーブの木。全地の神の御前にある二つの燭台。内側が空洞になっているこれらの神経組織は、性エネルギーが脳まで上昇する細い導管である。

2 学徒は左鼻窩<sup>びか</sup>から息を吸い、右鼻窩から吐く。逆も行う。親指と人指し指で交互に鼻窩を制御する。右鼻窩から息を吸うときは、光り輝く崇高な太陽原子が右の神経索を脳まで上昇していくのをありありと想像する。息を止めて、それから眉間、のど、心臓に次々と導いていき、想像力と意志で心臓にそのエネルギーをとどめながら息を吐く。左鼻窩から息を吸うときは、命の清水のような月原子が左の導管を上昇していくのを想像し、同じルートで心臓にとどめる。それから深い信仰心をこめて息を吐く。そのようにして独身の男女は性エネルギーを変換できる。独身男性はクリスト化したいなら妻を捜すべきである。

3 ノスティックの秘教家は結婚の際に、はじめて性的なふれあいが許される。性魔術なくして火を目覚めさせることはできない。純潔なくして、これらの研究で何も成就しない。欲望、我、思考を殺しなさい、そうすれ解脱者となるであろう。本当の結婚というものは、この野蛮な人類の形ばかりの社会的、宗教的儀礼とは無関係である。真の結婚とは魂と霊とセックスにおけるカップルの結合である。本当の結婚はハスの花のように清らかであるべきである。

### 独身者の秘教的なマントラ発声

4 母音「イ」によって額チャクラが目覚め、透視者になる。

5 母音「エ」によって甲状腺<sup>てん</sup>チャクラが目覚め、透聴能力者になる。

6 母音「オ」によって心臓チャクラが目覚め、直観能力者になる。

7 母音「ウ」によって太陽神経叢が目覚め、テレパシー能力者になる。

8 母音「ア」によって過去生を思い出すための肺チャクラが目覚める。心の中で、マントラの発声をプラーヤマと結びつけ、各母音をきわめて長くのばして発声する。次の順序で発声できる。イ... エ... オ... ウ... ア... 。風、ハリケーン、そよ風の音を心の中でまね、別々に各文字を発声すべきである。

9 男性（人間）はこれらの研究とプラクティスでクリストの段階を獲得できる。女性は

聖母の段階を獲得する。法の乙女リテランテスはパワーにあふれている。一万一千人のインカの乙女は言語に絶するほど神聖である。海の乙女はイエスの母マリアであった。汚れなき無原罪の乙女が無原罪の懐胎を導く。星の乙女等。完全無欠、ニルバーナに達した女性は大勢いる。

10 ひとりの乙女が自分の「私はある」を具現したいと思うときは、ニルバーナを放棄して、男性の肉体をまとわねばならない。海の乙女はクリストの段階に上昇するためエジプトで男性の肉体をまとった。

\*後のいくつかの著作で、高次世界でのさらに多くの観察と調査研究の結果として、V. M. サマエル・アウン・ベオールはこの点を訂正し、女性でも自己実現の最高段階を獲得できると述べている。彼はそれほどじゅうぶんクリスト化した女性のマスターたちを高次世界で観察した（英訳者注）。

11 本書はこれでおしまいである。不幸にも、ノーシスのための準備ができていない者は指を折って数えられる。我々はこの準備ができていない二人の人物と出会っただけである。無学文盲の、インディオひとりと女性ひとり。知りたい者は、現実の大いなる破壊者マインドを殺さねばならない。

## 用語角解説

アートマン：インティモ。魂。本質的存在。

偉大なる氣息：「言葉」。

エデンの園：エーテル界。

エヘカトル：運動の精霊。

エレメンタル：自然界の精。

カーリー：ヒンドスタンの黒魔女。

カルマ：因果応報の法。

クーラ：暗黒教団。

クリスト：観音。ロゴス。中心太陽。声の軍隊。

黒魔術師：姦淫者。

クングリニー：脊髄の火。

ケツァルコアトル：火の蛇。

サンタマリアの王国：奈落。

敷居の門番：我。

白魔術師：純潔的存在。

性魔術：大アルカナ。

セフィロトの王冠：神。グローリアン（栄光）。原子の糸。内なるクリスト。

「私はある」。

ソマ・プチコン：霊の婚礼衣装。

ダルマ（徳、功）：ほうび。  
タントラ行者：閻の住人。  
チャクラ：内的感覚。蓮華。  
低位アストラル：月体。敷居。  
ナーディ：導管。  
ニルバーナ：神界。  
ニルマナカーヤ：ニルバーナを放棄した菩薩。  
ノーシス：知識。  
パラマールタサチャ：「絶対」の住人。  
ハルポクラテス：ひとりのマスター。  
ヒーナス：四次元の科学。  
ブッダ：完全なる存在。  
ブッディ体：意識霊。  
マントラ：神秘力をもつ言葉。

## 最終指導

12 ノスティックはお互いの間ではマントラ「パス・インベレンシャル」で挨拶すべきである。ノスティックは絵画の中のイエス・クリストのサイン、つまり右手の親指と人差し指と中指をのばしたサインで相互に認識すべきである。

13 ノスティックはミスター、ミセス（さん）、ジェントルマン（あなた）、フレンド（君、友）等という言葉で呼びあうべきである。「ブラザー」〔しいて訳せば「きみ、おまえ」〕という言葉におおい隠されて、乱用、相互の尊敬の喪失、無秩序、姦淫、不倫、盗み等に至ったので、その言葉の使用は禁じる。人類にはそんな高尚な言葉を用いる準備がまだできていない。相互の尊敬、品位、礼儀を保とう。この「ブラザー」という言葉は第二室、第三室の秘教的会合の間でのみ使いなさい。

EL FIN



訳者の注意書きより

第20章「コンジュレーション」のラテン語は正しく音訳しておきました。

例. Vは「U」に、Cは「K」の音になります。PH, CH はHを発音しません。

vivum ウィウム luce ルケ Michael ミカエル

Raphael ラパエル

ejus 母音+J+母音なので「エイユス」となります。

ミゲルさんはスペイン語式に「ルセ」「ミチャエル」「ラファエル」「エフス」としたのです。

ソロモンのインボケーションで

「ハスマリム、エロヒムとシェシナーの光彩によって」

「王国の威力、われの左足の下と右手の中に」

「マルクットの魂、寺院の建物全体を」

『大密儀』英語版、スペイン語版だけでなくスペイン語典礼書にはちゃんとこう書いてあります。七の呪文でバエル、ベリアル、エリアル、サンガビエル、サナガブリル等も同様。あと、「ヒーナスの状態」で「サンヤシ」という言葉がでてきますが、たぶんこれは「サンヤマ」の間違いでしょう。絶対そうだとは言い切れないので、原文を尊重しておきました。